始まるのであつた。俺は俺自身を最後の線にまで解剖した。俺自身を他の人間と比較した。その人に向つて俺が俺自身をうち開かうと試みた人達の最も何でもない眼眸や、微笑や言葉やを思ひ出した。それら一々の上に最も悪い建物を築きあげた。俺は「他のあらゆる人間の様であらう」とする俺自身の試みを復讐的に笑つた。――そして突然、この笑の最中に、全く陰欝な氣持の底にへたばり、馬鹿げた銷沈にまで沈むのであつた。そしてそれから又前と同じことを始めた――實際、車輪の上の栗鼠の様にぐる〳〵廻り始めるのであつた。毎日毎夜がこの煩はしい、無駄な運動に費された。で、さて、何卒俺に言つて県れ、何人に何の爲にかういふ人間が役に立つか？　何故これが俺の身に起つたのか？　何が俺自身に對するこのくだらない腹立ちの理由だつたか？――誰が知つてゐるか？　誰が言ふことが出來るか？

俺は憶えてゐる、一度俺は莫斯科から馬車を驅つたことがあつた。道路はよかつた、然るに馭者は四頭の馬を附けてあるにも拘らず、いま一頭を彼等の傍に附けた。さういふ不幸な、全然無用な第五の馬――それは轅の前に短い巌丈な綱でしつかり繋がれてゐた。綱は無慈悲に彼の肩に喰ひ入つて、彼に最も不自然なふうに走ることを强ひ、彼の軀に一個の點の形狀を與へた――は常に俺の最も深い憐憫の情を惹き起す。俺は馭者にその場合第五の馬は無い方がよか

らうといふ俺の意見を言つた。……彼はちよつとの間默つてゐた、頭を振つた、その馬の膨れた腹を瘠せた肩を越して十二三度も犇々と打つた、そして齒を剝き出して答へた。『えゝ、そりや確かでがせう。何で俺等は彼奴を連れて行くんだ？　全體彼奴は何の爲に居やがるんだらう？』而してこゝで俺も同樣に曳きずられて行つてるんだ。しかし、仕合せにも、行き着く先はもう遠くないのだ。

よけい者。……俺は俺の意見の正しいことを證據だてようと約束した、でこの約束を果さうと思ふ。無數の些細な事實、日常の偶然な或は偶然ならざる出來事について態々話す必要はないと思はれる。しかしそれ等も誰もよく考へる人の眼に附けば、俺の助けとなる――俺の議論の助けとなる動し難き證據として役立つであらうが、だが俺は或る寧ろ重大な出來事から始める方がよからう。それを話せばよけい者といふ言葉の適切なことについて疑ひが殘らぬに違ひない。繰り返しておくが、俺は些末な事實のお饒舌りに耽る積りはない、がこゝに默つて見逃し難い一つの寧ろ重大なそして意味のある事實がある。それは俺が俺の友人に遇つたり、彼等を訪ねたりした（俺にも始終友人はあつた）時に彼等がいつもとつた不思議な態度である。彼等はそは〳〵と落ちかない樣子に見えるのが常であつた。彼等の方から來る時には、彼等はあま

り自然でない微笑をして、或る人々がするやうに俺の眼を覗入つたり足下を見たりはせずに、寧ろ俺の頬を覗て、遑たゞしく『やあ！　どうだね、チユルカチユリン！（さういふのが運命が俺に荷はせた俺の苗字であつた）或は―やあ！　チユルカチユリンかい！』といつて、直ぐに彼方を向いて暫くの間恰かも何事かを憶ひ出さうとするかの樣に釘附けになつた樣になつてゐるのだつた。俺はいつもすべて之等の事に氣が附いた――俺は洞察や觀察の能力を缺いでゐないから。全體として俺は馬鹿ではないのだ。俺は時々面白い、全然平凡ではない想念が頭に來ることとすらある。しかし俺は自分の內心に海老錠が下りてゐる所のよけい者だから俺の想念を發表するのはしごく苦痛だ、必ず惡く發表するだらうと前以て知つてゐるからして尙の事さうなのだ。他人が話をする、ごく單純に自由に話しをするやり方は、實際とき〴〵異樣な事の樣に俺を驚かすことがある。……實際君方でも考へて見給へ、それは駭くべきことなんだ。實をいふと、俺もまたゝの海老錠にも拘らず、とき〴〵口を利きたくて身體がむづ痒くなることがある。が、俺が實際口を利いたのは小さい時分だけだ、大人になつてからは、俺は殆んどいつも思ひ出しては止めた。俺はいつも俺自身にそつと言つた。『おい、口を噤んでゐた方がよからうぜ。』で、俺は默つてた。俺達はみんな默つてゐることが上手だ。俺達の婦人は特にその

方で偉大だ。多くの高級な露西亞の若い婦人達は實に骨折つて默りこくつてゐて、その光景はそれに面すべく準備して行つたどんな人間にもかすかな身慄ひと冷汗とを生じさせる程だ。だがそんな事を言つてる時でない。他人を批評するのは俺の分ではない。俺の約束した敍述に進む。

二三年前、それ自身にとつては極めて無意義だが俺にとつては甚だ重大な樣々な事情が結び附いた結果、俺は田舍町のＯ――で六ケ月間暮す運命を持つた。この町はすつかり斜面の上に建てられて、その建て方がまた至極無氣味なものであつた。そこには八百ばかり數へられる住民がゐて、みんな類が無いくらゐ貧乏だつた。家は殆んど家といふ名に値しなかつた。本通りには、鋪道があるといふ申しわけに、そこゝに白い、亂暴に斫つた石灰石の大きな板があつて、その結果荷馬車すらそこを除けて通らなくてはならなかつた。二つの駭くべく穢い廣場の眞中に、黑い穴のある小つちやな黃色つぽい建物があつて、その穴に大きな帽をかぶつた男達が商賣をするふりをして坐つてゐた。この場處に縞のある異常に高い一本の柱が空に屹立して、その傍に、官廳の仰せにより、公けの秩序を保つ爲とあつて、黃いない乾草を積んだ荷車が一つ置かれ、一人のお政府の役人がぼく〳〵歩いてゐた。つまり、Ｏ……町の生活は眞に愉快

なものだつた。この町に滯在して最初のうちは俺は厭で厭で殆んど氣が狂ひさうだつた。俺はこの事を言つておかなくてはならない――俺は疑もなくよけい者だけれども、俺自身の願望に於てはさうでない。俺は俺自身病的だがしかし病的などんな物にも辛抱が出來ないのだ。……俺は幸福に反くことすらしない――實際、僕は右からそれに近附かうと試みた。……そしてそれだから俺もまた他の人間同樣厭な氣持になる事が出來たのも不思議ではない。俺がO――町に停つたのは役所の用であつた。

テレンチエウナは確かに俺のことをやつゝけて了はうと誓つたらしい。こゝに吾々の會話の典型がある――

テレンチエウナ。――おゝ、おゝ、好い旦那樣！　何の爲にあんた書き物許りなさる？　あなたのお身體によくありませんよ。

俺。――だが、俺は退屈なんだ。テレンチエウナ。

彼女。――おゝ、あなたはお茶を一杯飲んで横におなんなされ。神樣のお助けで、汗が出たらばそれからうと／＼なさるがえゝ。

俺。――だが俺は眠くない。

彼女。――あゝ、旦那樣。あんた何でそんな事を言ひなさる？　神樣のお助けがあなたの上にあつて下され！　さあ、横になんなされ。横になんなされ。その方があなたの爲にえゝ。

俺。――俺はどうしたつて死ぬんだよ、テレンチエウナ。

彼女。――神樣、私共をお惠みなすつて助けて下さいまし。……さあ、あんたお茶を喫りますか？

俺。――俺はこの週ぢう生きては居ないだらうよ。テレンチエウナ！

彼女。――えゝ、何？　好い旦那樣。あんた何でそんなことを言ひなさる？……もし、わたし行つてサモワルを沸しますぞ。

おゝ、よぼ／＼の、黄色い、歯のない動物よ！　俺は、ほんたうに、お前から見てさへ、一個の男子ぢやないのか？

三月二十四日。劇しい霜。

俺がO――町に着いたその日に、前に言つた役所の用向きが俺をその區の重だつた事務官の一人でキリラ・マトウエイッチ・オゾギンといふ男と接觸させた。しかし俺がこの男と親しく、

或は所謂「友人」になつたのは十四日經つてからの事だつた。彼の住居は本通りにあつた。そして他の家々に比べると、大きさや彩色した屋根や門柱の上の獅子——それは莫斯科を本來の棲所とする。不成功だけそれだけひどく猫に似てゐるといつた類の獅子であつた——によつて目立つて違つてゐた。この獅子のみを以て、人はオゾギンが財產家である事を安全に決論し得た。彼は四百の農奴の持主であつた。彼はO——町の最上の社會全部を彼の家で饗應した。そして接待好きの好い人間といふ評判を得てゐた。彼の玄關には、栗色のドロシユキと二頭の馬とを持つた市長が見えた。彼は法外に大きな男で、長い間かへりみずに棄てゝおかれた物質から伐りだされた軀の樣に見えた。他の役人共も彼の招待會に馬車を驅つた。黃色い侮蔑すべき動物なる辯護士、韃靼面の、獨逸種の、機智に富んだ男の土地調查官、和かなたましひを有し、ちよつと唄も歌へるが、しかし噂話しの好きな通信事務檢查官、その區の前の檢事で、頭髮を染め、胸の皺くちやになつた襯衣と糜りした洋服と嘗て法廷に臨んだ人間の顏の特徵なき昻然とした表情とを持つた紳士。他にきつてもきれぬ友人同志の、どちらももう若くない許りでなく大分疲れてゐる二人の地主が來た。若い方の地主は始終同じ非難で以て年長の方をへこまして默らせてゐた。『默つとれよ、セルゲイ・セルゲイツチ！ 全體何を話さうつていふんだ？ 君

は Cork をK・を二つ使つて綴つたぢやないか！ さうなんですよ、諸君。彼は傍にゐる人々を顧み乍ら、あらゆる確信の焰を以て言ひ續けるのだつた。「セルゲイ・セルゲイツチは Cork を Kork と綴るんですよ。」そして居合せた人間は誰も彼も笑つた。多分彼等の中一人でも綴字學に於ける特殊の正確さを以て優れてゐる者は無かつたのだけれども。そして不仕合せなセルゲイ・セルゲイツチは默り込んで、薄笑ひしながら頭をさげるのだつた。だが俺は俺の時間に限りがあることを忘れて、餘りに細かい描寫に深入りしようとしてゐる。それ故、あまり餘計なお世話燒きは廢さう——オゾギンは妻君があつた。エリザヴエタ・キリロウナといふ娘があつた、そして俺はこの娘に戀をした。

オゾギン自身は平凡な人間で、好男子でも醜男でもなかつた。妻君は年の寄つた雛鷄に似てゐた。が、彼等の娘は兩親に似てゐなかつた。彼女は至極愛らしくて悧巧な溫なしい性質であつた。彼女のはつきりした灰色の眼は子供らしくアーチ形をした眉の下から深切げに眞直ぐに覗いてゐた。彼女はほとんどいつも微笑んでゐた。そしてまた可成り屢々笑つた。生々した聲には至極く氣持のいゝ響きがあつた。動作は自由で、素迅くて、そして華かに顏を染めた。彼女はあまり凝つた服裝をしなかつた。たゞ單純な身裝のみが彼女に似合つた。俺は規則として直

ぐには友人は作らなかつた、そして、俺は言つておく、もし俺が誰かに對して、最初から氣楽な氣持になれば――但しそんな事は殆んど起つたことはなかつたが――それは俺のその新しい知人の爲に多くのよきことを意味するのである、と、俺は婦人に對してどういふ風に振舞ふべきかを全く知らなかつた、そして彼等の前では俺は冷淡な不機嫌な面をするか、でなければ最も痴かしい工合ににや〱笑ふかした、そして當惑して口の中で舌をぐる〱廻すのだつた。エリザヴエタ・キリロウナの場合には、あべこべで、俺は最初から氣楽な氣持だつた。それはかういふ工合に起つた。

俺は或る日ヂンナアにオダギンを訪ねて、御在宅ですかと尋ねた。『主人は在宅で身仕舞をして居ります。どうか應接間にお通り下さい。』と言はれた。俺は應接間に入つて行つた。俺は窓のところに、俺に背を向けて、白い寛衣を着た少女が兩手に鳥籠を持つて立つてゐるのを見た。俺は、いつもの様に、聊かたじろいだ。しかし乍ら、俺はさういふ様子を見せずに、上品な人のする様にたゞ咳をした。少女は素迅く、彼女の捲毛が顔をピタリと打つたほどに素迅く振り向いた、俺を見た、頭を下げた、そして微笑み乍ら俺に粟粒か何かの半分ばかり入つた小さな筥を見せた。『榛はなくつて？』俺は、無論さういふ場合に誰でもする様に、先づ頭を下げ

た、同時に素迅く膝を曲げそしてまた眞直ぐにした　恰かも誰かゞ俺の脚をうしろから小突いたかの様に、そしてこれは育ちのいゝ確かな證據で、氣持のいゝ、さつぱりした態度である。)そしてそれから微笑んだ、手を擧げた、そしてそれを和かに氣を附けて宙で二度振つた。少女は直ぐとむかう向いて了つた、鳥籠から小さな板片を取つた、強くそれを小刀で擦り始めた、そして突然、その姿勢を變へずに次の言葉を言つた。『これは父さんの鸚鵡よ。……あなた鸚鵡お好き？』私は鶯の方がいゝですね。』と俺は少しも骨を折らずに答へた。『わたし鶯も好きよ。ですけどこれを見て御覧なさい。可愛いぢやなくつて？　ほら、怕がらないのよ。(俺はまた俺自身が怕がらないのに驚いた)』もつとこちらへいらつしやい。これポブカといふ名よ　俺は近寄つて行つた、そして俛いて覗きこんだ。『ほんとにいゝ鳥ぢやなくつて？』彼女は俺の方に顔を向けた、が吾々は非常にくつ附いて立つてゐたので、彼女はそのはつきりした眼で俺を見るために顔を反らさなくてはならなかつた。俺は彼女を見つめた。彼女の薔薇色した若い顔は大層親しげに一面に微笑つてゐた、で俺もまたにこ〱して嬉しさに殆んど大聲で笑ひ出す所だつた。戸が開いた。オゾギン氏が入つて來た。俺は直ぐと彼の傍へ行つた、そして至極自由に話しかけた。俺はどういふ工合でたつたか知らないが、兎に角ヂンナアまでゐて、夜ぢう彼等と

一緒に過した。そして翌日のつぼの、眼のどんよりしたオゾギン家の從僕は、俺の上衣を着るのを手傳ひ乍ら、彼の主人の家族の友人として微笑を以て俺に對した。

避難の港を見附けること。自分の一時の巣を造ること、日毎の交際や習慣に於て氣樂さを感ずることは、家族的に交際する家を持たないところのよけい者なる俺がそれまで嘗て經驗しないところであつた。萬一俺の何處かゞ花に似てゐて、そしてこの譬喩があまり古ぼけてゐなかつたならば、俺は敢て俺のたましひがこの日から花が咲いたと言ひたい。俺の內部の、また俺の周圍の一切の物が突然姿を變へた！ 俺の全生命は、その全部が、最も無價値な隅々まで愛によつて灯光を點された。丁度暗い、打ち棄てられた部屋に燈火を持つて來られた樣であつた。俺は寐床に行つた、起き上つた、身仕舞をして、朝飯を食べた、そしてパイプを喫した――すべて以前とは違つたやうに。俺は翼が突然肩から生えたかの樣に、實際跳びはねながら歩いた。俺は憶えてゐる、俺はエリザヴエタ・キリロウナが俺に吹き込んだ感情について一瞬間も信じないではゐなかつた。俺はこの最初の日から熱烈に彼女にラヴして了つた、そして最初の日から俺は俺がラヴしてゐることを知つた。三週間のあひだ俺は毎日彼女に會つた。この三週間は俺の生涯ぢうで最も幸福な時であつた。が彼等の記憶は俺にとつて苦痛だ。俺は彼等のみを考へる事は出來ない。俺は彼等のあとに續いた事柄について思ひめぐらさずには居れぬ、そして最も深い辛さがそろ〳〵と俺の和らいだ心を占めて來る。

人が非常に幸福な時には話でもよく知つてゐる樣に、彼の頭腦はあまり敏活に働かぬ。沈靜な香ばしい感じが、滿足の感じが、彼の全存在に漲る。彼はそれによつて呑まれて了ふ。個人的命生の意識は彼のうちに消える――彼は、惡しく敎育せられた詩人共が言ふ樣に、天の至福の中にゐる。しかし、遂にこの「恍惚」が終つた時、人は時々自分が、その至福の眞中にあつて自分自身をひどく小さく考へた事と思ひ返して惱み悲しむ――自分が反省や思ひ返しによつて自分の諸々の感情を幾倍にもし且つ長びかさなかつた事を。――さながらこの至福の狀態にある人がそれをする時を有し、またその感じについて反省してみる事に何かの價値があるかの樣に、この幸福な人間は日光の中に居る蠅の樣なものである。丁度その通りであつた。

俺がこの三週間のことを憶ひ出すとき、俺はあの時の心中に何か確かな一定した印象を取りとめておくことは殆んど不可能であつたことを發見する。この時期の間に何等極めて注意すべき事實が吾々の間に起きなかつたから尙のことである。……これ等の二十の日は或る溫かな若々しい、香ばしいもの　として、俺のむさくろしい灰色の生涯にさした一條の光線の樣に俺の想

像に殘つて現在する惡しく敎育された作家の常套句を用ふれば、この運命の打擊が俺の上に落ち初めた。その瞬間からして、初めて俺の記憶は唐突に殘る隈なく明晰になり、信賴に値する樣になる。

さうだ、あの三週間。……それは俺の心に若干の影像を殘さないではなかつた。時々何かのはずみで俺があの頃のことについて長い間思ひ沈むとき、突然若干の記　が過去の暗黑のうちから浮び上る――星共が、彼等の姿をみつけようと努めてゐる人間の眼に、夕べの空を背景として出て來るやうに、或る森の中の散歩が殊更俺の記憶中に遺つてゐる。俺達はオゾギン老夫人とリザと俺とそれからビヅミョンコフといふO町の小役人で頭髮の薄い、善良な、無害な人間と四名であつた。俺は後にこのビヅミョンコフのことをもつと言はなくてはなるまい。オゾギン氏は家に居殘つた。彼はあまりに眠り過ぎたゝめ頭痛がした。天氣は素敵だつた、暖かく穩かだつた。俺は園遊會や團體を組んで散歩に出掛けることなどは一體露西亞人の趣味でないといふ俺の考へを言つておかなくてはならない。地方の町では、所謂公園なるもので一年ぢう何の時季にも一個の生きた人間にも出會ふことはない。せい〴〵、どこかの婆さんが病つてる樹の傍で、日向ぼつこをしながら、綠の芝草に腰を下して（それも門の近くに塗つた小さな腰

掛のない場合に）溜息ついたり呻吟つたりしてゐるに過ぎない。しかしもし町の近傍に瘠せた赤楊の樹の杜でもある場合には、商人やまた役人達さへも日曜や祭日には喜んでそこへ出掛ける。サモワルやパイや西瓜の籠を携へて行つて、道路に近い邊の汚い草の上にそれ等を置き、輪形に坐つて汗みづくになつて晩方まで食事や茶飮みに遊び暮すのである。丁度さういふ杜が當時町から一哩半ばかりの處にあつた。吾吾はチンナアのあとでそこへ出掛けて、たつぷり茶を飮んだ、そしてそれから四人揃つて杜のなかをぶらつき始めた。ビヅミョンコフはオゾギン夫人に腕を貸し、俺はリザす俺のを貸して歩いた。日はもう夕暮に近づきつゝあつた。俺はその時初戀の火のなかに（俺が彼女を初めて見てからまだ十四日以上經つてなかつた）あの熱情の、心を籠めた憧憬のまんなかに居た。――吾々が、たましひのすべてを以て、無邪氣に、無意識に感ずる者のあらゆる動作を跡づける時、彼女が如何ほど傍に居ても、如何程彼女の聲を聞いても。十分でない時、病氣から恢復した子供の眠附きで以て微笑み、そして最も經驗に乏しい人間でも數碼離れたところから一と眼で吾々に何事が起つてゐるかを認めることが出來る時――俺は丁度さういふ狀態に居た。その日まで俺が彼女に腕を貸した事は一度もなかつた。吾々は綠の草の上を徐りと並んで歩いた。輕やかな微風が赤楊の白い幹の間を、吾々の周圍に

戯れて、絶えず彼女の帽につけたリボンを俺の額に吹きつけた。俺は始終彼女の眼の行方を追つた、で到頭彼女は快活に私の方を向いた。そして吾々は顔を見合せて微笑した。鳥共は吾々の頭上で吾々に賛意を表するやうに囀つてゐた。青い空は繊かな茂葉を透して吾々を可愛がるかのやうに覗いてゐた。僕の頭は至福の過剰のためにぐる〳〵廻つた。俺はこゝで急いで言つておかう、リザは少しも俺に戀をしてはゐなかつた。彼女は俺のことを好きだつた。彼女は決して誰の傍でども羞しがらなかつた。けれど彼女の子供らしい心の不和をかき擾すのは俺のために取つておかれた幸福ではなかつた。彼女は俺と腕を組み合せて歩いた、まるで兄弟とするやうに。彼女はその時十七歳だつた。……それから、この夕暮れに、俺の眼の前で、子供が女に變るに先だつて起るところのあの和かな内心の醱酵が始まつた。……俺はあのからだ全體の變化を、あの秘すところなき惑亂を、あの焦燥な夢見心地を目の前に見た。あの眼眸の突然の和かさに、夢の突然の響きに、感づいたのは俺が最初だつた。——そしておゝ、馬鹿者め！おゝ、よけい者め！まる一週間の間俺は俺が、俺自身が、彼女のこの變化の原因だと圖々しくも想像してゐたのだつた！

それはかういう工合だつた。

吾々は可成り長い間、夕方まで、歩いた、そして僅かしか話しをしなかつた。俺は多くの無經驗な戀人の樣に默つてゐた。そして彼女は、多分、何も俺に言ふ事はなかつた。しかし彼女は何事かを思ひ耽つてゐるらしく見えた。そして彼女が摘んだ草の葉をぢつと噛んだとき、變な工合に頭を振つた。時々彼女は先に立つて歩きはじめた、ひどく決然として……それから突然立ち停つた、私を待つた、そして眉をあげ、漠とした微笑を浮べてまはりを見廻した。前の晩に吾々は一緒に「高架索の囚人」を讀んだ。どんな熱心さを以て彼女は私に聽き入つたか、顔を兩手で支へて、胸を卓子に押し附けて！　俺は前夜のその讀書のことを話し初めた。彼女は面を赧めた、出掛ける前大麻の種子を鸚鵡にやつたかどうかを俺に尋ねた、何かの小唄を聲高に口みはじめた、そして俄にまた默つて了つた。樺林は一方で可成り高い崖で以て突然立ち切られてあつた。目の下に筋かの河流が蜿蜒として流れ、その彼岸には、無限に廣大な擴りをもつて草野が、或は波濤の樣に、或は卓布のやうに、そしてあちらこちらで大地の罅隙によつて斷ちきられて、擴つてゐた。リザと俺とが先づ杜の端れに出て來た。ビヅミョンコフのオゾギン夫人とは背後に遲れた。吾々は出て來た、ぢつと立つた、そして吾々は兩人とも吾れ知らず眼を閉ぢた。吾々の眞向うに、蒼白い霧の彼方に、廣漠たる血紅色の太陽が沈みかゝつてゐた。

空の半ばが紅潮を呈して煌いてゐた。赤い光線が斜めに牧場の上に落ちて、眞紅の反射を陰になつた地の罅隙の片側に投げつけ、流の上に茂り垂れた叢の下からさへ閃めき出づるほど劇しい白い煌きとなつて横はり、また崖と矮林の胸に凭れかゝつた。吾々は焔の様な輝きの中に浴して立つた、俺はこの光景の熱情に充ちた莊嚴さを述べ盡すことは出來ない。盲人は赤といふ色を喇叭の響きの様に想像するといふ。俺はこの譬喩がどれ程まで正しいかを知らないが、この夕空の焦げつく様な黄金色の、空と地とに潮した眞紅の色には、何か挑みかけるやうな趣があつた。俺は歡喜の叫びを發してそれから直ぐリザの方を向いた。彼女は眞直ぐに太陽を見てゐた。俺は日沒の輝きが彼女の眼の中に小さい火の點となつて反射してゐたのを記憶する。彼女は畏怖を感じてゐた。深く動かされてゐた。彼女は俺の叫び聲に答へなかつた。長い間彼女は身動きもせず、頭を俛れて立つてゐた。……俺は手を彼女にさし出した。彼女は俺から振り向いて了つた、そして突然劇しく泣き出した。俺は祕密な、ほんとど歡ばしい驚愕を以て彼女を眺めた。……ビヅミョンコフの聲が數碼の近くに聞えた。リザは素早く涙を拭いてあやふやな微笑を以て俺を見た。老夫人が亞麻の様な頭髮をもつた彼女の伴隨者の腕に凭りかゝつて矮林から出て來た。今度は彼等が入日の光景を嘆賞しはじめた。老夫人は何事かリザに問ひかけた、そして俺は、まだ覺えてゐるが、彼女の娘の碎けた硝子の様な、定まらぬ聲がそれに答へて聞えた時、俺は身慄ひを禁じ得なかつた。そのうちに太陽は沈んだ、そして殘紅が褪せはじめた。吾々は引つ返した再び俺はリザの腕を俺の腕のなかに取つた。杜のなかはまだ明るかつた、そして俺ははつきり彼女の顏附きを見分けることが出來た。彼女はそは〳〵してゐた、そして眼をあげなかつた。彼女の面に擴つた紅潮は消えなかつた。宛ら彼女は未だ日沒の光線のなかに立つてゐるかの様であつた。……彼女の手はほとんど俺の腕に觸れなかつた。長い間俺は一つの文句も考へだすことが出來なんだ。俺の心臟はひどく激しく鼓動してゐた。樹立を透してむかうに馬車がちら〳〵と見えた。馭車が道路の軟かい砂のところで吾々を迎へるべく辷り歩いて來つゝあつた。

『リザウエタ・キリロウナ。』俺は到頭口をきつた。『あなた何故お泣きになつたのです？』

『存じませんわ。』と彼女はちつと間をおいてから答へた。彼女はまだ涙で濡れてゐる和かい眼で俺を眺めた。——その眼附は變つてゐた、と俺は思つた。彼女はまた默つて了つた。

『あなたは大層自然がお好きなんです、ね。』と俺は追つかけて言つた。それは全然俺が言はうとしたことではなかつた、そして最後の言葉を俺の舌は殆んど口のなかで言つた。彼女は頭を

振つた。俺はその上口が利けなかつた。……俺は何事かを待つてゐた。それは告白をではなかつた——どうして告白なぞを待つことが出來たらう？　俺は信賴を表す一瞥を、一つの質問を、待つてゐたのだつた。……しかしリザは地面を見つめてそして沈默をまもつてゐた。俺はいま一度小聲で繰り返した。何故お泣きになつたのです？　そして返事を得なかつた。俺は見た、彼女はもぢ〳〵し始めて、殆んど羞しさうにしてゐた。

十五分經つと吾々は馬車の中に坐つて町へ驅けさしてゐた。馬共は穩かに迅く驅けた吾々は暗くなつて行く、濕つた空氣のなかを矢の樣に飛んだ。俺は突然話しはじめた、一度ならずまづビヅミヨンコフに、それからオゾギン夫人に向つて話しかけた。俺はリザの方を見なかつたが馬車の中の彼女の隅から彼女の眼が一度も俺の上に休まなかつたのを見ることが出來た。家に着くと彼女は睡から醒めたやうにしやんとなつたが、俺と一緒に讀書もせず、すぐと寢床に行つた。變轉期、俺が話したあの變轉期に彼女は達したのであつた。彼女は一少女であることを止めた。彼女もまた始めた——俺の樣に——何物かを待つことを。彼女は長く待つことはなかつた。

だがその夜俺は完全な恍惚狀態に於て俺の旅宿に歸つた。俺の內部に起りつゝあつたあの漠

とした感じ、或る豫感のやうな、或る疑惑のやうなものは消え去つた。俺に對するリザの態度の現れたあの突然の抑制を、俺は處女の羞らひに、臆病さに歸した。俺はそれ迄に多くの書物の中で、千度も、夢の最初の現れが常に若い娘をぢり〳〵させ警戒させることを讀んで居なかつたか？　俺は此上なく幸福を感じた、そして頭の中にあらゆる種類の計畫を立てゝゐた。

『君はどうかしてゐるぞ、大將！　そりやとても君の身の上に起りさうな事ぢやない。君を待つてゐることは、見窄らしい小舍の中で、君が死んだらば君の靴を賣つて一二哥せしめようと思つて待ち遠しがつてゐる婆さんの堪らない小言の中で、獨りぼつちで死ぬ事さ！』とさうあの時誰かゞ俺の耳に囁くものがあつたなら！

さうだ、俺達はあの露西亞の哲學者と共に『どうして人は自分の知らない事を知ることが出來ようぞ？』と言はずには居られない。

今日はこれだけで澤山だ。

三月二十五日　雪白き冬の日

俺は俺が昨日書いた處を讀み返してみた、そしてすんでの事ですつかり破いて了ふところで

あつた。俺は俺の物語があまりに冗漫であまりに感傷的だと考へる。然し乍ら、俺のあの時分の記憶の殘餘には、レルモントフが古傷の痕を搔きたてることは特殊の歡びと苦痛とがあると言つた時彼が考へてゐたと同じ種類の慰めを除いては、何等愉快を性質を帶びないからといつて、どうしてそれに溺つて惡いことがあらうか？　しかし人は好い加減な處で止まることを知らなくてはならぬ。それだから、俺は少しも感傷的なところがないやうにして話しを續けよう。

遠足後まる一週間といふもの、俺の位置は實際どんな工合にもよりよくならなかつた。リザに現れた變化は日毎にます／＼目について來たけれども、俺はこの變化を、前にも言つたやうに、俺にとつて最も好都合な風に解釋した。……寂しい臆病な——自意識のゆゑに臆病な——人間の不幸といふものは正に、彼等は眼を持つて居りそしてそれをまことによく見開いて居るにも拘らず、何物をも見ない、或は一切のものを色眼鏡を通しての樣に間違つた光に於て見るといふ事である。彼等自身の考へや目論見は彼等を一歩毎に躓かせるのである。吾々が知合ひになつた初めのうちは、リザは子供の樣に俺に對して自由に、信頼をおいてゐる樣なふうに振舞つた。多分彼女の俺に對する態度には單に子供らしく好きだといふ以上の或る物がありさへしたかも知れない。……しかし此の不思議な、殆んど倏忽な變化が彼女のうちに起きた後、短

い當惑の時期の後、彼女は俺の前で氣詰りを感じはじめた。彼女は無意識に俺から顔を背むけた。そして同時に憂鬱で夢みてる樣であつた。……彼女は待つてゐた……何を？　彼女は知らなかつた……そして俺の方では……俺は、いま言つた通りに、此の變化を嬉しがつてゐた。……さうだつた、あゝ、俺は、よく人が言ふやうに、有頂天な歡喜のために息も絕え絕えだつた。たゞし俺は俺でなくて他の誰であつてもあの場合には騙されたであらうことを容易に承認するけれども。……虛榮心から自由な何人があるか？　すべて是等は時の經つうちに、俺が俺のちよん切られた、そしていつとて十分に強くはなかつたところの翼を收めたときに、はじめて明らかになつたのだといふ事は言ふ必要もあるまい。

リザと俺との間に起つた誤解はまる一週間のあひだ續いた……そしてそれには毫も驚くべきところがない。幾年も幾年も續いた樣々な誤解の實證者であることが俺の運命であつたのだ。序だが、眞理のみひとり有力であるとは誰が言つたのだ？　虛僞も眞理と同樣生きた力を持つてゐる、よしそれ以上の力でないにしても。たしかに、俺はあの週間にさへも時々胸を嚙むやうな不安が俺の心に動いたことを思ひ出す。しかし俺の樣な寂しい人間は、今一度言ふが、自分の心の中に起つてゐることも、眼の前に起つてゐることと同樣、了解することが出來ないの

だ。そして、それのみならず、戀愛といふものは自然の感情であるか？ 戀をするといふことが人間にとつて自然な事であるか？ 戀愛は一の疾病である、そして疾病に法則はない。俺の心の中に時々不快な喘ぎがあつたとしておいて、さて、兎に角俺のなかの一切が顚倒して了つた。そしてさういふ場合に、何が宜しい、何が間違つてゐるなどと人はどうして知ることが出來ようか？ また様々の徴候の原因や意義が一々どうして解せられようか？ しかし、それはそれとして、これ等の間違つた思惑や豫感や希望は次の様な工合に一切粉碎されて了つた。

ある日——それは朝十二時頃であつた——俺がオゾギン氏の玄關に入るか入らぬに、聞きなれない、滑かな聲が應接間で聞えて、戸が開いた。そして丈の高いすらつとした二十五位の靑年が、主人に附き添はれて戸口に現はれた。彼は腰掛の上に置いてあつた軍人の着る外套を手早く纏つて、キリラ・マトウエイツチに鄭重に別れを告げた。私の傍をさつと通り過ぎるとき、彼は無造作にその軍隊の略帽に手を掛けた、そして拍車をガチヤリと鳴らして消え去つた。

『あれは誰ですか？』と俺はオゾギンに尋ねた。

『N公爵です。』と後者はもの〳〵しい顏附きをして答へた。『彼得堡から新兵を蒐めに派遣された方です。だが男達は何處に居るんだ？』彼は機嫌を損ねた語調で言つた。『誰もあの方に外套をお渡ししせんかつた。』

吾々は應接間に入つた。

『あの方は以前こちらに居られたのですか？』と俺は訊ねた。

『昨夜着かれたんださうです。私は私の家で一と間お貸ししようと申し出たが、あの方はお斷りになつた。ですが、あの方は至極善い人の樣ですよ。』

『先刻は長い間お話しでしたか？』

『一時間ばかり。あの方は私にオリムピアダ・ニキチエンナを紹介して呉れいと仰しやつたのです。』

『で紹介しておあげでしたか？』

『無論。』

『でリザウエダ・キリロフナも、あの人は……』

『彼女もお近附きになりましたわ、無論。』

俺は少しの間默つてゐた。

『あの方はこちらに長い間居るお積りでせうか、あなた御存知ですか？』

『左樣、二週間ばかり御滯在だらうと私は思ひます。』

そしてキリラ・マトウエイツチは急いで着物を着換へに行つた。俺は數度應接間のなかを往きつ戻りつした。吾々の家庭的サアクルに誰か新しい人物が現れたとき、普通吾々を襲ふところの敵對の感情を除いて、その時は別段N公爵の到着が俺の上に特殊の現象を與へたとは俺は記憶してゐない。おそらくその時はこの感情に羨望の性をもつた或るものが混じてゐたであらう――彼得堡からの光輝燦爛たる士官に對する莫斯科からの詰らない臆病な人間の羨望が。『あの公爵は』と俺は思ひ耽つた。『首府から來た人だ。吾々を見下すことだらう……』俺は彼をほんの一秒しか見なかつた、けれども俺は優に彼が好男子で、怜悧でそして鷹揚な樂々とした態度の人間であることを見ることが出來た。暫く部屋をあちこちした後、俺は到頭鏡の前に立ち止つて、衣囊から櫛を取りだし、俺の頭髮に繪畫的な無造作な容子を與へた、そして、よくさういふことがあるものだが、突然俺自身の顔に兎や角う眺め入つて吾を忘れて了つた。俺は俺の注意が俺の鼻の邊に氣遣はしく集つたことを記憶する。その軟かなぼんやりした輪廓は俺にあまり滿足を與へなかつた、と、ほとんど室全體を映してゐる斜めになつた鏡の暗い底で突然扉が開いた。そしてリザの細い姿が現れた。何故か知らぬが俺はぢつと身動きもせずにゐた。

そして顔に　同じ表情を保つてゐた。リザは首を前に延して、俺をぢつと眺めた、そして眉を上げて、唇を嚙んで、見られなかつたのを喜ぶ人が誰でもする樣に息を殺しながら、彼女に氣を附けて後退りをして、そつと扉を閉めかけた。扉をかすかにぎいつと鳴つた。リザははつとしてその場に根を下した樣に突つ立つた……俺は矢張り身動きをせずにゐた……彼女は再び把手をひいて姿を消した。そこにはもう疑ふ餘地はなかつた。俺の姿を見た時のリザの顔の表情そこには不快な會見を免れるためにうまく逃げ出したいといふ慾望以外に何物も見出せなかつたあの表情、彼女が實際見附けられずにそつと拔け出すことが出來たと想つた時彼女の眼に閃くのを俺が見てとつたあの喜びの色――それ等はすべて餘りにも明瞭に語つた、彼女が俺を愛してゐないといふ事を。長い、長い間俺はいま一度鏡のなかで白い點となつた動かない默つた扉から眼を放すことが出來なかつた。俺は俺自身の長い顔に向つて微笑みかけようとしてみた――頭が俛れた、再び家に歸つた、そして長椅子に身を投げた。俺は心が非常に重かつた、泣くことが出來なかつたから尚更であつた……そして、また、何を泣くことがあつたか？『そんた事があつてもよいものか？』と俺は殺されでもしたものかの樣に、兩手を胸に組んで仰向けに臥ながら絶え間なく繰り返した。――『そんなことがあつてよいものか？』……いゝ言葉で

はないか、君達はさう思はないか、この『そんなことがあつてよいものか?』は?

三月二十六日　雪融けの朝

翌日、長い躊躇の後に鉛の様に沈んだ心をもつて、オゾギン家の馴染みの應接間に入つて行つた時、俺はもう彼等が過ぐる三週の間知つてゐた男とは別人であつた。新しい感情の影響の下にすつかり無くならうとしてゐたところのあらゆる俺のむかしの變な癖が再び現れて俺に取り憑いた。持主が彼等の家へ歸るやうに。俺の様な種類の人間は普通實際の事實よりも寧ろ彼等自身の印象によつて導かれるものだ。ほんの二日前には「報はれた戀の天にも昇る歡び」を夢みてゐた俺は、その日にはもう同じ位に自分の「不幸」を確信して、絶對に絶望してゐた——俺は俺の絶望に對して何等合理的な根據を見出すことは出來なかつたけれども。俺はまだN公爵を嫉妬むことは出來なかつた、そして彼がどういふ性質を持つてゐるにしろ、彼の單なる到着はリザの俺に對する好意を一時に打ち消すに十分ではなかつた。……だが待てよ、彼女の方に少しでも好意があつたのか? 俺は過去を呼び戻した。あの杜の中の散歩は?』と俺は俺自身にたづねた。『あの鏡の中での彼女の顔の表情は?』『しかし』俺は進んで考へた。『あの杜の中

の散歩は、俺は……畜生ばか! おゝ神よ、俺は何といふ惨めな生き物だ!』俺は到頭聲高に言つた。さういふのが俺の頭のなかで單調な渦を描いて千度もぐる／＼廻つた、何をなさない、半端な思想であつた。繰り返して言ふ。俺は俺が子供の時分からさうであつた通りの、鋭感すぎる、疑り深い氣兼ねがちな生物として、オゾギン家へ歸つて行つたのである。

俺は全家族を應接間に見出した。ビヅミヨンコフも隅つこに坐つてゐた。誰も彼もが大層好い機嫌に見えた。オゾギンは、とりわけ、顔色が輝いてゐた、そして彼が最初に俺に言つた言葉はN公爵が前夜朝まで彼等と一緒に過したといふことであつた。リザは俺に落ち着いた挨拶を與へた。『おゝ』俺は自身に言つた。『私は今あなた方がそんなに御機嫌のいゝわけが解つた。』俺は公爵の二度目の訪問は俺を間誤つかせたことを白狀しなくてはならぬ。俺はそれを豫想してゐなかつた。きまつて俺の様な人間は世界中のあらゆることを豫期するものなんだ、物ごとの自然の順序に於て起るべきことを除いては。俺はむつとした顔をしてそして傷けられたしかし寛容な人間らしい容子を裝つた。俺は俺の不機嫌さを見せることによつてリザを罰しようとした。で、これによつて俺がまた全然絶望してゐなかつたことが決論されるだらう。眞實人を愛してゐる場合には、その愛してゐる者を窘めることが實際役に立つと人は言ふが、しかし俺

の場合にはそれは口に言へぬ程馬鹿げたことであつた。リザは、最も無邪氣な工合に、俺に何の注意も拂はなかつた、そして彼女は俺の健康を案じて訊ねた。俺はいふまでもなく微笑を以て、有難いことに私は完全に壯健ですと答へた。オゾギンは彼等の訪問者に就いてなほも話し續けた。しかし俺の返事が厭々なのを見て、彼はおもにビズミョンコフに向つて話しかけた。ビズミョンコフは大いなる注意を以て彼の話すことを聽いた、とその時、僕が突然入つてきて公爵の來着を知らせた。主人は跳り上つて彼を迎ふべく走つた。リザ——彼女の上に俺は直ぐに鷲の眼を向けた——は歡びで面を染めた、そして立ち上りさうな氣配を見せた。公爵は入つて來た、あらゆる氣持のよい香ひと華かな快活さと鄭重さとを以て。……

俺は温なしい讀者のためにロオマンスを作つてゐるのではなくて、たゞ俺自身の娯樂に書いてゐるんだから、無論俺は吾等が尊敬する作家達のお定りのトリツクを用ゐる必要はない。俺はもうこの上愚圖々々せずに眞直ぐにリザが熱烈に公爵に對して、彼に會つた最初の日から、戀に陷ち、そして公爵もまた——半ばは何もすることがない故に、半ばは婦人の意を得ることの好きな性質から、そしてまた實際リザが至極美しい娘だからして——彼女を戀したことを言

はう。彼等が互に戀し合つたことは何の不思議もない。彼は確かにさういふ見窄らしい貝殼(俺はあの神から見放されたO——町のことを言つてゐるのだ)の中にさうした眞珠を發見しようとは決して豫期してゐなかつた、そして彼女にとつてもこの華かな、悧巧な、生氣にみちたやうなものは、彼女の最も法外な夢の中でさへも、決して夢みたことさへなかつたのである。

最初の挨拶が終ると、オゾギンは俺を公爵に紹介した。俺は規則のやうに何人に對しても愛想がよかつた。そして彼の俺に對する對度は至極愛想がよかつた、そして彼と吾々田舍のサアクルの間の計るべからざる距離にも拘らず、彼は彼が吾々の氣詰りな原因であることを避けるべく、そしてなほ彼も吾々と同じ身分であつて、いはゞ偶然のことから彼得堡に住んでゐるんだといふ風に裝ふべく、十分悧巧であつた。

あの最初の夜……おゝ、あの最初の夜よ！　吾々の幸福だつた子供の日に、吾々の先生はいつもあの若いスパルタ人の男らしい剛毅さを物語つて、吾々の模範として掲げたものだ、一匹の狐を盜んで内衣の下に隱し、一叫びも發せずにそれをして自分の内臟を食ひ食させてさうして不名譽よりも死そのものを選んだところのあのスパルタ青年のことを。俺は、俺が初めて公爵をリザの傍に見た夜の間の俺の名狀すべからざる苦痛に對して、あれよりよい比喩を見出す

ことは出來ぬ。俺の絶えざる强ひての微笑と苦痛に充ちた見張り、俺の白痴の様な沈默、歸つて了ひたいといふ愍めな無効な慾望――すべて是等は疑ひもなくそれ自身の道に於て眞に注意すべき何物かであつた。たゞに一匹の野獸が内臓を喰ふくらゐのものではなかつた。嫉妬、羨望、俺自身の詰らない男だといふ意識、そして絶望的の憎惡、が俺を窘しめてゐた。俺は公爵が實際極めて氣持のいゝ青年であることを承認せざるを得なかつた。……俺は彼を貪るやうに眺めた。俺は實際俺が彼を見詰めたとき、いつもの様に瞬きすることも忘れたらうと信ずる。彼はリザに許り話しかけたのではなかつた、が彼の言つたことはすべて無論彼女のためであつた。彼は俺のことをひどく煩はしく感じたに違ひない。尤も彼は直ぐに彼が相手にしなくてはならんのは、無視せられた愛人であることを察したらしい。しかし俺に對する同情とそしてまた俺の絶對に無害な男であることを最も深く感知してゐるところから、彼は俺を異常な穩かさを以て取り扱つたのだ。これが如何程俺を傷けたか君方も想像が出來るだらう！　その長い夜の間に俺は覺えてゐる、俺は俺の誤りを糊塗しようとしてみた。俺は全く（この條を讀まれる人が誰であらうと、どうか俺を嗤はずにおいて頂きたい。特にこれは俺の最後の幻想であつたのだから）……俺は全く、俺の様々な苦みの最中に、唐突にかういふことを想像した……リザ

は俺のはじめの中の高慢な冷酷さに對して俺を罰しようとしてゐるのだ、彼女は俺のことを怒つてるのだ俺の氣持を衝ッついていぢめる爲に公爵をちやほやしてゐるに過ぎないと、で、俺は機會を捉へて、謙つたしか　優雅な微笑を湛へて彼女のところに行き、そして吃り乍ら言つた。――『もう澤山です、堪忍して下さい、私が怖がつて……』そして突然彼女の答へを待たずに、俺は、やはり皮肉な微笑はなくさずに、俺の顔附に異常に快活なそして氣のおけない表情を與へた、それから兩手を頭の上に、天井の方角にサッと上げた（俺は俺が頸飾を眞直ぐにしよっとした事を覺えてゐる）そして『もう萬事濟みました。私は幸福です皆さん幸福で居らつしやるといゝ。』とでも言ふかの様に、片方の踵でぐるりと廻らうとさへした――然し俺はこの運動をしなかつた、俺の膝の不自然に硬いために、軀の平衡を失くすことを恐れたので。……リザは全然[illegible]を了解することが出來なかつた。彼女は目を瞠つて俺の顔を見た、出來るだけ早く俺から免れたいかの様に急いで微笑つてみせた、そして再び公爵の傍へ寄つた。眼も見えず耳も聞えなかつたけれど、俺は心の中で彼女が毫も怒つてゐないこと、そしていま俺を厭がつてゐないことを覺らずにはゐなかつた。彼女はたゞ俺に一顧だも與へてゐないのであつた。この打撃は決定的のものであつた。俺の最後まで持つた様々の希望は一撃のもとに粉砕されて了

つた。早春の陽光に融けた氷の團塊が突然墜落してこな／＼に碎けるやうに。俺は初手の小競合で全く打負かされて了つた、そして、エナに於ける普魯西人のやうに、一日のうちに何も彼も失くして了つた。彼女は俺のことを慕つてゐなかつたのだ。……

あゝ、まつたくあべこべであつた！ 彼女もまた——俺はそれを見た——奔流に脚をとられて押し流されつゝあつたのだ。もう堤から半ば捥ぎとられてゐる若樹の樣に、彼女は彼女の春の初花及び全生涯を、永久にそれに向つて投げようとして、流れの上に熱心に身を屈めてゐたさういふ情熱の目撃者である運命を持つた一人の男は、彼の方からは愛しながら、その愛を酬いられない辛い刻々を生きて來た。俺はいつまでも記憶するであらう、あの貪るやうな注意をあの優しい華かな快活さを、あの無邪氣な自己忘却を、あの眸つきを（それはすべてまだ子供らしく而かももう成熟した女のそれであつた）あの半ば開いた脣や熱くなつた頰から片時も去らなかつた花のやうな微笑を。リザが吾々の散歩中漠然と豫示したすべてが今や實際に起つたそして彼女が彼女自身を殘りなく愛戀に獻げたとき、彼女は直ぐと、十分の成熟が來たゆゑに醱酵することを罷めた新しい酒のやうに、より沈靜かにより輝かになつた。……

俺はこの最初の夜及びそれに續く夜々をすつかり最後までオゾギン家の客間で過す剛毅さを

持つてゐた！ 俺は何物にも何の希望をも持つことが出來なかつた。リザと公爵とは日每にます／＼傾倒し合つて行つた。……しかし俺はもう全然自分の威嚴に關する感じを失つてゐた、そして俺自身の憐れな光景から敢て身を退くことが出來なかつた。俺は覺えてゐる、或る日俺は行くまいとした、朝のうちに今夜は行くまいと自分に誓つた。そして夜八時が鳴ると（俺は普段七時に家を出た）狂人のやうに跳び上つた、帽を冠つた、そして息を切らしてキリラ・マトウエイツチの應接間に驅け込んだ。俺の立場は極端に馬鹿げてゐた。俺は執拗に默つてゐた。時々數日の間一と聲も發しなかつた。俺は、前にも言つた通り、決して雄辯な方ではなかつたが今や俺が俺の心中に持つてゐる物一切は、いはゞ公爵の前に出ると逃げて了つた。そして俺はあたかも何も彼も剝ぎとられでもしたものゝ樣にぼんやりしてゐた。のみならず、俺は、獨りになると、俺の慘めな頭腦をそれはひどく働かして、前の日に見たり憶測したりした一切のことを徐々繰り返して考へ拔いた。で、オゾギン家へ行く時には殆んど觀たり話したりする氣力が殘つてゐないのであつた。彼等は俺を病人として、氣をおき／＼取り扱つた。俺はそれを見た。每朝俺は大部分眠られなかつた、前夜ぢう俺の頭に惱ましく宿つてゐたところの何か新しい、終局の決斷を採用した。ある時など俺はリザにすつかり言つて了はう、彼女に友人として

の忠性を與へようと決心した……しかし偶々彼女と二人きりになると、俺の舌は突然硬りつきでもした様に働かなくなつた、そして吾々は二人ともひどく落着かない氣持で誰か別の人が入つて來るのを待つた。また俺は俺の愛する者に非難に充ちた手紙を遣して、無論永久に、逃げ出さうかと思つたこともあつた、そして實際ある日この手紙を書きはじめた。が正義の感じはまだ、俺から失はれてゐなかつた。俺は俺に何人をも毫も非難すべき權利のないことを覺つた、そして書きかけた手紙を火の中に投じた。それから俺は突然俺自身をまつたく一つの犧牲として提供した、リザに俺の寛恕を與へて彼女の爲に祈つた、そして謙遜な友情的な調子で隅つこから公爵に向つて微笑みかけた。しかし慘酷な愛人達は決して俺の自己犧牲に對して感謝しなかつた許りでなく、どうやら俺の微笑や祝福などはいつなりと返して寄越しさうな工合だつた。そこで、激怒して、俺はまつたく反對の氣持に飛び入つた。俺は自分に誓つた、西班牙人の様に外套で身を包んで、暗い物蔭から駈け出しそして俺の仕合せな競爭者を刺すことを、そして若々しい歡びを以て俺はリザの絶望を想像した。……しかし乍ら先づさういふ場處は〇——町に多くはなかつた、そして第二には、木の垣根や街頭やむかうに見える警官……いや！　さういふ場處は人間の血を流すよりも菓子や蜜柑を賣るのに遙かに適してゐた。俺はまだその他に

俺自身との談話のうちにきはめて漠然と發表したやうに、オゾギン氏に直接當つてみよう——あの人の注意を彼の娘の危險な立場に、彼女の不謹愼の悲しむべき結果に呼んでみようといふ考へを抱いたことを白狀しなければならぬ。俺は一度或るデリケートな題目について彼に話しかけてみさへした、が俺の言ふことがあまりに間接で漠としてゐたので、彼は熱心に耳を傾けてゐたのち、突然、いはゞ眠から醒めたかの様な顔をして、片手で忙がしくごし／＼と顔ぢうを、鼻までも撫で廻し、一つ猛烈に鼻を鳴らしてむかうへ行つて了つた。これを爲さうと決心するに當つて俺が自分は最も淡白な動機からこれをするので、一般の福祉を希ふため、オゾギン家の友人として自分の義務を盡しつゝあるのだと俺自身に思ひ込ませようとしたのは言ふまでもない。しかし俺は敢て考へる、假令キリラ・マトウエイツチが俺のくどい話を中途で遮らなかつたとしても、俺は決して俺の獨白を終ひまで言ひ盡す勇氣はなかつたらうと。時々俺は古代の聖者のあらゆる莊嚴さを以て公爵の諸性質を計量するといふ仕事をやつてみた。時々俺は一切が何でもないことだ。リザは間もなく眼が醒めるだらう、彼女の戀はまことの戀ではない、などゝいふ希望を以て自ら慰めた。簡單に言へば、俺は俺があの當時それを以て俺自身を惱ませなかつた考へは一つもなかつたことを知つてゐる。たゞ、俺は正直に承認するが、一つ

俺の頭に浮ばなかつた者があつた、といふのは俺は決して一度も自分の生命を斷つことを考へなかつたのだ。何故さうであつたか俺は知らない。……多分、その時分にすら、俺は自分がどうしたつて長くは生きられないだらうといふ豫感を持つてゐたのだ。

さうした不幸な狀態にあつて、俺の擧動や他人に對する態度には、常よりなほ不自然で氣詰りな樣子があつた。生來頭の鈍い人間であつたオゾギン夫人さへ俺を避けはじめ・時々どういふ風に俺に近附いていゝかを知らなかつた。いつも丁寧で他人の役に立たう立たうとしてゐるビズミョンコフも俺を避けた。俺は當時彼も俺の不幸仲間だと、彼もリザを戀してゐるのだと空想してゐた。しかし彼は決して俺のさういふ意味の暗示に答へなかつた・そして全然俺と言葉を交すのを厭がつてる樣子を示した。公爵の彼に對する態度は至極親しげであつた。殆んど彼を尊敬してゐると見える程だつた。ビズミョンコフにしても俺にしても、公爵とリザとにとつて何の邪魔にもならなかつた。しかし彼は俺の樣に彼等を避けず・粗野な樣子も見せず、傷けられてる風にも見えなかつた・そして彼等がそれを欲する時には・いつでも彼等の仲間に加はつた。さういふ場合に彼が別段とりわけて愉快さうに見えなかつたのは事實である・しかし彼の上機嫌はどんな場合でもいくらか抑制されてゐる氣味があつたのだ。

かういふ工合で約二週間過ぎた。公爵はたゞ好男子で伶悧なばかりでなかつた、彼はピアノを彈き、歌ひ、可成り上手にスケッチし、そして話しが巧かつた。彼於堡の最高の交際社會からひき出して來る彼の逸話は・いつも聽き手に非常な印象を與へた・彼が別段自身の話しを大したものに思つてゐないらしい風であつたから尚更であつた。

公爵のこの單純な(と言つて好いだらう)教養の結果は、彼のO――町に於ける大して永くなかつた滯留中に・その邊の人間が悉く彼に魅せられて了つたといふことであつた。吾々哀れなる曠野の住民を魅することは、より高い社會から來た者にとつて、いつでも至極容易な仕事であつた。公爵が足繁くオゾギン家を訪問すること(彼はいつも夜をそこで過した)は無論町の他の好い人間共の嫉妬を惹起した。しかし公爵は・悧巧な世間人のやうに・決して彼等のうちの一人をも蔑ろにしなかつた。彼は彼等すべてを訪問した。既婚未婚の何れを問はず・彼はすべての婦人に少くとも一と言はお世辭を言ひ掛け、甘んじて彼等から下手に凝つた硬い食物やえらい名前の附いた慘めな酒などの饗應を受けた。そして手短に言へば、愼重と巧妙な手際の模範なる態度振舞を示した。N――公爵は元來社交的な・融和的な・生々した態度の人間であつた、そしてこの場合には偶ま愼重を必要とする動機からして殊更さうであつた。彼は必ず何

事につけても定全に成功する人間であつたのだ。

彼の到着以來、オゾギン家では皆が時間の常ならぬ迅さで飛ぶことを感じてゐた。萬事が美しく運ばれた。主人は、何にも氣附かぬ振を裝うてゐたが、疑ひもなくかゝる息子を持つことを考へて祕かに手を擦り合せてゐた。公爵は公爵で、物事を最上の眞面目さと愼重さとを以て運んで行つた、と、突然、思ひ掛けぬ事件が持ち上つた……

また明日のことにしよう。今日は俺は疲れた。是等の記憶は墓穴の縁でさへなほ俺を苛立たせる。テレンチエウナは今日俺の鼻が既に尖りはじめたことを認めた、そしてそれはよくない徵候ださうだ。

三月二十七日　雪融けが續く

以上に述べた樣な狀態であつた。公爵とリザは雙方から惚れ合つてゐた。オゾギン夫婦はその成行きを見ようと待つてゐた。ビズミョンコフもこの事件の額縁の中に加はつてゐた。俺は氷上の魚の樣に藻掻き、全力を盡して監視してゐた、――俺は覺えてゐる、その當時俺が少くともリザが誘惑者の罠に落ちないようにする仕事に着手し、そしてそれ故に女中と運命的な、

「裏梯子」とに特別な注意を拂ひはじめたことを。――但し、一方では、俺は屢々、他日俺がどんな感ずべき寬容さを以て欺かれた犧牲者に向つて手を差し出し、そして彼女に「あの惡漢はあなたを騙しました、しかし私はあなたの眞實の友人です……お互に過去のことは忘れて幸福に暮しませうね！」といふであらう時の事を夢みて、終夜を過した。と、こゝに突然な喜ばしい音信が町ぢうに擴つた。この管區の司令官が、彼の私邸ゴルノスタエウカで、尊敬すべきお客のために、一大舞踏會を催さうと云ひ出したのである。O――町の役人は上は市長より下は藥劑師（それは極端に瘠せた獨逸人で、善い露西亞語のアクセントが使へる振をするせゐで、絕えず飛んでもない處に厭な馴れ〳〵しい言葉を使ふ癖があつた。）に至るまで招待を受けた。無論、準備のためごつた返しの大騷ぎが演ぜられた。ある化粧品屋は「素馨入り」、貼紙のある暗青色の髮油の瓶を十六賣つた。若い婦人達は胸部を緊めつけ胃の腑の上の處を鋭くぢき出した。窮屈な衣裳を用意した。母親達は帽子として怖しい建物を頭の上に拵へた。忙しい父親共は騷ぎの爲に死にさうになつた。待兼ねた日は遂に來た。俺も招待を受けた一人であつた。町からゴルノスタエウカ迄は大凡七八哩と數へられた。キリラ・マトウエイツチは俺に彼の馬車の中に席を提供した。しかし俺は斷つた、――丁度罰せられた子供が、兩親に意趣返しをしよ

う爲に、食卓の上の好きな菓子を拒むやうに。のみならず、俺は俺の居ることがリザをして氣詰りに感じさせるだらうと感じた。ビズミョンコフが俺に代つた。公爵は彼自身の馬車で行つた。俺はこの厳かな場合の故に高い金を出して傭つた見窄らしい小さな馬車で行つた。俺は舞踏會の模様は書くまい。萬事が常にさうである通りに行はれた。客間には驚くべく調子外れな喇叭を含んだ樂隊があつた。どうにも爲やうのない家族や、紫色の氷やねちねちしたレモン水などの爲に氣持が滅茶々々になつた田舎紳士が居た。踵のひしやけた靴を穿き、編んだ木綿の手套をつけた下僕共が居た。癩癇のためにひん曲つた顔を持つた好男子がゐた、その他様々なものがあつた。そしてこの小世界の一切はその太陽の周圍に、公爵の周圍に、廻轉してゐた。群集の中に埋もれ、眉の上に赤い痣を、頭の頂邊に青い花を持つた四十八の處女達からさへ顧みられずに、俺はたえず公爵とリザとを交る交る見詰めてゐた。彼女はその夜至極チャーミングに装つて、至極綺麗であつた。彼等は二度一緒に踊つたばかりであつた。(ほんとに、彼は彼女とマヅルカを踊つた。)けれど少くとも俺には彼等の間に祕密な絶えざる音信があるやうに思はれた。彼女を見てゐないとき、彼女に話してゐないときにすら、彼は矢張り彼女に、彼女ばかりに話しかけてゐた。彼はすつきりして華かで、人々に對して愛想がよかつた――たゞ彼女のみの爲に。彼女の顔は子供らしい歡喜と共に無邪氣な誇りを以て輝いてゐた。そして時々唐突にそれとは別のより深い感情を以て照り映えるのであつた。幸福が彼女から輝き出た。俺はこれ等すべてを觀察した。俺が彼等を見戌つたのはこれがはじめてゞはなかつた。……最初これは強く俺を傷けた。後になるとそれは、いはゞ、俺を感動させた。しかし遂には、俺を激怒させた。俺は突然異常な憤ろしさを感じた、そしてこの新しい感情を異常に歡ばしく思ひ、俺自身に對して或る傘徹を抱きさへしたことを記憶してゐる。「俺がまだ全然敗北したんぢやないといふ事を彼等に見せてやらう」と俺は俺自身に言つた。マヅルカの最初の誘ひ出す様な調べが聞えた時、俺は悠然とあたりを見廻した、そして冷たい落着いた容子で、赤いてらてらした鼻と釦が外れたかの様にぶざまに開けつ放しになつた口と低音ヴイオロの頸部を思ひ出させる瘠せた首とをもつた馬面の若い婦人に近附いた。俺は彼女の傍へ行つた、そして踵で何氣なく床をかたかた言はせながら、踊りに誘つた。彼女はぱつとした薔薇色でなく色の褪めた苔の淡紅色の衣裳を着けてゐた。彼女の頭には厚い青銅色の留針の上に縞のある萎けた甲蟲の様なものが顫へてゐた。そしてこの婦人は、もしも斯ういふ事が言へるならば、常習的の不成功と酸つぱい退屈とにまつたく漬りきつてゐた。この晩の最初から彼女は一度もその席から動かなかつ

た。何人も彼女に踊りの相手を頼まうと思はなかつた。十六歳の髮の薄い少年が、相手の無いところから、この婦人に言葉をかけようとして、彼女の方へ蹈み出しかけた。しかし思ひ直して彼女を眺め、そして急いで群集の中に紛れ込んだ。どんな嬉しさに充ちた驚きを以て彼女が俺の申し出でを承諾したかは想像が出來るだらう！　俺は勝誇つて彼女を舞踏室のまんなかを横切つて連れて行き、二脚の椅子を持つて來て彼女と共に丁度十組の、マヅルカの踊り手が造つてゐる輪の中に、ほとんど公爵の眞向ひに腰を下した。公爵は前に言つた樣にリザと踊つてゐた。俺も俺の相手も決して踊りの相手と所望されることによつて煩はされなかつた。それ故吾々は談話をする多くの時を持つた。本當を言ふと、俺の相手は何か意味のある纏つた話しをする能力を見せなかつた。彼女は彼女の口を主として俺がそれまで嘗て見たこともなかつた奇妙な下向きの微笑をすることに用ゐた。一方彼女はまた或る見えない力が彼女の顏を二つに引き裂かうとしてゐるかの樣に眼を上の方に擧げた。しかし俺は彼女の雄辯の缺乏を感じなかつた。幸福にも俺は憤怒に充ちてゐたので、俺の相手は俺を羞しがらせなかつた。俺は世界ちうの一切の物一切の人間に就いて、殊に町の若者や彼得堡の輕薄兒に就いて非難をはじめた、そしてそれを、到頭俺の相手が段々その微笑みをやめて眼を上方に向ける代りに突然――驚愕か

らだらうと俺は想像するが――はじめて彼女自身の顏に鼻のあることを氣附いたかの樣な極めて不思議な工合に、斜めに下の方を見初めた程、それ程長々と猛烈にやつた。そして私の隣りに坐つてゐた前に言つた町の好男子の一人は、一度も俺から眼を放さなかつた。彼は實際見慣れない場處で眼が醒めた舞臺上の役者の樣な表情で、「何だ、ほんとにお前なんか！」とでもいふ風に俺の顏を見詰めた。この長い猛烈な非難をやつてゐる間も、俺はなほ矢張り公爵とリザとを見戍つてゐた。彼等は絶えず相手を所望された、が俺は彼等が組んで踊つてゐる時もこの時ほど苦しくなかつた。そして彼等が並んで坐つて話し合ひながら、幸福な戀人達の面を片時も去ることなきあの甘美い微笑をほゝゑみ交してゐた時、その時すら俺はそれ程苦惱を覺えなかつた。がリザが一人の驃騎兵の猛烈な洒落者と部屋を横ぎつてゆき、公爵が彼女の青い紗のスカアフを膝に載せて自分の勝利を喜んでゐる樣に夢みる樣な眼附きで彼女の後を見送つたとき、その時、おゝ！その時、俺は堪へ難い苦惱を經驗した、そして憤怒の餘りひどい憎惡に充ちた言葉を續け樣に言ひ放つたので、俺の相手の眼はばつたり彼女の鼻に喰つ附いて動かなくなつた。そのうちにマヅルカは終局に近附きつゝあつた。La Confidante（賴信者）と呼ぶ種類のが始まつた。この舞踏ではまづ婦人が圈のなかに坐つて、誰か別の婦人を自分の信賴者に選

ぶ、そして一緒に踊りたいと思ふ紳士の名を彼女の耳に囁く。前の相手は舞踏者を代る代るその信頼者の處へ連れて來る。祕密を握つてゐる信頼者は彼等を拒否する、遂に豫め定められてあつた幸福な紳士が來るまで。リザが圈の眞中に坐つて主人の一人娘（それは人から「どうかあの娘に仕合せがあればよい！」と言はれる種類の女子の一人だつた）を信頼者に選んだ。公爵は彼女の選んだ紳士を發見すべくはじめた。十二人ばかりの青年を無駄に彼女の前へ連れて行つた後、（主人の娘は彼等すべてを最も愛想のよい微笑を以て拒否した）、彼は到頭私の方を向いた。この瞬間何か異常な物が俺のうちに起きた。俺は、言はゞ、全身が痙攣つた、そして拒らうとした、しかし立ち上つて、行つた。公爵は俺をリザの處に連れて行つた。……彼女は俺に目もくれなかつた。彼女の信頼者は頭を振つで拒否した。公爵は私の方へ振り向いた、そして、多分私の顏の鵞鳥の様な表情に刺激されたものか、俺に向つて深く頭をさげた。この皮肉な叩頭、俺の勝ち誇つた競爭者によつて俺に傳へられたこの拒否、彼の無雜作な微笑、リザの冷淡な態度、これ等すべてが俺をひつぱたいて狂憤にまで起たせた……。俺は公爵の傍へ動いて行つて激しい聲で囁いた。「あなたは私を嗤つてやるが至當だとお考へなんですね？」公爵は侮蔑的な驚きを以て俺を眺めた、再び俺の腕をとつた、そして俺を俺の元の席へ連れ

て歸る風を裝ひ乍ら冷たく答へた。「私が？」

『さうです。あなたがです！』と俺は低聲で言ひ進んだ、但し彼の意の儘に――彼に從つて――元の席に歸り乍ら。『あなたがです。しかし私は頭の空虚な彼得堡の成上り者にさういふ事を――』

公爵は沈靜に、ほとんど甘んじて身を遜して微笑した。俺の腕をとつて『君のいふことは解ります。しかし今は機が惡い、後ほど話しませう』と言つた。俺の傍を去つた、そしてビズミヨンコフの處へ行つて、彼をリザの處へ連れて行つた。蒼ざめた、小さな役人が彼女の選ばれたる相手だとわかつた。リザは彼を迎ふべく立ち上つた。頭に萎けた甲蟲を持つた婦人の傍に腰を下した俺はほとんど一個の英雄の樣に感じた。俺の心臟ははげしく鼓つた、俺の胸は糊の硬い襯衣の下で華かに勇しく波うつた。俺は深い急な氣息を吸ひ込んだ、そして俺の近くに居た例の好男子に、俺の方の側にあつた彼の脚が覺えずぶる／＼と震へたほど左程に莊嚴な睥睨を呉れた。この男が行つて了ふと、俺は舞踏者共の全群をじろ／＼見た。俺は二三の紳士が多少の訝りを以て俺を見詰めてゐるやうに思つた。だが大體俺と公爵との談しは氣が附かれずに濟んだらしかつた。……俺の競爭者はもう彼の椅子に歸つて、聊かも激した樣子はなく、いつ

もと同じ微笑を湛へてゐた。ビズミョンコフは彼女を彼女の席へ連れ戻つた。彼女は彼に親しげに頭を下げ、そして直ぐ、俺の想像によれば、多少の愕ろきを以て、公爵の方を向いた。しかし彼は上品に手を振つて、笑つてこれに答へた、そして何か、彼女に愉快なことを言つたらしかつた。彼女は喜びをもつて笑みくづれ、そして眼を落した、そしてそれから愛情に充ちた非難を以てそれを彼の上に注いだ。

俺のうちに突然發展したところの英雄的な氣の張りは、マヅルカが終るまでに消えなかつた。しかし俺はもう警句や憎々しい批評に耽つてゐなかつた。俺は俺の相手を陰鬱な冷嚴さを以て時々じろ〳〵見ることで自分を滿足させた。彼女は瞭かに俺を恐れはじめてゐた、そして全く口が利けなくなつて、俺が彼女を赤い帽を頭に載せた極めて肥滿した婦人であるところの彼女の母親の保護の下に連れて行くまで、絶えず眼を瞬いてゐた。脅かされた處女をその當然屬すべきものに返した後、俺は振り返つて窓ぎはに行つて腕を組んだ。そして次に起るべき事柄を待つてゐた俺は寧ろ長い間待たなくてはならなかつた。公爵は始終取りまかれてゐた——英吉利が海によつて取り續かれてゐるやうに取りまかれてゐた——會の主人公（その家族に就いては一々言はないことにして）や他のお客様によつて。そしてそれのみならず、彼は一般の

愕きの感情ゝ惹起すことなしに、俺の樣な何の重きをなさぬ人間の處へ來て話しはじめることは殆んど不可能であつた。この俺の重きをなさぬ事はその時俺にとつて一つの喜悅であつたことを、俺は記憶してゐる『宜しい』と俺は、彼が例へ詩人達の言草の樣に「一瞬の閃き」の間であらうとも兎に角彼の一顧を忝うした尊敬すべき人士の誰彼に鄭重に言葉をかけてゐるのを見成つたとき、考へた。『さあ宜しい、お前さん……お前さんは今に私の處へ來るだらうな……私はお前さんを侮辱したんだから。』到頭公爵は、彼の愛慕者達の群から巧みに免れて、俺の傍を通つた。何處か窓と俺の頭髮の間の邊を眺めた、振り向いて了はうとして、そして突然何事かを思ひ出したやうに立ち止つた。『あゝ、さうだ……』と彼ば微笑しながら俺の方を向いた。『序ですが、私少し許りあなたにお話したい事があります。』

最も執拗い二人の田舍紳士が公爵の後を追つかけて來てゐたが、多分この「少し許り話したい事」を官廳の仕事だと思つたのか、恭しく引き下つた。公爵は俺の腕をとつて傍へ連れて行つた。俺の心臟は肋骨の邊でどきん〳〵躍つてゐた。

『あなたは』と彼は口をきつた、「あなた」といふ語に力を入れて、そして俺の頰の邊を侮蔑的な表情で以て眺め乍ら（不思議なことに、この表情は彼の生々した上品な顏に此上もなくよく

似合つた。」「あなたは何か私に侮辱的なことを言はれましたね。」

「私は私の想ふ儘を言つたのです。」と俺は聲を高めながら言つた。

『し……靜かに』と彼は言つた『行儀のいゝ人間は喚かないものです。あなたは多分私と決闘をしたいのでせうね？』

『それはあなたの方でおきめになることです。』と俺は肩を聳かしながら答へた。

『私は是非なくあなたに挑戰しなくてはなりますまい。』彼は無造作に言つた。『あなたが先刻言はれたことを撤回されない限りは』

『私は何事も撤回する積りはありません。』と俺は誇りを以て答へた。

『さうですか？』と彼は皮肉な微笑を以て言つた『そんならば』彼は短い間をおいて續けた。

『私は明日あなたの處へ私の介添人をお差し向けする名譽を持ちませう。』

『結構です。』俺は一層無頓着な(と俺は言ひたい)聲で答へた。

公爵は輕く頭を下げた。

『私はあなたが私を頭の空虚な男だと考へられることを妨げるわけには行きません。』と彼は高慢に眼蓋を引き下げながら云ひ足した『しかしN——公爵は成上り者ではあり得ません。それではまた會ひませう、シュチカチュリン君。』

彼は素早く俺に背を向けた、そして再び會の主人の傍に行つた。會の主人はもういらいらしかけてゐた。

シュチカチュリン君……俺の名はチュルカチュリンだ。……俺はこの最後の侮辱に答へて彼に言ふべく何事をも考へだすことが出來なかつた、そして憤怒を以て彼を見送る許りであつた『明日まで』と俺は齒ぎしりし乍ら呟いた、そして自暴な放蕩者で至極好人物なコロベルヂエフと呼ぶウーラン槍騎兵隊の大尉で俺の知合の男を探し始めた。彼に俺は公爵との喧嘩の一條を話して、俺の介添になつて吳れるやう賴んだ。彼は、無論、直ぐと承諾した、そして俺は家に歸つた。

俺は終夜眠ることが出來なかつた——昂奮からで、臆病なせゐではない。俺は臆病者ではない。俺は俺がその時面と向つてゐた、生命を失ふこと——獨逸人どもが吾々に信ぜしめた樣に地上の最高の善——の可能に就いては實際殆んど考へなかつた。俺はたゞリザのことをの駄目になつた樣になつた樣々の希望を、俺が爲さねばならない筈の事を考へた。「俺は公爵を殺さうとしなくちやなるまいか？」と俺は自分に尋ねた、そして。無論、俺は彼を殺したかつた——

復讐の急からではなく、リザの幸福を欲する故に。しかし彼女はさういふ打撃に遭つて生きてゐまい。」と俺は進んで考へた。『いや、彼をして俺を殺させる方がいゝ！」俺はまた詰らない田舎役人の俺はあゝいふ重要な人物をして俺と決鬪させるのだといふことを思ひ返して、愉快だつたことを、白狀しなくてはならない。

朝の光がまだ是等のことを繰返し繰り返し考へ耽つてゐる俺を見出した。そして、それから程なく、コロベルチェフが姿を見せた。

『それで、彼は俺の部屋へ騷々しく入つて來ながら尋ねた。『公爵の介添人は何處に居るのだ？』

『まだ遲くて』俺はよわつて答へた。『七時だらう。無論公爵は寢てゐると僕は思ふね。』

『そんならば』騎兵士官は一向平氣な顏で答へた。『僕に茶を飲まして呉れ給へ。僕は昨夜から頭痛がするんだ。……昨夜はよつぴてこの服を脫がなかつた。但し本當はね』彼は欠伸をし乍ら言ひ足した。『僕はよく服を脫がないことがあるんだ。』

茶が彼に與へられた。彼は茶とラムを六杯飲んだ、パイプを四つ喫つた、俺に彼が前日馭者が使用することを拒んだ一匹の馬を殆んど無代同樣の値で買つたことを、そして彼はそれを前脚の片方を繃帶して驅けさせる積りでゐることを、話した、そして上衣も脫がずに、パイプを

啣へた儘、長椅子の上にぐつすり寢込んで了つた。俺は起き出でゝ書類を整理した。リザからの一通の紹介狀、――俺が彼女から受け取つた唯一の手紙――を、俺は將に俺の胸のところに入れようとした、が思ひ直してそれ抽斗へ投げ込んだ。コロベルチェフは頭を革の枕から外して微かに鼾を立てゝゐた。俺は記憶してゐる、長い間俺は彼の髯を入れない、大膽な、無造作なそして善良な顏を熟々觀察してゐた。十時に僕がビズミョンコフの到着を知らせた。公爵は彼を介添人に選んだのであつた。

吾々は一緒にぐつすり眠つてゐる騎兵士官を起した。彼は起き上り、ぼんやりした眼で吾々を見詰め、嗄れ聲でヴオドカを持つて來いと言つた。彼は正氣附いた、そしてビスミョンコフと挨拶を取り交した。ビスミョンコフは彼と一緒に次の部屋へ行つて、一切をとり決めた。よき介添人達の商議は長く續かなかつた。十五分後に、彼等は俺の寢室に入つて來た。コロベルチェフは俺に「俺達がその日三時頃ピストルで鬪ふであらう」ことを言つた。俺は承諾のしるしとして默つて俺の頭を下げた。ビズミョンコフは直ぐに俺達に挨拶して出て行つた。彼はさういふ仕事に慣れない人間の樣に稍や蒼ざめて內心昂奮してゐた。しかしそれにも拘らず、彼は至極丁寧で冷たかつた。俺は彼の前に、いはゞ、良心の苛責を感じて、彼の顏を敢て正面に

見ることをしなかつた。コロベルチエフは彼の馬の話を始めた。この談話は俺にとつて至極喜ばしかつた。俺は彼がリザのことを言ひ出すだらうと氣遣つた。しかし善良なる騎兵士官はお饒舌家ではなかつた、そしてその上、彼はあらゆる婦人を、何故だか知らないが、「青い反物」と呼んで輕蔑してた。二時に俺達は輕い食事をとつた、そして三時に定めの場處に行つた——それは俺が嘗てリザと一緒に散歩をしたあの赤楊の杜の中、崖から數碼の邊であつた。

俺達の方がさきに着いた、が公爵とビズミョンコフは俺達を長く待たせなかつた。公爵は誇張ではなく、薔薇の樣に鮮々してゐた。彼の鳶色の眼は、彼の帽の庇の下、あり餘る溫情を湛へてゐた。彼は葉巻を喫つてゐた、そしてコロベルチエフを見ると親しげに彼の手を握つて振つた。俺に對してさへ彼は至極穩かに頭を下げた。俺は、公爵とはあべこべに、自分の顏の蒼いことを意識した、そして俺の手は、俺の怖ろしい苦痛にまで、稍や震へてゐた。彼の咽喉はから〳〵だつた……俺は嘗て決鬪なるものをした事がなかつたのだ。「おゝ神よ！」俺は思つた。「どうかあの皮肉な紳士が俺の昂奮を臆病と取つてくれさへしなければ！」俺は內々俺の神經を呪つてゐた。が、遂に公爵の顏を眞直に眺めてそして彼の脣に殆んど見えない位の微笑を認めたとき、俺は突然再び憤怒を感じた、そして直に心が落ちついた。一方、吾々の介添人達は

境界線を定め、歩數を計り、拳銃に彈丸を塡めた。大抵コロベルチエフがやり、ビズミョンコフは寧ろ彼のことを見てゐた。それは素晴らしく好い日であつた——あの永久に記念すべき散歩の日と同じくらゐ晴れてゐた。濃い青空が、あの時の樣に、金綠の青葉の間から覗いてゐた。青葉の戰ぐ音は俺を嘲弄するやうに思はれた。公爵は若い菩提樹の幹に肩を凭せて彼の葉巻を喫ひつゞけた。

『どうかお兩人とも位置について下さい。用意。』とコロベルチエフは[illegible]頭言つた、吾々に拳銃を渡し乍ら。

公爵は二三歩彼方に行つて、立ち止つた、そして見返りながら肩越しに俺に尋ねた。『君はまだ君の言葉を撤回することを拒みますか？』

俺は彼に答へようとした。しかし聲が出なかつた、で俺は侮蔑的に手を振つてみせるだけにしなければならなかつた。公爵は再び微笑した、そして彼の位置に行つて身構へた。吾々は双方から近附きはじめた。俺は拳銃を擧げて、俺の敵の胸を狙はうとした——ところが突然それは、だれかゞ俺の肱を小突いたかの樣に、がくりとしてそして發射した、公爵はよろめいた、そして左の手を左の顳顬に當てた——血の絲が白い革の手套の下から彼の頰を傳うて流れ下つ

た。ビズミョンコフは彼のところへ馳け寄つた。

『大丈夫。』と彼は帽を脱りながら言つた。それを銃丸は射通したのだつた。『傷が頭で、而も私が倒れないところを見ると、ほんのかすり傷に相違ない。』

彼は靜かに衣嚢から麻の手巾を取りだして、それを血に染んだ毛に當てた。

俺は化石したかの様にぢつと彼を見詰め、身動きもしなかつた。

『境界線まで行つて呉れ給へ!』とコロベルチエフが嚴しく言つた。

俺は言はれる儘にした。

『決闘はこの儘續けますか?』と彼は言葉を續けてビズミョンコフに言つた。

ビズミョンコフは返事をしなかつた。けれど公爵は手巾を傷に當てたまゝ、境界線まで行つてゐる俺を窘しめて彼自身に滿足を與へようとすらせずに、微笑を以て答へた。『決闘は終りました。』そして空に向けて發射した。俺は憤怒と苦痛との爲に殆んど泣かむ許りであつた。俺の相手はその寛容を以て全く俺を泥土の中に蹂躙した。彼は俺を打ち碎いて了つたのであつた。俺は將に抗議を申し込まうと、彼をして俺に向つて發射させやうとしてゐた。が彼は俺の處へやつて來た・そして手を差し出した。

『これで私達の間の一切の事は忘れられました、ねえ?』と彼は弱しげな聲で言つた。

俺は彼の蒼白くなつた顔と、血に染んだ手巾を眺めた、そして全く動顚して、羞ぢ入つて、まつたく粉碎されて、俺は彼の手を握つた。

『諸君!』彼は介添人達の方を向きながら言ひ足した。『どうか一切秘密にして頂きたいものですが?』

『無論です!』とコロベルチエフは叫んだ。『ですが、公爵、私に……』

そして彼は公爵の頭の傷をしばつた。

公爵は、立ち去る際に、今一度俺に頭を下げた。しかしビズミョンコフは俺に目もくれなかつた。粉碎されて——道德的に粉碎されて——俺はコロベルチエフと共に歸途についた。

『おい、君どうしたんだ?』と騎兵大尉は俺に尋ねた。『氣を落ち着けろ。傷は何でもない。公爵は明日といはず今夜でも踊れるだらう。それとも君は公爵を殺し損ねて殘念がつてるのかい? さうだとすれば、そりあ君が惡いぜ。あの人は立派な人間だ。』

『あの男は何も俺を容赦する必要はないんだ?』と俺は稍あつて呟いた。

『ふん、さうなんか!』騎兵士官は穏かに答へた。……『あゝあ、君の様な筆を持つ人間はと

ても俺には堪らん!」

何うして彼が俺のことを文士だと考へたのか俺には解らない。

俺はあの不幸な決闘のあつた日の夜ぢうの俺の苦惱を述べることは絶對に出來ない。俺の虚榮心は名狀すべからざる程苦しんだ。俺を惱ましたのは俺の良心ではなかつた。俺自身の意氣地なさについての意識が俺を粉碎したのであつた。「俺は俺自身の行爲によつて最後の決定的な打擊を俺自身に與へた!」と俺は部屋を歩き廻り乍ら繰り返し續けた。「公爵は俺から傷けられて、俺を赦した……で、リザは今や彼のものだ。もう何物も彼女を救ふことは出來ない。何物も彼女を深淵の緣から引き戻すことは出來ない。」俺は俺達の決闘が、公爵の言葉にも拘らず、秘密にしておかれることが出來ないのを、よく知つてゐた。何としても、それはリザの耳に入らないで濟むことはあり得なかつた。

「公爵はさういふ馬鹿ではない。」と俺は劇しい狂憤において呟いた。「それを利用せずにおくものか!」……しかし、それは俺が間違つてゐた。無論、町ぢうが俺達の決闘とその原因とを知つた。しかし公爵がそれを洩らしたのではなかつた。あべこべに、頭を繃帶しそしてその說明を用意して彼がリザの前に現れた時、彼女はもう殘らず知つてゐた。……ビズミョンコフが俺

を裏切つたのか、それとも報知は他の隧道を通つて彼女に達したのか、俺は知らない。だが、實際小さな町で秘しておける事があるだらうか? どんな風にリザが彼を迎へたか、どんな風にオゾギン一家が彼を迎へたか、想像が出來る。俺自身に關しては、俺は俄かに一般の憤慨と爪彈きとの的になつた。一個の怪物、嫉妬深い、血に渴えた狂人になつて了つた。俺の僅かな知人は俺を癩病人か何ぞの樣に避けた。町の官權は直く樣公爵に人を派して、峻嚴な適當な方法で俺を罰する積りであることを言つて遣つた。公爵自身の執拗な、熱心な嘆願のほか何ものも俺を脅したこの禍を遠ざけなかつた。あの人間はあらゆる方法で俺を叩き潰す運命を持つてゐた。彼の寛容によつて、彼はいはゞ俺の頭上に俺の棺の蓋を閉めたのであつた。オゾギン家の玄關が立所に向つて閉ぢられたのは言ふまでもない。キリラ・マトウエイッチは俺が殘しておいた鉛筆を送り歸して寄越しさへした。實際は、あらゆる人々のなかでも、彼が俺に對して憤る理由は毫もなかつた。俺の「正氣の沙汰でない」(といふのが町ぢう一般の言ひ方であつた。)嫉妬は公爵とリザとの關係をいはゞ指摘し、決定した樣なものであつた。オゾギン夫妻も彼等の仲間の市民達も彼を目して殆んど彼女の婚約者となすに至つた。これは確かに彼のまつたく好むところでは無かつた。しかし彼は非常にリザに惹きつけられてゐた。そしてまた彼はそ

の當時まだその狙つてゐるものを手に入れてなかつた。悧巧な世間人のあらゆる巧妙さを以て彼はその新しい位置を利用した。そして忽ち、所謂彼の新しい役割の精神に入つて行つた。……しかし俺は！　俺自身について、俺の未來に就て、俺はその當時あらゆる希望を抛つた。苦痛が吾々の全存在を、荷を積み過ぎた荷車の樣にぎい〳〵軋らせる程度に達すると、それは可笑しく見えることをやめる筈だ。……しかしさうではない―　笑ひは淚に最後まで、それがもう流れ盡きてなくなるまで、伴ふ許りでなく、それはもう舌が動かなくなり、不平そのものが死んで了つた處にすら、鳴り響くのである。……そしてそれ故に、第一に俺は、俺自身に對してさへ、可笑しなものとして俺自身をさらけ出したくないし、第二に俺は恐ろしく疲れてゐるから、俺は今日はこゝでよして、俺の物語の結末は明日まで延期しよう。……

三月二十九日　輕い霜、昨日は雪が融けつゝあつた。

昨日俺は、この日記を續ける力がなかつた。ポプリシエチン同樣、俺は大方寢床に寢て、テレンチエウナと話してゐた。何といふ女だらう！　六十年前に彼女は疫病の爲に最初の婚約者を失つた。彼女は彼女のあらゆる子供の後に生き殘つた。彼女は赦すべからざる程年寄りであ

る飲みたいだけ茶を飲む、良いものを食ふ、そして着るものは暖かく着てゐる。そして昨日ちう彼女は何を話してゐたと諸君は思はれるか？　俺は前にいま一人のまつたく何も持たない婆さんに、彼女の胴衣に着ける爲に古い制服の半分蠹魚食つた襟を遣つたことがあつた……それを何故彼女に與れなかつた？　といふのだ。『わたしはあなたの看護人です……それに……おゝ、好い旦那樣、あんまりではありませんか……こんなにあなたの世話をしてあげたのに！』……などゝ言ふのだつた。容赦のない婆さんは彼女の非難を以て全く俺をへと〳〵に弱らせて了つた。……だが、俺の話に戻らう。

それで、俺は後半身を車の輪で轢かれた犬の樣に苦しんだ。人は自身の不幸に考へ耽ることからどれ程多くの幸福が得られるものであるかを俺が十分に曉つたのは、漸くこの時、俺がオゾギン家から追放された後のことであつた。おゝ人類よ、憫れむべき種族よ……だが、哲學的考察は罷めよう。俺は毎日を全き孤獨のうちに送つた、そしてただ最も迂遠な、屈辱的ですらある方法でオゾギン家の樣子や公爵の動靜を知ることが出來た。俺の使つてゐた男は公爵の馭者の女房の從弟と友達になつてゐたこの事實が俺に或る聊かの慰めを與へた、そして俺の召使は間もなく、俺の暗示や、ちよつとした贈物から、彼の主人が毎晩靴を脫いだ時彼にどういふ

いは彼もまた深く感動してゐるのだと想像した。

三度目に俺は彼女を教會堂で見た。公爵と一緒の馬車の中で見た日から約十日、俺の決鬪の日から三週間も經つてなかつた。公爵がそのため○……町に來た仕事はもう終つてゐた。が、彼は出發をやはり延期してゐた。彼得堡へは、病氣だと報告されてあつた。町では、彼が今日にもキリラ・マトイッチに正式の申し込をするだらうと期待されてゐた。俺は俺でこの最後の打擊を永久にこゝを立去る機會としようとばかり考へて待つてゐた。○——町は俺に居憎くなつてゐた。俺は家の內にゐられなくて朝から晩まで郊外をうろつき廻つてゐた。或る灰色の陰鬱な日、俺は散歩から歸つて來る途中、雨に遭つて教會堂に入つて行つた。夜の勤行が始まつた許りで、會衆は極く少かつた。俺はあたりを見廻した、すると突然、窓の近くに、見慣れた橫顏が眼にとまつた。最初の刹那、俺は誰だか判らなかつた。その蒼い顏、その元氣のない眼眸、その落ち凹んだ頰——それは俺が十四日前に見たあの同じリザであり得たか？　外套にくるまり、帽も着ずに、廣い白い窓から降ちる冷たい明りを橫顏に受けて、彼女はちつと聖像を見詰めてゐた、そして祈らうと、一種の生氣のない失神狀態から醒めようと、努めてゐる樣に見えた。胸に黃色の綠飾りを附けた頰の紅い、肥つた小童が彼女の背後に立つて、兩手を背で組ん

話をすればよいかを推察した。時々俺はオゾギン家の誰かや、ビズミョンコフや、公爵に街で遭ふ事があつた。……公爵にまたビズミョンコフに俺は頭を下げた、しかし口は利かなかつた。リザを俺はたつた三度見た。一度は母親と一緒に小間物屋に居るところを、一度は父と母と公爵と一緒の、幌無し馬車の中に、そして今一度は會堂で。無論俺は彼女に近附いてみるほど圖々しくなかつた、でたゞ遠方から眺めてる許りであつた。店頭では彼女は考へる事があり過ぎ多忙すぎるやうに見えたが快活であつた。彼女は自分で何事か指圖して、忙がしくリボンを選りわけてゐた、母親は兩手を膝の上に組んで、鼻を空に浮せて、兒を愛する母親達にのみ許されてある馬鹿げた、心をうちこんだ微笑を湛へながら、娘を見戍つてゐた。公爵と一緒の馬車の中ではリザは——俺は決してあの時の事を忘れはすまい！　老人夫婦は後ろの席に坐り、リザと公爵とは前方の席に居た。彼女はいつもより蒼かつた、彼女の頰には淡紅い二つの點がほんのり見られた。彼女は半ば公爵の方を向いてゐた。右の手を眞直にして軀を支へ（左の手には日翳を持つてゐた）小さな頭を懶げに俛れて、彼女のその表情に充ちた眼を以て彼の顏に眞直に見入つてゐた。その刹那彼女は彼女自身をまつたく彼の前に投げ出し、永久に彼に身を委せてゐた。俺は彼の顏をよく見る暇がなかつた——馬車は餘りに早く、驅け過ぎた。——しかし

で、睡さうな驚いた顔附で、その女主人を見詰めてゐた。俺は軀ぢうぶる〳〵顫へた、彼女のところへ行かうとした、しかし思ひ止つた。俺は惱ましい豫感を以て息詰るのを感じた。勤行が果てるまで、リザは身動きもしなかつた。人々は皆出て行つた。役僧が一人悠然と入口に向つて動き出した、が彼女はまだ動かなかつた。小童は彼女のところへ行つて、何か言ひながら彼女の肱に觸つた。彼女は見廻した、片手を顔のところへ持つて行つた、そして出て行つた。俺は稍や離れて彼女のあとをその家まで跟いて行つた、そしてそれから自分の宿に歸つた。

『彼女は失はれた!』と俺は自分の部屋に入つたのち叫んだ。

一個の人間として俺は言ふ、俺は今日に至るまで俺のその時の感情はどんなであつたかを知らない。俺は合掌して長椅子に身を投げ、眼をぢつと床に注いだことを覺えてゐる。しかし俺は知らない、俺の悲哀の最中にあつて俺は何事かを喜んでゐなかつたか何うかを……俺はもしか俺自身の爲にのみ書いてゐるのでないなら、決して何の樣なことがあつてもこれを認めはしないのだ。俺はそれまで、確かに、怖るべき、はら〳〵する樣な樣々な疑惑に苦しめられてゐた。……そして俺は多分、その俺の樣々な疑惑の通りにならなかつたならばひどく面喰つた筈だといふ事を誰が知らう?『男心といふものはさうしたものだ!』と誰か中年の露西亞人の

先生ならば、こゝで紅玉髓の指輪で飾つた肥つた人差指を擧げ乍ら、思ひ深げな聲で叫ぶだらう。だが吾々は紅玉髓と思ひ深げに聲とを持つた露西亞の先生の意見は何の關りがあらう?

それは兎に角として、俺の豫感は十分根據のあつた事が判つた。公爵が、多分彼得堡から召喚を受けた結果だらう、行つて了つたといふ噂が町ぢうに擴つた。彼がキリラ・マトウエイッチにも彼の妻君にも何等の申出でもせずに行つて了つた。そしてリザは生涯彼から騙されたことを嘆くだらうといふ噂が。公爵の申出はまつたく思ひ掛けなかつた。その前夜すら彼の馭者も俺の召使が俺に言つた所によれば、主人の目論見を聊かも知らなかつたのであつた。この報せ微全くの熱病に投げ入れた。俺は直ぐ樣服を着換へてオゾギン家へ急がうとした、しかし考へ直して見ると、訪問は次の日まで待つ方がよいやうに思はれた。俺は、然し、宿に止まつて損はしなかつた。その夜、何かの拍子でO——町へ流れついた彷徨へる希臘人なるパンドロ・ピポピコロといふ男が大急ぎで俺に會ひに來た。それは最も仰々しい雜談家で、誰よりも俺と公爵との決鬪に就いて俺のことを憤慨してゐた男であつた。彼は俺に取次ぎの暇も與へず、騒々しく俺の部屋に駈け込むと、温か俺の手を握つて、千度も俺の赦しを請ひ、俺のことを寛量と勇氣との權化と呼び、公爵を最も暗い色で塗りたて、オゾギン夫婦を非難して、彼等相應の天罰

を蒙つたのだと言ひ・序でにリザのことをちよつと言つて、それから俺の肩に接吻して、急いで行つて了つた。様々の話のうちに、俺は彼から公爵がその出發の前夜、キリラ・マトウエイッチの遠廻しの質問に答へて、彼は何人をも騙す積りはなかつたこと及び結婚する考へはないことを冷かに答へ、立ち上つて、頭を叩げて、そしてそれつきりだつたことを聞いた。……

翌日俺はオゾギン家へ出掛けた。近親の取次人は俺を見ると、電光の樣に彼の腰掛から跳び上つた、俺は彼に取次を賴んだ。彼は急いで行つて直ぐ歸つて來た。「お入りなさいまし。」と彼は言つた。「どうかお入り下さいましと旦那樣が……。」俺はキリラ・マトウエイッチの書齋に入つた。……殘りは明日。

三月三十日　霜

で、俺はキリラ・マトウエイッチの書齋に入つて行つた。あの身分の高いお役人が急いで褞袍をかなぐり棄てゝ兩腕を擴げて近附いて來た時の、俺自身の顏を、今俺に見せて呉れる人があつたらば、俺は隨分いゝ金を拂つてやらう。俺は高ぶらぬ勝利と穩かな同情とそして無限の寬量の完全な一幅の繪であつたに相違ない。俺は俺自身をスキピオ・アフリカナスの樣なもの

を感じた。オゾギンは目に見えて狼狽し、大によわつてゐた。彼は俺の眼を避け、そしてもぢもぢし續けた。俺はまた彼が自然な大聲で話し、そして槪して至極漠然とした話振りをすることに氣が附いた。漠然と、しかし穩かに彼は俺の赦しを請うた。漠然と彼は彼等の立去つた客のことを言ひ・僞瞞及び地上の幸福の當てにならぬ事について漠然とした槪論を附け加へ、そして俄に眼に淚の浮ぶのを覺えて、多分その淚の原因について俺を欺くために、急いで一摘みの嗅煙草をとつた。……彼は露西亞產の綠色のを使用した、そしてそれが人間の眼を二三分間鈍くぼんやり見せるところの淚を、老人の眼にさへ强ひることはよく知られてゐることである。

俺は、言ふまでもなく、至極氣を附けてこの老人の相手をした。彼の妻君と娘との健康をたづね、そして直ぐ談話を當時興味のあつた穀物の循環栽培のことに向けた。俺はいつもの服裝だつたが、俺を充した穩かな禮儀と和らかな寬恕との氣持は、俺に生々した目出度いやうな感覺を與へて、俺は白い胴衣に白い頸飾を　けてゐるやうな氣がした。一つの事が俺を苛々さした——リザを見たいといふ考へが。……オゾギンは、到頭、自分から俺を妻君のところへ連れて行かうと言ひ出した。この深切なしかし馬鹿な女は俺を見ると最初ひどく狼狽した。しかし彼女の頭腦は同じ印象を長く保つてゐることは出來なかつた、で彼女は直ぐと落着いた。到頭

俺はリザに會つた――彼女が部室に入つて來た。……

俺は彼女の中に一個の羞ぢ入つた、悔改めた罪人を見出すだらうと豫期してゐた、そして前以て最も愛情ある、慰めるやうな表情を用意してゐた。……それは決して嘘でない。俺は眞實彼女を愛し、そして彼女を救すことの、彼女に向つて俺の手を差し出すことの幸福に渴ゑてゐた。併し俺の名狀すべからざる驚きにまで、俺の意味深い辭儀に答へて、彼女は冷たく笑つた。「おや、あなたでしたの?!」と無造作に言つた、そして直ぐと傍を向いて了つた。彼女の笑ひが無理に笑つたものゝ樣に見え、たとへさうでなくとも兎に角彼女の怖ろしく瘠せ細つた顏に似合はなかつたのは本當である……が、それにしても矢張り、俺はさういふ風に迎へられることを豫期してなかつた。……俺は驚きの眼を見張つて彼女を眺めた。……何といふ彼女の變り樣であつたらう! 嘗ての子供とその時俺の前にゐた女との間には、何等共通なところはなかつた。彼女は、いはゞ、成長しきつて、ぐつと延びきつてゐた。彼女の顏貌のすべてが、殊に脣がはつきり形がきまつた樣に見えた。彼女の眼眸はより深く、より硬く、より陰鬱になつてゐた。俺はヂンナアの時までオゾギン家にとゞまつた。彼女は立上つた部屋から出て行つた、そして又戾つて來た、人から何か聞かれゝば落着いて返事をした、そして殊更に俺に目も吳

れないのを俺は見た。彼女は俺がすんでのことで彼女の戀人を殺すところであつたに拘らず、彼女の怒りに値しないことを俺に感じさせようとした。俺は到頭辛抱を失くした。意地の惡い諷刺めいた言葉が俺の脣から出た。……彼女ははつとなつた、俺はさつと一と目見た、立ち上つた。そして窓のところへ行き乍ら稍震へ聲で言つた。『あなたは好きな事を言つてよござんす。だけど私言つておきます、私あの人を愛してます、これから先もいつも愛するでせう。あの人が私に何か惡い事をしたと思はないで下さい。あべこべですわ。』彼女の聲は亂れた。彼女は言ひ止んだ……自分を抑へようとした、けれど出來なかつた、わつと泣き出した、そして部屋から出て行つた。……老人達はひどく動顚して了つた。……俺は兩人の手を握つて、嘆息して天を仰いだ、そして辭して歸つた。

俺はあまりに弱つてゐる。俺はあまりに僅かな時間しか殘されてゐない。俺はオゾギン家との交際が復活してのち俺のなかに起つたところの、あの苦しい思ひ返しやしつかりした決心やの新しい列り、その他いはゆる心內の葛藤の果實などを、從前の樣に細々と記述することは出來ない。俺はリザが今なほ公爵を愛し且つ長く愛するであらうことを疑はなかつた。併し不可抗なりし事情と仲直りした人の樣に、そして俺自身の心を平和におかうと焦燥つてゐる爲に、

俺は彼女の愛のなぞは夢にも考へなかつた。俺は唯彼女の好意を欲した。彼女の信頼を、彼女の尊敬を得ることを欲した、それ等は、經驗ある人士が受合つて言ふやうに、結婚の幸福の最も確かなる基礎を形づくるものである。……不幸にして、俺は一つの重大な事情を見失つてゐたそれはリザがあの決闘の日以來ずつと俺を憎んでゐたと云ふことであつた。俺はこれを餘りに遲く發見した。俺は、以前の樣にオゾギン家の足繁き訪問者であつた。キリラ・マトウエイッチは以前よりも自由に感情を見せ愛想よく俺を迎へた。俺は彼が喜んで彼女の娘を俺に與れるであらうことを信ずべき根據をさへ持つた、俺は決して特に望ましい相手ではなかつたけれども、輿論は彼とリザとに對してひどく峻嚴であつた、そしてそれに反して俺は九天の高きにまで賞揚せられた。リザの俺に對する態度は變らなかつた。彼女は大抵默つてゐた。食事をして與れと言はれゝば食事をした、悲しみの色を外に現はさなかつた、しかしそれにも拘らず、蠟燭の樣に段々消えて行つた。俺はキリラ・マトウエイッチのために、彼が彼女をあらゆる方法を盡していたはつたことを言つておかなくてはならない。オゾギン老夫人は、彼女の哀れな雛鳥を見るとき、たゞ牡鷄の樣に羽を膨らすばかりでゐた。リザが避けない人はたゞ一人あつたそれはビズミョンコフであつた。(但し彼女は彼にすらあまり口は利かなかつたけれども)老夫

婦の彼に對する態度は寧ろ、粗暴ではないまでも、よそ〳〵しかつた。彼等に決闘で公爵の介添人になつたといふ理由で彼を赦すことが出來なかつた。しかし彼は彼等の不愛想に氣が附かないかの樣に、やはり引續いて彼等に會ひに行つた。彼は俺にはひどく冷たかつた、そして——不思議なことには——俺は彼に對して恐れを感ずる樣な工合であつた。この狀態は二週間のあひだ續いた到頭、一晩眠らなかつた後、俺はリザとの間に一切解決を附けようと決心した。彼女に俺の心を打ち明けよう、彼女にもし、彼女がその手を俺に與へて以前の信頼を今一度持つて與れるならば、俺は過去の出來事や一切の可能な噂や惡評に拘らず 俺自身はたゞ餘りにも幸福な者と觀るであらうといふ事を、話さうと決心した。俺は實際俺が學校の教科書に所謂比類なき寬容の標本として書かれてある實例を示して居ることを、またたゞ純粹の驚愕をもつて彼女が承諾するであらうことを眞面目に想像した。兎に角、俺は說明をしてそして苦しい中途半端な狀態から逃げ出さうと決心した。

オゾギン家の家の背後に可成り大きな庭があつた。それは手入れをせず草木の蔓る儘に任せてあつて、一番端に菩提樹の小さな叢林があつた。この叢林の眞中に支那風の小さな四阿が立つてゐて、木の柵が庭と行止りの逕とを分けてあつた。リザは時々、幾時間も一人でこの庭を

散歩する習慣があつた。キリラ・マトウエイツチはこれを知つてゐた，そして彼女の邪魔をしたり・後をつけたりすることを禁じた。彼女の悲歎は自然に消滅させるがよい・といふ彼の意見であつた。食事時などに彼女が家の内に見えないと・彼等は階段の端で鈴を鳴らしさへすればよかつた、さうすると彼女は直ぐと姿を現した・脣や眼に同じ頑固な沈默をもち・何か小さな葉を手の内で揉みくちやにして。で、或日俺は彼女の家の内に居ないことを見濟して・歸るふりをしてキリラ・マトウエイツチに挨拶し、帽子を冠つて玄關から前庭に・前庭から街へ出た、しかし直ぐとまた異常な迅さで門內へ駈け戾り・臺所を通つて庭園に入つた。仕合せと誰にも見附からなかつた。愚圖々々して居らずに・俺は颯々と叢のなかへ行つて行つた。俺の前の小逕にリザが立つてゐた。俺の心臓は烈しく躍つた俺は立ち止つた・清い息をぐつと吸ひ込んだ・そしてすぐ彼女の傍へ行かうとした。とその時突然彼女は振り返らずに片手を擧げた・そして耳を澄した。……行止りの小逕の方の叢林の後ろから、誰かゞ柵を叩いてゐる樣なノックの音が二つ瞭り聞えた。リザは手を拍いた・門の戶の微かにぎいと鳴るのが聞えた。そして叢林からビズミョンコフが歩み出た。俺は急いで樹の後ろに隱れた。リザは默つて彼の方に向いた。……默つて彼は彼女の腕を自分の腕にかい込み、そして兩人は靜かに小逕に沿うて歩い

た。俺は愕然として彼等のあとを見送つた。彼等は立止つた、見廻した、叢のむかうに見えなくなつた・また現れた、そして最後に四阿の中に入つた。この四阿といふのは、入口が一つと小窓が一つある小さな圓い建物であつた。中央に細かな綠の苔に蔽はれた古い一本脚の卓子が立つてゐた。濕つた、黝ずんだ壁から少し離れて二脚の色の剝げた樅材の腰掛があつた。此處で、過ぎし昔、わけて暑い日に、恐らく年に一度かそこいら、彼等・茶を喫んだのであつたらう。入口の戶はよく閉らず、窓框は長い以前にはづれて、たゞ端の方だけで烏の破れた翼の樣に寂しげにくつついてゐた。俺は四阿に忍び寄つた、そして窓の隙間から氣を附けて覗いた。リザは頭をたれて、腰掛の一つに坐つてゐた。右の手は膝に橫はり、左の手はビズミョンコフが彼の兩掌の中に握つてゐた。彼は思遣り深げに彼女を眺めてゐた。

『今日は氣分はどうですか？』と彼は低聲に彼女に尋ねた。

『同じことよ。』彼女は答へた。『よくも惡くもないわ。――やはり空虛が怖ろしい空虛がある許りだわ。』彼女はやるせなげに眼を擧げながら・言ひ足した。

ビズミョンコフは默つてゐた

『あなたどう思つて。』と彼女は言葉を繼いだ。『あの人いま一度手紙を吳れるでせうか？』

『私はさう思ひませんね、リザウエタ・キリロウナ！』

　彼女は默つた。

『さうね、あの人手紙を與れる筈はないわ。あの人は最初の手紙で何もかも言つて寄越しなすつた。わたしあの人のお嫁になれなかつた。だけどわたし幸福だつた……僅かの間……わたし幸福だつた……』

　ビズミョンコフは眼を伏せた。

『あゝ。』彼女は目ばやに言ひ續けた。『わたしあのチュルカチュリンがどれ程厭だか……わたしいつでもあの人の手に見える樣に思ふのよ……あの人の血が。』（俺は隙間のうしろでぶるぶる戰いた。）『だけど、多分』彼女は夢みるやうに言ひ足した。『あの決鬪がなかつたらば……あゝ、わたしあの人の傷をしたのを見た時、自分はすつかりあの人のものだと感じたのよ。』

『チュルカチュリンはあなたを愛してゐます。』とビズミョンコフは言つた

『それがわたしにとつて何でせう？　わたし誰の愛も欲しくない。』……彼女は言ひ止んだ、そしてゆつくり附け足した。『あなたのほかは。さうなのよ、あなたの愛はわたしに必要なのよ、あなたがゐてくれなくちや、わたし生きて居られないわ。あなたのお蔭でわたし怖ろしい苦痛

を辛抱が出來たのよ。……』

　彼女は言葉を途切らした。……ビズミョンコフは父親の樣な優しさを以て彼女の手を撫で始めた。

『どうも致方がありません！　どうすればよいのでせう！　どうすれば？　リザウエタ・キリロウナ！』彼は幾度か同じ事を繰り返した。

『ほんとにかうなつては』彼女は生氣のない聲で話し續けた。『わたし死ぬほかないと思ふのよ。あなたが居て下さらなくては。わたしの力になつて下さるのはあなた丈けよ。そればかりでなく、あなたはわたしにあの人の事を思ひ出させて與れます。……あなたは何も彼も御存知ですわ、ね。あなたあの人があの時どんなに立派だつたか覺えてゐらしつて？……だけど御免なさい、あなたお辛いでせう……』

『構ひません、構ひません、話して下さい！　詰らないことを！　あなたさへお仕合せなら……』とビズミョンコフは彼女を遮つた。

『あなたはほんとに好い方ね、ビズミョンコフ。』彼女は言葉を繼いで、『あなたは天使の樣に好い方よ。わたし　どうすればいゝでせう！　わたし自分はあの人の事を死ぬまで愛するだらうと

思ふのですよ。わたしあの人を赦しました。わたしあの人に感謝してゐます。あの人が幸福でゐらつしやるやうに神様にお祈りします。どうかあの人にあの人のお氣に適つた夫人さんがお出來になるように！』――そして彼女の眼に涙が充ちた――『たゞどうかわたしのことをお忘れにならないやうに！　時々あの人のリザを想ひ出して下さるように！――行きませう？』ちよいと默つてゐた後、彼女は言ひ足した。

ビズミョンコフは彼女の手を自分の肩に持つて行つた。

『わたし知つてゐます。』彼女はまた熱い聲で言ひ出した。『皆ながわたしのことを惡く言つてゐます。誰も彼もわたしに石を投げてゐます。構はないわ！　どんな事があつても、わたしの慘めさをあの人達の仕合せに取り換へようとは思はないわ……いゝえ……いゝえ……あの人はわたしを長く愛しなかつたけれど、やはりわたしを愛して呉れました。あの人は決してわたしを騙したのではありません。あの人は一度もわたしを妻にしようとは仰しやらなかつた。わたしもそんなことを夢にも想つたことはありません。それは氣の毒な父さんがさうしたかつたのです。そして今でもわたし全く不仕合せではありません。記憶がわたしに殘つて居ります、そしてどんな怖ろしい結果が來ても……こゝに居るとわたし息が詰りさうだ……わたし一番おしまひにあの人に會つたのは此處でした。……外へ出て空氣を吸ひませう。』

彼等は立ち上つた。俺は辛うじて一方に退いて菩提樹の蔭に身を匿すことが出來た。彼等は四阿から出て來た、そして、俺が彼等の足音で判じ得たところでは、叢林の中に入つて了つた。俺がどれ程の間そこに身動きもせず、茫然自失したまゝ突つ立つてゐたか知らない。と、突然俺は再び足音を聞いた。俺ははつとして、隱れ場處から氣を附けて覗いて見た。ビズミョンコフとリザが同じ路を歸つて來つゝあつた。兩人とも、殊にビズミョンコフの方が非常に昂奮してゐた。俺は彼は泣いてゐたのかと想つた。リザは立ち止つた。彼を眺めた、そしてはつきりと次の言葉を言つた。『わたし承諾します、ビズミョンコフ。もしあなたがわたしを救はうとして、わたしを怖ろしい立場から助け出さうとしてゐらつしやる許りならば、わたし決して承諾しませんわ、けれどもあなたはわたしを愛して居られます。あなたは何も彼も知つて居らしつて――そしてわたしを愛して下さるのです。わたしあなたの樣に信頼のできる、眞實なお友達はほかにありません。わたしあなたの妻になりますわ。』

ビズミョンコフは彼女の手に接吻した。彼女は悲しげに彼に微笑みかけ、そして家の方へ行つて了つた。ビズミョンコフは叢林の中へ駈け込んだ、そして俺は俺の歸る所へ歸つた。多分

ビズミョンコフがリザに、丁度俺が彼女に言ふ積りであつた通りの事を言つて、そして彼女が丁度俺が彼女から聞かうと憧れてゐた通りの答へを彼に與へたことを見た上は、俺はその上俺自身を苦める必要は無かつた。二週間と經たないうちに彼女は彼に嫁いだ、オゾギン老夫婦はどんな夫にしろ彼女のために得られたことを感謝した。

さて、聞かして貰ひたいものだ、俺は一個のよけい者ではないか？ 俺はこの物語の始から終までを通じてよけい者としての役割を演じなかつたか？ 公爵の役割は……それは言ふを須らない……ビズミョンコフの役割も、これも解つてゐる。……だが俺は――何の爲に俺をこの中に混ぜこまれたのか？……荷馬車の無意義な第五の車輪だ！……それは俺にとつて辛い、苦しい事だ……だが、それ、傳馬船を曳く男等がいふではないか、『うんとこ、やれ、いま一と息だ！』――うんとこ、やれ、いま一日だ、さうすればもう俺にとつて苦さも甘さも何もなからう。

三月三十一日

どうも工合がよくない。俺は今日はこれを床の中で書いてゐる。昨夜からかけて天候に突然の變化があつた。今日は暑くて、ほとんど夏の日の樣だ。一切のものが溶け、破碎し、流れ去りつゝある。空氣は縛めを解かれた地の香に、強い、重たい息詰まるやうな香に充ちてゐる。何處もかも一面に蒸氣が立つてゐる。太陽はひし／＼と叩きつけて、一切のものを粉碎してゐるやうだ。俺は非常に工合が惡い、俺は壞れてゆくやうだ。

俺は俺の日記を書く積りだつた、そしてその代りに、何をしたか？ 俺は俺の生涯中の一つの出來事を話した。俺はくだらないお饒舌を續けた。眠つてゐた思ひ出が俺を醒して俺を引き摺つて行つた。俺は急がずに、細々と書いた。恰かも幾年もの時日を持つてるかの樣に。そして今はもう、書き進むべき時が無い。死が、死が近附きつゝある。俺は彼女の降りて來る脅かす樣な足音を聞く。時が來た……時が來た……

そして實際、それがどうしたといふのだ？ 何を俺が書いたとして一切同じことではないか？ 死を目前に控へては、この世の最後の物思ひも消えて行く。俺は心が沈靜まつたことを感ずる。俺はより單純に、より明晰になりつゝある。あまりに遲く俺は頭が良くなつた！……不思議なことだ！ 俺は靜かになつた――確かに、そして同時に――俺は恐れに充ちてゐる。さうだ、俺は恐れに充ちてゐる。參つた、欠伸をしてゐる深淵に半ば落ちかゝつて、俺は身を震

はして、眼を外らして、貪るやうな熱い眼附でまはりの一切の物を視てゐる。あらゆる事物が二重にも俺にとつて貴い。俺は汚れた四つの壁のあらゆる點に向つて永の訣れを告げ乍ら、俺の貧しい、陰氣臭い部屋をいくら眺めても足りない。もうこれきりだから十分に見ておけ、俺の眼よ。生命は引き退きつゝある。徐々と滑かに彼女は俺から飛び去りつゝある、岸が海上にある人の眼から飛び去る樣に。俺の看護人の、暗い頭巾でしばつた老いたる黄色い顏よ、卓子の上で唸つてゐるサモワルよ、窓のゼラニウムの鉢よ、そして、お前、俺の哀れな犬のトソルよ、俺がこれを書くに使うてゐるペンよ、俺自身の手よ、俺はいまお前達を見てゐる……そこにお前達は存在する、そこに……そんな事があらうか……あり得やうか、今日……俺はお前達を二度と見ないであらう！　生命と別れるのは生命のあるものにとつて困難な事だ！　何故お前はそんなに俺に甘えるのだ、可哀想な犬よ？　何故お前は俺の寢床に前足を置きに來て、お前の深切な、悲しげな眼をぢつと俺の上において、尻尾の房をそんなに烈しく振るのだ？お前は俺を氣の毒に思ふのか？　それともお前の主人が間もなく行つて了ふことをもう感じてゐるのか？　あゝ、俺が俺の部屋のあらゆる物の上にぢつと考へを据ゑておく事が出來さへすれば！　俺はこの俺の思出の記が陰鬱で何の價値もないことを知つてゐる。しかし俺はこれ以

外に持たないのだ。リザが言つた樣に「空虚・怖るべき空虚！」だ。

「おゝ神樣、私の神樣！　こゝに私は死なうとして居ります。……愛することが出來そして愛しようとしてゐる一つの心臟が間もなく鼓動を止めます。……そしてそれが一度も幸福といふものを知ることなく、一度も愛の甘美い重荷の下に横はつたこともなくて、永久に靜かになつて了ふといふことがあり得ようか？　あゝ、そんな事のありやう筈はない、ありやう筈はない俺はそれを知つてゐる。……もしも、今、少くとも、死ぬ前に——何となれば死は兎に角神聖なものだから、兎に角どんな物をも昂揚するから——もしも誰のでもいゝ、深切な、悲しい、友情ある聲が俺の上に俺自身の悲しみの永訣の歌を歌つて呉れるならば、俺は、おそらく、諦めて眠ることが出來るだらう。しかし愚かな死にざまをすることは、愚かな死にざまをすることは……

俺は譫言を言ひ始めたやうだ。

さやうなら、人生よ！　さやうなら、俺の庭園よ！　そしてお前、俺の菩提樹よ！　夏が來たらば頭から足まですつかり花の着物を着ることを忘れるな……そしてお前の香ばしい蔭の中に、鮮々した草の下に、風に輕く搖られるお前の葉の囁聲のお饒舌りの間に眠ることが人々に

とつて快くあらしめよ！　おさらば、おさらば！　おさらば、此の世の一切のものよ、永遠に！

さやうなら、リザ！　俺はこの二つの言葉を書いた、そして殆んど大聲に笑つた。この感傷的な言葉は書物から盗んだもの丶様に俺には思はれる。何だか俺はセンチメンタルな小說を書いてその中の絕望的の手紙をこれで結んだといふ氣がする。

明日は四月一日だ。俺は明日死ぬのであらうか？　もしさうだとすれば、それは餘りに似合はしくない事だ。俺にとつては……だが、醫者は今日はひどくお喋舌りをして行つたつけ！

四月一日

もうおしまひだ……俺の生涯は終つた。俺はたしかに今日死ぬだらう。戶外は暑い……殆んど息が詰るやうだ……それとも俺の肺がもう呼吸をすることを拒んでゐるのか？　俺の小喜劇はおしまひになつた。幕が降りるところだ。

虛無に歸して、俺はよけい者であることを止めるのだ……

あゝ、あの太陽の燦然たることよ！　あの力强い無數の光線は永劫を息づいてゐる……さやうなら、テレンチェウナ！……今朝窓側に坐つてゐた時彼女は泣いてゐた……多分俺のことを

泣いてくれたのだらう！……そして多分彼女も軈て死なねばならないからであらう。俺は彼女にトレゾルを殺さないやうに約束させた。

俺はもう書けなくなつた。ペンを置かう。……もう潮時だ。死は既に夜の鋪道を驅ける馬車のやうに段々響きを高めながら近附いて來る。もうそこに來た。すぐ眼の前にちら／＼してゐる。あの豫言者の頭髮を逆てた輕い氣息のやうに。

俺はもう死ぬ……。生命ある者等は尙は生きて居れ……。

そして墓の周圍に
若き生命は歡びうたへ
そしてそしらぬ顏の自然は
無窮の美を以て輝け

編纂者のノオト。――この最後の行の下に大きな頭髮や口髭のある。眼は眞直ぐ前を見、睫毛は光線のやうに出てゐる一つの横顏が書いてあつた。そし　その首の下に何人かゞ次の數行を書いてあつ

た。

この原稿は讀まれた
そして内容は贊成されなかつた
ピータァ、ヅドチエシンによつて
わが、わが、
わが親しき君、
ピータァ　ヅドチエシンよ
親しき君よ！

しかしこれ等の數行の筆蹟は原稿の他の部分のそれとは聊かも似てゐないから、編纂者は結局それは後になつて他の人が附け足したのだと決定して間違いないと考へる。殊にチユルカチユリン君は實際千八百——年四月の一日と二日との間の夜に、彼の生れ故郷の「羊の泉」村で死んだのだといふことを編纂者は知つたからである。

ブーニンとバブリン

（ピオトル・ペトロウイッチの物語）

私はもう年が寄つて身體の工合もよくない。私の考へは一日ごとに近附いてくる死の淵をともすれば覗きこんで思案してゐる。稀にしか私は過去の事を考へない。稀にしか私はたましひの眼を後ろに振り向けることはせぬ。たゞ時折り――冬ならば燃え盛る薪の前に身動きもせず坐つてゐる時、夏ならば木陰の邊を徐くりした足取りで歩くとき――私は過去の年月を、出來事を。人々の顏を思ひ浮べるばかりである。だがさういふ場合に私の思ひ出を引きとめるのは私の男盛りの頃の事でもなければ青年時代でもない。私は自分のまだ極く幼かつた時分か。それでなければ少年時代の初期に連れ戻される。たとへば、私は嶮嚴つい腹立ちつぽい祖母と一緒に田舍にゐた頃の私自身を見るのである。――その頃私はやつと十二であつた。そして二人の人の姿が私の想像の眼の前に浮び上る。……

だが。私は物語をしつかりと順序立てゝ話してみやう。

一

年の寄つた侍僕のフイリピッチが入つて來る。例の通り。頸飾を薔薇型に結んで、「臭い息が匂はないやうに」唇を一生懸命に閉ぢて。灰色の髮の房が眞中につつ立つてゐる頭を振り〳〵爪先きで歩い

て來た。彼は部屋に入ると頭を下げて、紋章の封印を捺した一通の手紙を鐵製の皿にのせて私の祖母に差し出した。祖母は眼鏡をかけて。それに眼を通した。

『來てゐるのかえ？』と彼女はたづねた。

『何と仰せられましたので……』フイリピッチはおづ〳〵言ひ出した。

『襲だね！　えゝこの手紙を持つて來た人は……今うちへ來てゐるのかえ？』

『來て居られますで。へえ……會計所の方に來て居られますで……』

祖母は手に持つた琥珀の球數を鳴らした。

『私のところへ來る樣に言ひなさい。……お前さんは』彼女は私の方を振り向いて言つた。『ちつとして居なされや。』

で、私は隅の方で私に指示された腰掛の上に硬くなつてゐた。

私はまつたく祖母の爲す儘になつてゐたのであつた！

五分ばかり經つと三十五くらゐの。髯が黑く皮膚も黑い。痘痕面の、頰骨の高い、鉤鼻の、太い、眉のそしてその下から小さな灰色の眼が物悲しげな落着きを見せて覗いてゐる――さうした一人の男が入つて來た。眼の色とその表情とは東洋風な顏だち全體と調和してゐなかつた。服裝は端正で長い上衣

を着てゐた。彼は戸口に立ち停つた。そして——たゞ頭だけ辭儀をした。

『お前さんはバブリンと云ひなさるんだね？』と祖母は尋ねて、それから口の中で佛蘭西語で言ひ足した。『アルメニヤ人の樣な樣子をしてゐるよ。』

『左樣でございます。』とその男は深い落ち着いた聲で答へた。私の祖母の最初の粗野な聲の響きが聞えたとき、彼の眉は微かに顫へた。彼は彼女が同等の人に對する樣に自分に話しかけやうと豫期してゐたのではなかつた？

『あんたは露西亞人かね？ 正教ですね！』

『さうです。』

祖母は眼鏡をとつて、バブリンを頭の頂から、足の爪先までじろ〳〵眺めた。男は眼を落さなかつた。彼はたゞ兩手を後ろで組み合せた許りであつた。特別に私の子供心にとまつたものは彼の髯であつた。それは滑らこさうに剃つてあつた。けれどもさういふ青い頰や顎は私はそれまで一度も見たことがなかつた。

『ヤコフ・ペトロウヰッチが』と私の祖母は始めた。『手紙の中でお前さんのことを眞面目で仕事に精を出す人と言つて大層讃めて寄越したんだがね。しかしさうだとなれば何故お前さんは彼の處を罷めなすつたのかえ？』

『あの方はあの方の地所の管理人として私とは種類の違つた人間がお入用なんです。奥さん。』

『種類の…違つた？　はてね。どういふ譯ですかい？』

祖母はまたもやその珠數を鳴らした『ヤコフ・ペトロウヰッチはお前さんには人と變つた點が二つあると言つて寄越しました。人と變つた點といふのはどういふのですかい？』

バブリンはちよいと肩を搖つた。

『あの方の言はれる意味はよく私には解りません。ですが、多分私が…體刑を許さない所爲だらうかと思ひます。』

祖母は驚いた。『お前さんはヤコフ・ペトロウヰッチがお前さんを毆らうとしたと言ひますかえ？』

バブリンの黒ずんだ顏が髮の根まで赧くなつた。

『奥樣は私の申した事がお解りになりませんでした。私は體刑を用ゐない事を規則と致します…農夫共に對してゞす。』

祖母はなほのこと驚いた。彼女は兩手を不意に持ちあげさへした。

『おやまあ』彼女は到頭かう言つた。そして頭を少し傾げて、いま一度バブリンをぢいつと見戍つた

『さうですかい。それがお前さんの規則なんですかい。宜しい。それは私にはどうでも構ひません。私は會計方の書記が欲しいので管理人は欲しくないのぢやから。筆蹟はお前さんどうですかい。』

『筆蹟は綴字を間違へず巧く書けます。』

『それも私にはどうでも宜いのぢや。たゞ明晰りと。今時流行る尻尾のある帳簿向きの字でなしに書いて貰えさいすればよいのぢや。それでお前さんの今一つの風變りな點と言ひますのは？』

バブリンは不安げに身體を動かして咳をした。

『多分あの方は私が一人でないことを仰しやつたのでせう。』

『お前さんはおかみさんがあるのですかい？』

『いゝえ……ですが……』

私の祖母は眉根を寄せた。

『一人私と一緒に居るものがあるのです。……男です……仲間……それは氣の毒な友人でして、私はその男から決して別れることは出來ないのです……何故と申しますと……お待ち下さい……もう十年になります……』

『親戚の方ですかい？』

『いえ。親戚ではありません——友人です。職務上にはその男が居る爲に決して妨げになることはありません。』バブリンは抗議を豫見したかのやうに急いで言ひ足した。『その男は私と同じ部屋に居つて、私が食せて居ります。何かの役に立つだらうと思はれるのですが……彼は十分に教育があるのです——贔負で申すのでなく。非常に教育はあるのです。實際……それに道德は模範とすべきです。』

祖母は半ば眼を閉ぢて脣を嚙みながら、バブリンの言ふことを終ひまで聞いた。

『その人はお前さんの金錢で暮してゐるんですな？』

『さうです。』

『慈善のために養うて居るのですな？』

『正義の行爲としてゞす——貧しい者を助けるのは貧しい者の義務ですから。』

『さうですかい……さういふ事を聞くのは私は初めてぢや。私は今迄それはどちらかと言へばお金持の義務のやうに思うて居ました。』

『金持にとつては敢てさういう風に申しても宜しいならば、それは娛樂です。然し私共の樣な……』

『宜しい、宜しいもう澤山ぢや』祖母は彼の言葉を遮つた。そしてちよつとの間考へたあとで、彼女は尋ねた。その鼻にかゝつた聲は彼女の不機嫌の證據であつた。『でその人は幾歲ですかい、お前さんの厄

介物は？』

『ほゞ私と同年位です。』

『はてね……私はまたお前さんはその人を育てゝゐるのぢやと思うてゐた。』

『さうでないのです。その男は私の仲間です――なほまた……』

『いやもう澤山。』祖母はまたもや遮つた。『お前さんは博愛家ぢや。ねえ。さうらしい。ヤコブ・ベトロウイッチのいふのは尤もぢや。お前さんの樣な身分の人でさういふことをするのは大分風變りなことぢや。しかしそれはそれとしてそろ〳〵用談にかゝりませう。私からお前さんの爲さなければならん仕事を說明しませう。それから給金の點ぢやが……お前此處で何をしておゐでだえ。』祖母は俄かにその干乾びた黃色い顏を私に向けて、佛蘭西語で言つた。『あちらへ行つて神話の課目でも勉强して來なさい。』

私は跳び上つて、祖母の傍へ行つて手に接吻して、それから出て行つた。――神話を勉强しにでなくて庭園へ遊びに出たのであつた。

祖母の邸の庭園は非常に廣大であつた。そして一方は水の流れてる細長い池で區劃られ、その池には

澤山の鯉や鰻ばかりでなく、山鰐、あの有名な、そして今日ではほとんど何處にも居なくなつた山鰐さへも居た。この池のとつ附にこんもりした柳の茂みがあつて、それからさき段々高くなつて斜面の兩側には、榛や接骨木や忍冬や棘杏などが茂り、その根元をヒースやクローヴアの花が包んでゐた。樣々の灌木の間のそこゝにちよびりした空地があつて、濃綠色の絹のやうな細かい草に蔽はれ、その中から脊低の菌どもが滑稽な、あるひは淡紅色あるひは薄紫あるひは靑褐色其他、さま〳〵な色合の帽子を覗かせており、「眩燿花」の黃金の珠が處々に眩しく輝いてゐた、春にはこゝで鶯が唱ひ、鶫が口笛を吹き、郭公が呼びかけた。夏の日盛りにも此處はいつも冷々してゐた――で、私は好んでこの荒廢した池の畔へ、茂みの中へはいつて行つた。そこには私が秘密に寵愛してゐる、私許りが知つてゐる――と少くとも私は想像してゐた――場所が幾つかあつた。

祖母の部屋から出て來ると、私は是等の場所の一つ、私が「瑞西」と名附けてゐたところへ眞直ぐにやつて來た。けれど私の驚愕はどんなだつたらう、「瑞西」へ着かない前に半ば枯れた小枝や綠の枝葉の纖美な編物細工を透して、私以外の誰かゞ其處を見附けてゐることを發見した時に！　黃色い粗羅紗の長い寬い上衣と丈の高い帽とを着たひよろ長い姿が私が就中もつとも愛してゐるその場所へ立つたゐるのであつた！　私は足音を忍ばせて少し近附いた。そして私の全く知らない顏、柔かな小さ

な赤味を帶びた眼とひどく可笑した鼻とを持つた矢張彎る長い頬を認めた。その鼻といふのは豌豆の莢のやうに長々と延びて、厚い脣の上に實際垂れかゝつてゐるのであつた。その脣は震へながら圓いO字形をなして、鋭い小さな口笛を吹いてゐた。そして胸の上部に互に向ひ合はされた骨つぽい兩手の長い指は、廻旋運動をなして急速に動いてゐた。時々手の動作が停つて、は脣口笛と震へとを止め、頭は何物かに聽き入るかのやうに前方に屈げられた。私はなほも近附いた。なほも熱々と彼の樣子を眺めた。……この私の知らない人は兩手に小さた平たいロップ、ーカナリヤに挑みかけて彼等を唱はせるに使ふコップを持つてゐた。小枝が一つ私の足の下で折れた。と、知らない人ははつとした。ぼんやりした小さな眼を灌木林の方へ向けた、そしてよろよろしながら歩み去つた……けれど彼は一本の樹に衝突つた、叫び聲を出した、そして立ち止つた。

私は茂みの蔭から出て行つた。知らない人は微笑みかけた。

『今日は。』と私は言つた。

『今日は、坊ちやん!』

私は彼から坊ちやんと呼ばれたのが氣に入らなかつた。餘り慣れ慣れし過ぎると思つた。

『あんた此處で何をしてゐるんです?』と私は嚴しく訊ねた。

『まあ、見てゐてごらんなさい。』と彼は依然としてにこ〳〵しながら答へた。『私は小鳥共を呼んで唱はせてゐるのです。』彼は私にその小さなコップを見せた。『鳥どもがそりや素敵に唱ひ返ひしますよ!君は、君のもの愛しい年齡で無論あの羽毛の生えた歌唄ひの調べが嬉しいでせう!　聽いて下さい。何卒。私が囀つてみせます、すると彼等は直ぐ返事をしますよ——そりや實に愉快ですよ!』

彼は彼のコップを擦り合せはじめた、一羽の鳥が近くの山榛皮からそれに答へて囀つた。知らない人は聲を立てずに笑つた。そして私に目配せしてみせた。

この笑ひや目配せばかりでなく、弱々しい、子供の片言のやうな聲、曲つた膝や薄い手、帽子から長い粗羅紗の上衣にいたるまで、この知らない人のあらゆる動作や樣子は悉く人の好い性質を、無邪氣な滑稽な或る物を、暗示してゐた。

『あんた長いこと此處に居たの?』と私は尋ねた。

『私は今日來ました。』

『ではあんたはあの人が言つてた……』

『バブリン君が奥樣にお話した人、さうです。私です。』

『あんたのお友達の名はバブリンといふの?　ぢやあんたの名は?』

『私はブーニン。それが私の名です、ブーニン。あの人はバブリン、私はブーニンです。』彼はまた小さなコップを擦り合せた。『お聽きなさい。お聽きなさい、あれを……何といふ聲でせう』

　この奇妙な人間は一度で怖ろしく私を魅して了つた。殆んど總ての子供と同じく私も知らない人に對してはおづ／＼してゐるか尊大に構へてゐるかどつちかであつた。然るに此の人に對しては私はもう幾年か前からの知合のやうに感じた。

『僕と一緒に行きませう。』と私は彼に言つた。『僕此處よりもつと宜いことを知つてますよ。坐るとこもあります。そこに坐れば向うの堤も見えます。』

『えゝえゝ、行きませうとも。』と私の新しい友達はその歌を唱ふやうな聲で答へた。私は彼を先へ[illegible]かした。彼は歩くとき左右によろ／＼し、自分の足を踏ん附けた。そして、頭はたえずがつくり／＼後ろへ落ちた。

　私は彼の上衣の背の襟の下のところに小さな總を見つけた。『そこにさがつてるのは何なの？』と私は尋ねた。

『何處に？』と彼は尋ねて、襟のところへ手を延して觸つてみた。『あゝ、房ですか？　かうしとけばよいのです。飾りに縫ひ附けたものだらうと思ひます。邪魔にはなりやしない。』

　私は彼を私の席に連れて行つて、腰を下した。彼も私の傍に坐つた。『こりやいゝ處だ！』と彼は讃めた。そして深い深い溜息をついた。『おゝ何ていゝだらう……君は實に素晴らしい庭園を持てゐますねえ……、まあ――まあ！』

　私は横の方から彼を眺めた。『隨分變挺な帽子を[illegible]てるんだね！』と私は叫ばずにはゐられなかつた。『僕に見せて下さい！』

『さあ、さあ、御覽なさいとも、坊ちやん。』[illegible]は帽子を[illegible]た。私は手を差し出してゐた。私は眼を擧げた、そしてわつと笑ひ出した。ブーニンはすつかり禿[illegible]た、滑々した、白い皮膚に蔽はれた高い圓錐形の頭顱に一筋の毛も見られなかつた。

　彼は掌でそれを一と撫でした、そして一緒に笑つた。笑ふとき彼は、いはゞ、がぶ／＼水を呑んでるやうに見えた。彼は口を大きく開いて、[illegible]眼を閉ぢた。そして竪の皺が三筋波のやうに額を横ぎつてそして消えた。『え、え、』彼は言つた。『まるで[illegible]卵のやうでせう？』

『えゝ、えゝ、卵にそつくりですよ！』私は夢中になつて贊成した。『あんた前からそんなになつてるの？』

『えゝ、隨分前から、しかし私はまあ何んな髪を持つてたらう……それはアルゴ船に乗り組んだ人達か

深海を越えて探しに行つた黃金の羊毛のやうでしたよ。』

　私はやつと十二歳だつたが、しかし、神話を勉强してゐるお蔭で、アルゴ船の何であるかを知つて居た。私はそれよりも殆んど襤褸といつてもいゝ樣なものを着てゐるこの人の口からさういふ名前を聞いたので喫驚した。

『あんた、それぢや、神話を敎はつたんだね？』と私は尋ねた、兩手の中で彼の帽子をぐる／＼廻してみながら、それは變なぶつ／＼の出た革で飾りをなし、頂の破れを厚紙で修繕して、綿か何かの詰物をしてあることが判つた。

『私はその神話といふものを研究しました。坊ちやん、私はこれまで何をするにも十分の時間がありました。しかしもうその冠物を返して下さい、それは私の禿頭を保護するものですからね。』

　彼は帽を被つた、そして灰色がかつた眉をさげながら、私に私が誰で、私の兩親は何といふかと尋ねた。

『僕は此處を持つてる人の孫です。』私は答へた。『僕はお祖母さんと二人つきりなんです。父さんも、母さんも、死ん了つたんです。』

　ブーニンは十字を切つた。『天なる王國をして彼等の者たらしめよ……。それでは君は孤兒なんです

ね、そして相續者でもある。君の中の高尙な血は直ぐ解ります。それは君の眼の中に綺麗に光つてゐる、そしてこんな具合に……シユ……シユ……シユ……。』彼はさう言ひながら指で以て血の循環する樣子を現して見せた。『さうですか、で、君は私の友人は君のお祖母さんと契約を纒めたかどうか、彼の約束の位置を贏ち得たかどうか、知つてゐますか？』

『僕は知らない。』

　ブーニンは咳拂ひをして咽喉を潔めた。『あゝ！　暫くの間でも宜い、此の處に落ち着くことが出來ればなあ！　それでなければ遠くへ遠くへと流浪して行つて、枕する場所は見つかるまいつ人生は絕えず警鐘を鳴らして人の心を落ち着かせぬ。靈魂は絕えず惑亂して……』

『ねえ、』私は遮つた。『あんたは僧侶さんなの？』

　ブーニンは私の方を向いて半ば瞼を閉ぢた。『君がさう訊ねる原因は何ですか、穩なしい坊ちやん。』

『でも、あんたはそんなに――あの、僧侶さんが敎會で話す樣な工合に話すんだもの。』

『私がこの聖書の形式で話すからですか？　だがそれは君吃驚しなくても宜いのです。通常の談話ではさういふ話し方は變だとしても、吾々が一度インスピレエーションの翼に乘つて空を翔ける時には、自然言葉も同じ樣に昻揚される。きつと君の先生も――露西亞文學の敎授も――君はそれを習つたら

う、え？——君にその事を敎へた、敎へなかつたですか？』

『いゝえ、僕敎はらないよ。』と私は返事した『田舍に居る間僕は先生が無いの。莫斯科に行けば澤山先生があるよ。』

『それで君は長い間田舍に居るんですか？』

『二た月、それより長くは居ないの。お祖母さんはね、僕は田舍に居ると悪くなるつて言ふの、此處でゞも女の先生が居るんだけれど。』

『佛蘭西人の先生？』

『あゝ。』

プーニンは耳の後ろを掻いた。『マムゼル、さう云ふんですね？』

『あゝ。その人はマドモアゼル・フケリケエつて云ふの。』私は突然十二歲の少年として男の敎師を持たないで女の兒の樣に女の先生を持つてゐることを不名譽に感じた。『だけど僕は女の先生なんか何とも思はないや。』と私は侮蔑的に言ひ足した。『何を氣にかけるもんか……』

プーニンは頭を振つた。『あゝ、あなた方上流の人、上流の人は……あなた方は餘りに外國人を好き過ぎますよ！　あなた方は露西亞的なものから、あらゆる、外國のものゝ方へ顏をむけて了つた。あなた方は外國から來た人々にあなたの心情を與へて了つた……』

『やあ！　あんた詩で話をしてるの？』と私は尋ねた。

『えゝ？　さうです。私はいつでもそれが出來ます、お望み次第にどれ丈なりと。何故と言へばそれが私には自然なので……』

けれど丁度この時私達の後ろの庭園で高い銳い口笛が響いた。私の新しい友人は急いで腰掛から立ち上つた。

『さやうなら、坊ちやん、あれは友人が私を呼んでるんです。私を探してるんです。……あの人は何を私に話すだらう？　さやうなら……御免下さい』

彼は茂みの中へ跳び込んで見えなくなつた。私はまだ暫く腰掛に殘つてゐた。私は當惑とそして今一つ、寧ろ氣特のいゝ感情とを感じた。私は嘗てまだプーニンの樣な人と話をした事も遭つたことも無かつた。段々私は夢み心地に落ちて來た。けれど神話の勉强のことを思ひだして家の方へぶら〳〵歸つて行つた。

家で私は祖母がバブリンを傭ふことにしたことを知つた。彼は召使達の居る方の棟の、厩の庭に臨

んだ小さな部屋を當てがはれた。彼は直ぐと彼の友人と一緒にそこへ落ち着いた。

翌朝、茶を飲んで了ふと、私はフリケェ嬢の許可を請はずに、召使達の棟の方へ出掛けた。私は前の日會つたあの變挺な人と今一度お喋舌りがしたかつた。戸をノックもせずに――私はそんな事は一向考へもしなかつた――私は眞直ぐに部屋の中へ歩み入つた。私はそこに私のたづねてゐるプーニンを見出さずに、彼の保護者たるあの博愛家のバブリンを見出した。彼は襯衣と股引とだけで、兩脚を擴げて、窓の前に立つてゐた。彼は長い手拭で忙しく頭と首とを擦つてゐた。

『何の用ですか？』と彼は兩手を矢張り擧げたまゝ眉を顰めて云つた。

『プーニンは家に居ないのかい？』私は帽子を取ることもせずに、櫻く氣のおけない態度で尋ねた。

『プーニン君、ニカンダア・ヴアヴィリッチはいま家に居ません。』バブリンは徐々と答へた。『然し私は一と言君に言ひたい、お若い方。許しも請はずに、さういふ工合に他人の部屋に入つて來るのは好い事ではありません。』

僕の事を「お若い方」だつて！　何といふ言ひ方をするんだらう！……私はかう思つて憤怒で眞紅になつた。

『君は僕が誰だかを知らないんだ。』と私は『もう氣のおけない態度ではたく高慢な樣子で言ひ返した

『僕はこゝの奥さんの孫だよ。』

『君が誰であつても私にとつては同じ事です。』とバブリンは今一度手拭で仕事にかゝりながら直ぐ言ひ返した。『たとへ夫人のお孫さんであつても、他人の部屋に默つて入る權利はありません。』

『他人のだつて？　そりやどういふ意味なんです？　僕には此處は、何處でも、自分の家なんだ。』

『いゝえ、失禮だが、此處は――私の家です。この部屋は私の仕事と引き換へに、双方同意の上で私に當てがはれたものですから。』

『どうか僕を教へようとしないで下さい。』と私は相手の言葉を遮つた。『僕の方が君よりもよく知つてる……』

『君は教へられねばなりません。』と今度は彼の方が遮つた。『何故と言へば君の年齢では……私は自分の義務は知つて居ます、しかし、また自分の權利もよく知つて居ます、で若し君がさういふ風に私に向つて物を言ふことを止めなければ、私は君にこの部屋から出て行つて貰はなければなりません……』

もしこの時プーニンがよろ〳〵ふら〳〵しながら入つて來なかつたならば、私共の口論はどんな工合に結末がつくか判らない處であつた。彼は私共の顏附きからして何か不快なことが兩人の間に起きたのだといふことを推察したらしかつた、そしてすぐ最も温かい歡びの表情を以て私の方へ向いた。

『やあ！　坊ちやん！　坊ちやん！』彼は兩手を亂暴に振りながら叫んで、直ぐと例の聲を立てない笑ひを始めた。『可愛い若旦那！　私を訪問に來られたんだね！　よう來て下さつた、可愛い坊ちやん！（どうしたんだい？　と私は考へた、どうして僕に向つてあんなに馴々しく話すんだい？）さあ私と一緒に庭へいらつしやい。私はいゝ物を見附けましたよ。‥‥何故こんな暑つ苦しい處に居るんです‥‥行きませうや！』

私はプーニンの後に從つた、けれど戶口の處で私は振り返つてバブリンに向つて侮蔑の一と眼を投げつけて、相手を恐れて居ないことを見せ附けてやつた。

彼も同じやうにそれに答へた。そして手拭に向つて鼻を鳴らすことさへした——恐らく彼が私を全く侮蔑しきつてゐることを十分私に覺らせる爲に。

『君の友達は何といふ無禮なやつだらう！』と私は戶が私の後ろで閉るや、いなや、プーニンに言つた。殆んど恐怖をでも感じた樣子で、プーニンはその膨れた顏を私に振り向けた。

『誰の事をそんな風に言ふんです？』と彼は眼を丸くして訊ねた。

『誰のことつて、あの男のことさ、無論。‥‥何とか云ふ名だつけ？　あの‥‥バブリンさ。』

『パラモン・セミョニッチ？』

『え、さうさ。あの‥‥どす黑い奴！』

『エ‥‥エ‥‥エ‥‥』プーニンはいたはる樣な、非難するやうな調子で抗辯した。『君はどうしてそんな風に言へるんですね『坊ちやん！　パラモン・セミョニッチは、嚴格な主義をもつた最も徹すべき人ですよ、通常の人間ではないんですよ！　あの人はそりや自分に對するどんな無禮も許しはしません——彼は自分の價値を知つてゐますからね。あの人は莫大な智識を持つてゐるのです——かういふ仕事をしてゐる筈の人ではありません。ねえ、君はあの人には非常に丁寧にしなくてはなりません。君は知つてゐますか？』彼は私の耳のところへ口を持つて來た——『あの人は共和主義者なんですよ！』

私はプーニンを見詰めた。これは私にはまるで思ひ掛ないことであつた。カイダノフの袖珍本や他の歷史の書物からして、私は昔ある時期に希臘人や羅馬人などいふ共和民の居た事を習ひ覺えてゐた。何ういふ理由からだか、私はいつも彼等を兜を着て、腕に圓い楯をかけた大きな裸の脚を持つた人の樣に想像してゐた。然るにいま現在此の世で、就中、露西亞で、V縣で、共和民に出遭ふなどゝは！　そ れはあらゆる私の考へを覆し、それを滅茶苦茶に引つ搔き廻して了つた。

『さうなんです、坊ちやん、さうなんですよ。パラモン・セミョニッチは共和民なんですよ。』とプーニンは繰り返した。『ねえ、だから、これから、あゝいふ人のことはどんな風に話さなくちやならない

か解つたでせう！　だがさあこれからお庭園へ行きませう。あすこで私が何を見附けたか當てて御覽なさい！……したきりの巣に郭公の卵を見附けたんですよ。可愛いぢやありませんか！』

私はプーニンと一緒に庭園に行つた。けれど私は心の中で繰り返してゐた『共和主義者！　共……和……主義そ！』

『だから』私は到頭決論を下した『あの人はあんな靑い顔をしてゐるんだ！』

プーニンとバブリンと、この二人の人物に對する私の態度は、その日から一定した形をとつた。バブリンは私の中に敵對の感情を呼び起した。しかし、それには僅かのうちに尊敬に似た或る物が混つて來た。そして私は彼を恐れたかつたらうか？　否、私は私に對する彼の態度に峻厳なところが全く無くなつた時にすら、決して彼を恐れる氣持に打ち勝ち得なかつた。言ふ迄もなく私はプーニンのことは少しも恐れなかつた。私は彼を尊敬もしてゐなかつた。私は彼を、それもあまり良い意味でゞはなく、一個の道化者と見なしてゐた。併し私は彼を私のたましひの全體でもつて愛した。彼と一緒に何時間もゐること、彼と二人きりでゐること、彼の色々の話を聞くことは、私にとつて純粋な歡喜となつた。祖母は私がかうした「下層階級の」——Du commun——の人間と馴染になることは決して喜ばなかつた。けれど私は祖母の傍から自分を捥ぎ放すことが出來るやいなや、直ぐと私の奇妙な、面白

い愛友のところへ飛んで行つた。フリケェ孃が近隣に住んでゐる聯隊の大尉を訪ねての談話の中で私共の家庭に漲つてゐる退屈な空氣について不平を鳴らすの無禮を敢てしたといふ理由から、祖母が彼女を莫斯科へ追ひ返した後では、私共の出會ひは益々頻繁になつた。そしてプーニンの方でも十二歳の子供と長い間話してゐることを厭がらなかつた。彼の方からそれを求めてるやうにさへ見えた。どんなにまあ私は彼のくさぐさの物語に聞き耽つたことか。薫しい樹蔭に、乾いた滑々した草の上に、白銀の白楊の天蓋の下に、彼と一緒に坐つて！　或は池の上の葦の間に、堤の凹地の粗い、濕つた砂の上に——そこから節くれ立つた根が突き出て、變な風に縺れあつて、大きな黑い血脈の様に、蛇どもの様に、地下の國から出て來る妙な生物の様に、見えた——彼と並んで臥そべつて！　プーニンは私に彼の一生の物語を、あらゆる幸福な冒険を、あらゆる不幸を、こと細かに話した。それに對して私はいつも最眞摯な同情を感じた。彼の父親は補祭であつた。——『實に好い人でした。——しかし、酒を飲んだお蔭で、そりやもう極端に厳格でした。』

プーニン自身は教育をある學院で受けた。けれど厳しい鞭の罰に辛抱が出來ず、僧職に嗜好をも感じなかつたので、やがてそこを退學し、その結果あらゆる種類の困苦を經験した。そして最後に放浪者となつた。『で若し私が恩人のパラモン・セミョニッチに遭はなかつたらと』プーニンはいつも言ひ

足すのであつた。（彼は決してバブリンの事をかういふ風にしか話さなかつた。）「私は貧乏と惡德との泥沼の中へ沈んで了つた筈ですよ。」ブーニンは高い調子の高い物言ひが好きであつた、そして噓を吐く爲ではないにしても兎に角物事を浪漫的にまた大袈裟に話す傾向が非常にあつた。彼はあらゆることを賞讚し、あらゆることについて恍惚狀態に陷つた。そして私も、彼の眞似をして、物事を誇張し好んで恍惚とした氣持になるやうになつた。『何て氣違ひぢみた兒におなりだらう……神樣のお惠があるやうに！』と私の年寄りの叔母が始終私に言つた。ブーニンの話はいつも無上に私を面白がらせた。けれどこの彼の物語にもまして私が愛したのは、私共がいつも一緒にした讀書であつた。

その氣持を叙述することは到底不可能である。彼が、都合の好いときを見計らつて、突然昔譚の神話の中の隱者のやうに、腕の下に重い書物を抱へて私の前に現れ、こつそりその曲つた指で手招きして、秘密らしく瞬きしながら、頭や眉や肩やそのほか體ぢうで、そこでは何人も私共が居るとは察しがつかず、誰とて私共を見附けることは不可能であるところの庭園のあの最も深い物蔭の方を指してみせる時に私が味つたその氣持！　私共が首尾よく人に見られずに拔け出したとき、私共の秘密の巣の一つに滿足に達して、並んで腰を下し、そして到頭書物が徐り開かれて、黴と歳月との、私には何とも言へないくらゐ快い强い香を發したとき、どんな無言の期待を以て、私

はブーニンの顏を、ブーニンの唇を、今にもそこからあの優美な雄辯が流れ出すべき唇を――見詰めたことであつたか！　到頭最初の詩の響が聞えた。私の身の周りのあらゆるものが消えた――いや、消えたのではない、遙か遠く隔つて、友愛的な保護して吳れるやうな何物かの印象をあとに遺しながら、霧の雲の中へ入つて了ふのであつた。多くの樹が、綠の幾千の葉が、高い草が、屛風になつて、世界のあらゆるものから私共を匿してゐた。誰も私共が何處に居るのか、何をしてゐるのか知らなかつた。――そして私共と一緒に詩が居たのである、私共はその中に浸り、それに陶醉した。莊嚴な、偉大な、美しい、神秘な何事かゞ私共に起りつゝあつた。

ブーニンはとりわけ詩に、音樂的な、調子のいゝ詩に執着してゐた。彼は生涯を詩歌のために捧げる覺悟であつた。彼のは讀むのでなかつた。彼は詩句を堂々と、リズムの奔流において、續々と轉がり出る鼻聲を以て、一杯氣嫌の人の樣に、朗誦した。アポロの神殿の尼僧の樣に彼は彼自身から脫け出でゝ高く昂揚した。そして今一つの習慣を彼は持つてゐた、といふのは、彼は先づ呟々獨り言を言つてる樣な風に、低聲で、柔く詩の句を呟いてみた……これを彼は朗讀の下書だと言つてゐた。それから同じ句をそれの「淸書」に於いて大聲で讀んだ。そして突然跳び起ち、半ば嘆願する樣な、半ば誇りに充ちた身振でもつて、片手を空に投げ上げるのであつた。……かういふ風にして吾々はロモノソフやス

マロコフやカンテシイル（古ければ古いほど、それはプーニンの趣味に合つた。）のみならずヘラスコフのロシアドまでも讀み通した。そして、實を言へば、私の熱情を最も多く呼び醒したのはこのロシアドであつた。その中には、他のものと共に、一人の强力なる韃靼婦人、女主人公なる巨人が居た。私は今はもう彼女の名さへ忘れたが、あの時分にはその名が言はれた許りで手も足も冷たくなるのであつた。『さうなんだ。』プーニンは大いなる意味を持たせて點頭きながら言ふのであつた。『ヘラスコフ一度彼に捉まると逃げ出すのは容易ぢやない……時々ある一行、胸が裂けるやうな思ひの一行に出會す……それを十分に支配しようと思つてやつてみる、だが彼は捉まつたかと思ふと、こちらの手を捥ぎ放して行つて了つて、遠方から盛んに銅鑼でもつて囃したてゝるんだ、名からしてさういふ風だ……ヘルルラスコフといふ名からして！』ロモノソフのことはそのスタイルをあまりに單純で放埒だと云つてプーニンは非難した。デルッアニエフに對しては、あれは詩人といふよりも寧ろ宮内官だといつて彼は殆んど敵對の態度をとつてゐた。私の家では詩及び一般文學に對して何等の注意も拂はれてゐなかつだ、のみたらず、詩、特に露西亞の詩はまつたく威厳のない粗野なものとして見られてゐた。祖母はそれを詩と呼ぶことさへせずに「惡文」と言つてゐた。さうした惡文の作者はどれもこれも、彼女の意見によれば、不治の淫酒家かそれでなければ完全な白痴であつた。さういふ考への闇

で育てられたので。次の二つの中何れかは避くべからざるものであつた。乃ち私は嫌惡を以てプーニンに背を向けるか（彼はだらしがなくおまけに見窄らしかつた。それは私のお上品な習慣にとつて厭なものであつた。）それとも彼に誘惑され惹きつけられて、彼の例に慣ひ彼の詩歌に對する情熱によつて毒されるか、どちらかでなくてはならなんだ。……）そしてそれは後者の方になつた。私もまた詩歌を讀みはじめた。或は祖母の言ひ方に從へば、惡文の塵埃溜を獵りはじめた。私は手を詩作に染めることさへしてみた、そして筒風琴を唱つた一つの詩を作つた。その中に次の様な二行があつた。

聽けよ、筒はめぐれり
内にして、齒車は唱へり

プーニンはこの勞作のうちに或る模倣的の節調があるとして賞めた。けれど題目そのものは卑しくて叙情的な取扱ひに値ひしないと言つて賛成しなかつた。

あゝ！　あらゆるこれ等の努力や感動や有頂天な氣持や、吾々の寂しい讀書や、共にした生活や、詩や、これ等は皆俄かにお終ひになつて了つた。困つた出來事が突然私どもを霹靂のやうに襲うた。

私の祖母は、まつたくその頃の將軍連の精神に準じて、一切のことに清潔と秩序とを尙んだ。清潔と秩序とは吾々の庭園に於てもまた維持せられねばならなかつた。それ故に彼女は時々そこへ、家族

も土地も自分の家畜もない哀れな農夫や、居ても居なくてもいゝ餘剰の農奴などを追ひ込んで、逕を綺麗にしたり、花壇の雜草を拔いたり、花床の土を取り去つたり、盛りあげたり、さういふことをさせるのであつた。ところで、或る日かうした運動の眞最中に、祖母は庭園に行つた、そして私を一緒に連れて行つた。方々に樹々の間や草地のあちこちに、白や赤や青の襯衣がちら〳〵見えた。四方八方に私共は鋤が土や石と鬪ふ音を、篩の上に土の塊のドサリと落る音を聞いた。勞働者達の傍を通つたとき祖母は、その鷲の眼を以て、彼等の一人が他の者に比べて仕事に精を出さず、帽を脫るにも一向熱心でなかつたことを直ぐと見てとつた。それは疲れ荒んだ顏と落ち凹んだ、光のない眼とをもつた未だ極く若い少年であつた。その木綿の襯衣は裂けて補綴があたつて、狹い兩肩がほとんど露出してゐた。

『あれは何人かえ?』祖母は彼女の後について爪先で步いてゐたフイリピツチに訊ねた。

『どの男のことを……奧樣は……』フイリピツチは吃りながら言ひ掛けた。

『馬鹿! あの私を厭な面して見た男のことを言つてるんだよ。あすこに立つて、愚圖々々してゐるあの男さ……』

『おゝ、彼れ! あれ……あ……あれはエルミルでございます。パウエル・アフアナシイツチの息子で

もう死にました……』

パウエル・アフアナシイツチといふのは十年以前の祖母の家の給仕頭で、非常に彼女の愛顧を受けてゐた。ところが突然耻づ踐きなことをしでかして、俄かに家畜掛りに貶され、そしてその位置すら長い間保つことが出來なかつた。彼は益々卑しく落ぶれて行つて、暫くのあひだ遠方の小さな小屋で每日麥粉の手當を貰つて漂搔いてゐた。その擧句彼は家族を哀れ至極な狀態の中に殘して、中風で死んで了つた。

『あれの息子かい!』祖母は言つた。『尤もな事だよ、林檎は幹から遠くへは落ちないものだ。あの兒も何とかしなけりやならないね。私はあんな顰め面をした人間に用は無いんだからね。』

祖母は家へ歸つた、そして手筈をした。三時間經つとすつかり準備をさせられたエルミルは彼女の部屋の窓の下に連れて來られた。不幸な子供は遠方の開墾地へやられるのであつた。垣根の向う側に彼から數步のところに、彼の貧しい荷物を載せた荷車があつた。時代がさういふ時代であつたのだ。エルミルは帽もなしで、頭を垂れて、洗足で、靴は紐で背中に結びつけて立つてゐた。「お邸」の方に向つた彼の顏には、絕望も悲歎も當惑した樣子すらも、現はれてゐなかつた。痴かしい微笑が色のない唇に氷りついてゐた。眼は乾いて半ば閉ぢられて、執拗く地面を見つめてゐた。祖母は彼の來てゐ

ることが知らされた。彼女は長椅子から立ち上つて、絹の裳裾をさや〳〵鳴らしながら、書齋の窓のところへ行き、金縁の二重眼鏡を鼻の縁に載せながら、新しい追放者を眺めた。彼女の部屋にはこの時四人の人が。給仕頭とメブリンと晝間祖母の用を足す小僧とそして私とが居た。

祖母は頭をあげ下げして頷いた……

『夫人。』嗄れた、ほとんど息詰まつた樣な聲が突然聞えた。私は見廻した。メブリンの顏が紅かつた。暗い顏が紅くなつてゐた。蔽ひかぶさつた眉の下に小さな鋭い光つた點が見えた。……疑ふ餘地はなかつた。「夫人」といふ聲を出したのは彼であつた、メブリンであつた。

祖母も見廻した。そして彼女の眼鏡をエルミルからメブリンへ向けた。

『誰だえ……何か言つたのは？』と彼女は鼻先で綴り言つた。メブリンは少し前へ出た。

『夫人。』と彼は言ひはじめた。『私でございます……私は敢て……私は考へます……私は貴女が間違つたことをして居られることを申し上げたい……貴女が只今なすつて居られることは……』

『といふのは？』眼鏡もその儘で、同じ調子で祖母は言つた。

『失禮ですが敢て申します……』メブリンは言ひ難いのを強ひて言つてゐるのは明かであるが、それでる。一語一語を明瞭に發音しながら、續けた。『私は彼自身の過失からではなくて、今遠方の荒蕪地に送

られようとしてゐるこの子供の事件に就て申して居るのです。かういふ爲さり方は、私は敢て申します、一般の不服を惹き起し、他の……神樣が禁ぜられるところの樣々の結果を誘出致します。さうして地主樣方に許されて居る權力の濫用に外なりません。』

『お前さんは、全體何處で勉強しなすつた？』と私の祖母はちよつとの間默つてゐたあとで訊ねた。そして眼鏡を下した。

メブリンは間誤ついた。『何と仰しやいますか？』と彼は口籠りながら言つた。

『お前さんは一體何處で勉強しなすつたかと訊くのです。大層難しい言葉をお使ひだね。』

『私……私の敎育……』メブリンは言ひ始めた。

祖母はさも侮蔑するらしく肩を搖つた『私のやり方が』彼女は彼を遮つた。『お前さんの氣にいらないらしいね。だがそれは私にとつて全然どうでもよい事です。――私は私の家隷に對して絕對の權利を持つて居る。そして誰に對しても責任はない。たゞ私は私に面と向うて私を批評したり自分の責任以外のことに口を出す人間を持つたことはない。私はお世話燒きの學者の博愛家なぞに用はありません。私の欲しいのは私の考へを唯々諾々として行ふ召使なのだ。私はお前さんが來るまでさうして暮して來ました。お前さんが行つて了つた後もさうして暮さうと思ひます。お前さんは私に適はない。

私はお前さんを辯償しますぞ、ニコライ・アントノフ』祖母は執事の方を向いて言つた。『この人の勘定を拂うて午飯時までに立たせてお了ひなさい……解つたね！ 私に腹を立てさせないでおくれ。それにあの今一人のこの男と一緒に居る馬匪者も、出してお了ひ。エルミカは何を待つてゐるのだえ？』彼女は窓の外を見て言ひ足した。『私はもうあれを見ました。あれはどうして呉れといふ積りだえ？』祖母は執拗い蠅でも追ひ拂ふかのやうに窓の方へ向けて手巾を振つた。それから彼女は低い椅子に腰を下して、私共の方を向き、苦々しげに命令を下した。

『みんなこの部屋から出て行きなさい！』

私共は皆引き退つた——小倅を除く外みんな。小倅には祖母の言葉は當て嵌らなかつた。何故と言へば彼は何人でもなかつたから。

祖母の命令は一句も違へずに實行された。午餐までにバブリンも私の友達のプーニンも追ひ出されて了つた。私は私の悲歎を、私の純粋な、眞實な子供らしい、絶望の樣を述べようとは企てない。それはあの共和主義者バブリンによつて私の中に惹起された畏敬的嘆稱の感情すらそれの爲に窒息させられたほどそんなに强かつた。祖母とのあの會話のあとで、彼は直ぐと彼の部屋に行つて荷造を始めた。彼は私に一と言も一と眼も呉れなかつた。私は兩人が立ち去るまで彼に、或は寧ろ實際はプーニンに、間斷なしに喰つ附いてゐたのに。プーニンは全く茫然として了つてゐた。そして彼もまた何にも言はなかつた。しかし彼は絶間なしに光つた眼で私を見てゐた。そして涙が彼の眼にあつた……いつも同じ涙が、それは落ちもせず干もしなかつた。彼はその恩人を批評することを敢てしなかつた——パラモン・セミョニッチが間違ひをするなんてことはあり得なかつた——けれど彼の悄氣方、弱り方はひどかつた。プーニンと私とはこれを最後にルシアド中の何處かを朗讀しようと努めた。私共は物置部屋に錠を下してそこに閉ぢ籠ることさへ敢てした—— 庭園に行かうなぞと夢想するのは無用であつた——けれど最初の一行きりで私共は聲が出なくなつた、そして私は私の十二といふ年齡にも拘らずいつももう大人だと威張つてゐたにも拘らず、犢のやうに吼え始めた。

馬車の中に席をとつたとき、バブリンは到頭私の方を向いた、そして平生の嚴しい顔附を聊か軟げてから言つた。『お若い方、これは君にとつて一つの教訓ですぞ。この出來事を覺えて居たまへ、そして君が大きくなつたらば、あゝいふ不正な行爲を無くなすように努めたまへ。君の心は善良だ、君の性質はまだ腐敗してゐない……氣を附けて考へたまへ、物事がかういふ風であつてはならんのですぞ。』私の鼻を、私の唇を、私の頰を越してだくだくと流れる涙を通して、私はおろおろ聲で言つた、私は……私はそれを覺えて居るであらうことを、屹度……屹度、バブリンの言ふ通りやつてみるであらうと約束

することを。けれど此の時に、プーニンが——彼を私はそれ迄に二十度も抱擁した（私の頬は彼の剃らない髯との接觸のために燃え、そして私はいつも彼の身體に纏・附いてゐる香ひで香つた。）——この時に突然の狂憤がプーニンを襲つた。彼は馬車の中の席で躍りあがつた、兩手を頭上に投げあげた、そして雷の様な聲で（彼は何處からそれを得たのか！）デルッアーヴィン——彼はこの聚合宮内官ではなくて詩人であつた——の作の有名なダヴィデの詩篇の意譯を誦し始めた。

全能の神立ち出でまして

強き者の集ひに立ち、裁きたまふ

いつまでか、かく大神は宣ふ、いつまでか

爾等惡しき者を赦してあるや？

律法を保てよ——

「坐れ！」バブリンは彼に言つた。プーニンは坐つた、けれど續けた。

罪なくて惱める者を救ふべく

苦しめる者に休息の家を與ふべく

弱き者を虐ぐる者より防ぐべく

プーニンは「虐ぐる者」といふ言葉のところで私共領主の邸を指した、そしてそれから馭者の背中を突いた。

なべての者を桎梏より取り出すべく！

——彼等は知らず知らんともせず——

ニコライ・アントノフが領主の邸から駈け出て、あらん限りの聲で喚いた。

「貴様達行つ了へ！　梟野郎め！　行つ了へ！　此邊で愚圖ついてをると承知せんぞ！」

そして見窄らしい馬車はごろ〳〵と走り去つた、たゞ遠くの方で矢張り聞えた——

立ち出でませ、正義の君、大神よ！

來りて正しからざる者を裁け！

爾のみ民を治めてよ！

「何てえ道化者だ！」とニコライ・アントノフが言つた。

「若い時分に鞭を喰ひ足りなかつたんだらうよ。」と補祭が階段の上に現れながら言つた。

彼は女主人が夜の勤行の時間を何時にお定めになりたいかお伺ひに來たのであつた。

その日、エルミルがまだ村に居ることを、彼は翌朝早くでなければ或る法律上の手續き（これは地主共の勝手な遣方を阻止するために設けられたものだが、反つて、單に監督廳の役人共の臨時收入の源として役立つてる許りであつた。）を受けるために町へ出掛けないことを聞いて、私は彼を探し出し、そして自分の勝手になる金錢はなかつたから、その代りに紐で縛つた紙包みを一つやつた。その中に私は二枚の手巾と見窄らしい上草履一足と櫛と古い搔卷きとそれから眞新しい絹の襟飾とを入れておいた。エルミルは、私は彼が荷馬車の傍に、裏庭の藁を積みあげた上に臥てゐるのを起したのだつたが、私の賜物を、多少躊躇の色を見せながら、寧ろ冷淡に受けとつて、私に禮も云はず唐突にまたも藁の中へ頭を突つ込んでうと〳〵眠つて了つた。私は大層失望して家へ歸つた。私は、彼が私の訪問に驚いてひどく嬉しがつて、そこに未來に對する私の寛大な目論見の保證を認めるであらうと想像してゐた。然るに、それだのに……

『何と云つたつて、』と私は家の方へ戻る途々考へた。『あの人達は感情といふものを持つてゐない。』

祖母は、何かの理由から、あの記念すべき時期の始から終まで私を自由にさしておいて與れたのであつたが、その夜私が夕食の後でおやすみを言ひに行つた時、不審げに私の顏を眺めた。

『お前眼が赤いね。』と彼女は佛蘭西語で將に言つた。『それにお前の軀には百姓小舍の臭ひがするよ。私はお前の氣持やお前の爲てゐたことを穿鑿しようなどとは思はない――お前に罰を當てなくちやならんやうなことになるのは厭だからね――だが、私はお前にもう好い加減にお前の馬鹿げたことを止めて、今一度育ちの好い子供らしくなつて貰ひたいのだよ。しかし、私達はもう直ぐ莫斯科に行くから、さうすればお前に家庭敎師を傭つてあげることにしやう、お前はもう男の先生でなくては手に負へないやうだからね。さあ行つて宜しい。』

事實、私達はその後間もなく莫斯科に歸つて來た。

二

――千八百三十七年――

七年經つた。私達は以前のやうに莫斯科に住んでゐた、しかし私は今では大學に入つて二年目で、祖母も二三年この方滅切り年を取つたので、私はもうその權威の壓迫を感じなかつた。すべての學校仲間のうちで私が最も親密にしてゐたのは、タルホフといふ氣輕な性質の良い青年であつた。私共は習慣も嗜好も同じであつた。タルホフは詩歌の大いなる愛好者で、彼れ自身も詩を書いた。私の中に

はプーニンの播いた種が實を結ばずには居なかつた。極く近しい仲の若い人達の間にあり勝ちな通り私共は互に秘密を持たなかつた。ところが見よ、この五六日といふもの引き續いて、私はタルホフのうちに或る昂奮と焦燥とを認めた。彼は二三日間も引き續いて姿を見せないことがあつた。そして私は彼が何處に行つたのかを知らなかつた。さういふことはそれまで決して無いことであつた。私は、友情の名に於て悉皆の説明を彼に要求しようと思つてゐた。私は豫感したのであつた。

或る日のこと私は彼の部屋に坐つてゐた。すると『ペトヤ』と彼は突然言つて、快活に顔を緩くしながら、私の顔を眞直ぐに眺めた。『僕は君に僕のミューズを紹介しなくちやならん。』

『君のミューズだつて！　何て變なことを君は言ふんだ！　古典主義者みたいだね。(浪曼主義がその當時全盛であつた。)僕はそれをずつと前から知らないでゐたやうに——君のミューズをさ。新しい詩が出來たのかい、それとも何なんだい？』

『君は僕の言つてることがよく解らないんだ。』とタルホフはやはり笑ひながら顔を赧らめながら答へた。『僕は君を生きたミューズに紹介するんだよ。』

『ヘ、ア！　さうなんか！　だけどどうしてその女が……君のミューズなんだい！』

『ウン、そりやね……だが靜かに！　あの女が來るらしいよ。』

急いで來る踵の輕い音がした。扉が開いた、そして戸口に十八歳の少女が現れた。肩に黒い布の肩蔽を附けた更紗木綿の寛衣を着て、淡色の稍縮れ氣味の髮の上に黒の麥稈帽を被つてゐた。私を見て彼女はハッと驚いて狼狽へた、そして歸らうとした……けれどタルホフが直ぐさま駈け出して彼女を迎へた。

『何卒、何卒ミューザ・パウロウナさん、入つて下さい！　これは私の大いなる友人で素敵に良い人間です。それに愼重の化身です。怕がんなさることはありまません。ペトヤ』彼は私の方を向いた。『僕のミューズを紹介します——ミューザ・パウロウナ・ウイノグラドフ、僕の大いなる友達です。』

私は辭儀をした。

『どうして……ミューザだつて？』と私は言ひかけた。タルホフは笑つた。『あゝ、君もさういふ名前がこの世にあることを知らなかつたんだね？　ねえ、僕もこの親愛なる若い御婦人にお目にかゝるまで、それを知らなかつたよ。ミューザ！　何てチアーミングな名前だらう……それにこの方に實によく似合つてるぢやないか？』

私は私の友人の大いなる友達に向つていま一度頭をさげた。彼女は戸口を去つて、二た足前に進んでぢつと立つてゐた。彼女は非常に美いところがあつた、けれど私はタルホフの意見に贊成は出來な

かつた。そして內々自分に向つて言つた。『ねえ、こりや風變りなミューズぢやないか！』

彼女の薔薇色の顏の面立ちは小さくデリケイトに出來てゐた。か細い、小ちやな姿の到る處に生々した、彈むやうな青春が匂つてゐた。けれどミューズは、ミーズの化身としては、私は、いな、私のみならずその時代のあらゆる若い人々は、非常に違つた考へを持つてゐた。先づ、ミューズといふものは暗色の髮をして顏色は蒼白くなくてはならなかつた。侮蔑的な矜りの表情、苦い微笑、インスピレーションに充ちた眼眸、それから神秘な、デモニックな運命的な「或る物」を持つてゐること、これ等が吾々の考へてゐたミーズ、その時分人の空想を支配してゐたバイロンのミューズに、なくてならぬものであつた。いま入つて來た少女の顏の中にはさういふ種類の何ものも見出されなかつた。私が今少し年がいつてゐてもつと經驗を積んで居れば、多分彼女の眼にもつと注意を拂つたことであつたらう。それは小さくて奧まつて、豐かな瞼の肉の蔭に潜んでゐるかの樣であつたが、しかし瑪瑙のやうに暗色で、活潑で、きら〳〵輝いてゐた――明るい色の髮をした人には稀なものであつた。詩的な傾向を私はその迅い、いはゞ閃々として一刻もぢつとしてゐない眼眸のうちに探り出すことは出來なんだ。けれど情熱的なたましひが、情熱に驅られて自分を忘れ易いやうなところが、そこにあつた。――しかし私はその頃非常に若かつた。

私は手をミューザ・パウロウナに差しだした、が、彼女は彼女のを私に與へなかつた、彼女は私の運動を認めなかつた。彼女はタルホフが彼女のために置いた椅子に坐つた。けれど帽子も肩蔽ひも取らなかつた。

彼女は、あきらかに、もじ〳〵してゐた。私の居ることが彼女を當惑させた。彼女は時々不規則な間をおいて、空氣を求めて喘いでゐるかのやうに、深い息を吸ひこんだ。

『わたしたゞちよつと參りましたの、ウラヂミル・ニコラエウイツチ。』と彼女は言ひはじめた。その聲は極く柔かで深く、彼女の深紅な、ほとんど子供の樣な唇からそれを聞くのは寧ろ奇妙に思はれた。――『おかみさんが半時間より長くは出して呉れませんの。あなた一昨日お工合が惡かつたのでせう……それでわたし……』

彼女は口籠つて俯首れた。濃い、低い眉の陰の暗色の眼眸があちこち飛び廻つた。夏の日盛りに乾いた草の葉の間をそんな工合に電光のやうに素早く飛び廻る黒い甲蟲といふやつがある。

『何てあなたは善い人でせう。ミューザ！　ミユソチユカ！』タルホフは叫んだ。『それにしてもあなたは居なくちやいけません、暫くでもゐなくちやいけません……直ぐサモワルを持つて來させます。』

『いゝえ、いゝえ、ウラヂミル、ニコライッエウチ！　駄目ですわ！　わたし直ぐ行かなくては！』

『あなたは少し休まなくてはいけない。どうしてあなたへア〳〵言つてるぢやありませんか……疲れたんでせう。』

『わたし疲れてはおません。さうではないの……たゞ……もう一冊御本を貸して頂けて？ わたしこれを讀んで了ひましたの。』彼女は衣嚢から莫斯科版の灰色の書物を一冊とり出した。

『無論、無論お貸ししますとも。で、あなたそれはお好きでしたか？ ……ロスラウレフなんだよ。』

とタルホフは私は向つて言ひ足した。

『えゝ。たゞわたしユリイ・ミロスラウスキイの方がずつといゝと思ひますわ。私どものおかみさんは大層書物のことは喧ましいのですよ。あの人は書物は私共の仕事の邪魔になるつて言ひますの。あの人の考へでは……。』

『だけど、たしかに、ユリイ・ミロスラウスキイはプーシユキンの「ジプシイ」の比ぢやありませんね？ え？ ミユーザ・パウロウナ？』タルホフは微笑みながら口を入れた。

『いゝえ、ほんとに……あの「ジプシイ」は……』と彼女はゆつくり口の中で言つた。『あゝ、さうでしたつけ、ウラヂミル・ニコライエサツチ。明日はおいでにならないで下さい……いつもの處へです。』

『何故いけないんです？』

『駄目ですの。』

『何故なんです？』

少女は肩を搖つた、そして突然に、突然ひどく衝かれでもしたやうに、椅子から立ち上つた。

『どうしました？ ミユーザさん、ミユソチユカ！』タルホフは苦しげに叫んだ。『ちよつとの間居つて下さい！』

『いゝえ、いゝえ、居ることは出來ません。』彼女は早くも戶口のところに行つて、把手を握つた。……

『ぢや。いゝから。本を持つていらつしやい！』

『また今度。』

タルホフは少女の方へ駈け寄つた。けれどその刹那彼女は部屋から跳び出した。彼は危く鼻面を戶に打ち當てるところであつた。『何といふ娘だらう……まつたく小さな毒蛇みたいだ……』と彼はいささか厭な顏をして言つた、それから考へ込んで了つた。

私はその儘タルホフのところに居た。私はこれ等總ての事柄の意味を發見したいと思つた。タルホフは何でも話して了ふ方だつた。彼は私に彼女が帽子製造場に傭はれてゐること、彼は三週間前に、田舍に居る妹の用で帽子を買ひに行つた時、彼女を初めて見たこと、彼は一と目で彼女に惚れて、そ

して次の日、街で彼女に話しかけることに成功したこと、それから彼女の方でもどうやら彼に思召しがあるらしいこと、これ等のことを話して聞せた。『たゞ、何卒ね、君。』と彼は温かな調子で言ひ足した。『彼女のことをよくない女だなぞと想像して呉れ給ふな。兎に角、僕達の間には何にも後暗いことなぞありやしないんだからね。』

『よくない女だつて？』私は直ぐと言つた。『僕はそんな事を思やしないよ。そして君が眞面目に事實を話して呉れたんだといふことも疑りやしないよ、タルホフ、焦慮らないで居たまへ、萬事よくなつて來るよ。』

『さうなつて呉れりやいゝが。』とタルホフは齒の間で、それでも笑ひながら呟いた。『だけど、ねえ、實際あの娘は……君に話すが、そりや新しい型なんだぜ、君はあれをよく見る暇がなかつたね。あれは恥しがりやなんだ！――ウム！　そりや恥しがりやなんだ！　それにあれの片意地と來たら！　だがあの恥しがりな處を僕は好きなんさ。あれは依頼心のない證據だよ。僕はまつたくのところ首つ丈けなんだぜ、君！』

タルホフは吾を忘れて彼の「たましひを迷はしてる者」のことを話した、そして「吾がミューズ」と題する書きかけの詩をさへ讀んで聞かした。彼の感動的なお饒舌りは私の趣味に十分適ふわけには

いかなかつた。私は秘かに彼に對して嫉妬を感じた。私は間もなく彼の宿を辭した。

二三日經つてから私は偶々ゴスチニ・ヅウオールの巷路の一つを通つてゐた。それは土曜日で、買物に來た人々が群つてゐた。方々に、押すな押すなの雜沓の眞中に、商人どもが顧客に向つて喚き續けてゐた。自分の欲しい物を買つて了つたので、私はもう出來るだけ早く彼等の煩い迫請から免れること以外に何も考へてゐなかつた――と突然私は思はずも立ち止つた。私は一つの果物店に私の友人が惚れてゐる女を、ミューザ・パウロウナを、認めたのであつた。彼女は横顔を私の方へ向けて立つてゐた、そして何事かを待つてゐる樣子であつた。一瞬間躊躇したのち、私は彼女のところへ行つて話しかけてみようと決心した。ところが私が殆んど店の戸口を入つて帽を脫ぐやいなや、彼女は呀と愕いて後ろに蹌けた。そしてその時番頭がその人の爲に干葡萄を量つてゐた粗羅紗の外套を着た老人の方に素早く振向いて、彼の保護の下に逃げ込みでもするかの樣に、彼の胸に縋り付いた。その老人は彼女の方へぐるりと振返つた――そして、私の喫驚を想像して下さい、私は彼をブーニンだと認めたのであつた。

さうだ、それは彼であつた、彼の燃えてゐるやうな眼、彼の厚い脣、彼の柔かな、垂れ下つた鼻が

そこにあつた。彼は、事實、その七年の間に僅かしか變つてゐなかつた。恐らく顏の水膨れのやうなのが、稍や增した位のものであつた。

『ニカンダア・ウアウイリッチ！』と私は叫んだ。『あなた私を知りませんか？』プーニンははつとして、口を開けて私を見詰めた。…

『遺憾ながら私は』と彼は言ひかけた――そして突然彼は細い鋭い聲で叫び出した。『ツロイツキイの坊ちやん！ （私の祖母の領地はツロイツキイと云つた。）ツロイツキイの坊ちやんだらうか？』

一封度の干葡萄が彼の手から轉り落ちた。

『さうなんです。』と私は答へた。そしてプーニンの買物を地面から拾ひあげて、私は彼に接吻した。

彼は歡びと昂奮とのために呼吸が出來なかつた。彼は聲を上げて泣き出さん許りであつた。帽子を脫つた――それで私は彼の「即」に僅か許り殘つてゐた毛がもう、跡方もなくなつてるのを見ることが出來た――それから手巾を取り出して、帽子を干葡萄と一緒に胸へ押し込んだ、またそれを被つた、そしてまたもや干葡萄を落した。…私はその間ミューザがどういふ風にして居たかを知らない。私は彼女を見ようともしなかつた。私はプーニンのこの騷ぎ方は私に對する極端な愛着の所爲だつたと想像することはしない。それは單に彼の性質が極く僅かの豫期しない出來事にも堪へなかつたためで

プーニンとバブーリン

あつた。かふいふ可哀想な變人どもの神經的の昂奮よ？

『私達に會ひに來て下さい、私の若い方！』と彼は到頭ためらひ乍ら言つた。『私達の賤しい巢に行く事なぞ出來ないと言ひはなさらないだらう？ 君は大學生、私は解る……』

『反對です、僕は喜んで行きますよ、本當に。』

『君はもう獨立してゐますか？』

『まつたく獨立してゐます。』

『それは素敵だ！ バラモン・セミョニッチはどんなに悅しがるだらう！ 今日はあの人もいつもより早く家に歸ります、それにおかみさんも土曜日にはあの娘に暇を呉れるのです。しかし、さうだつけごめん下さい、私はすつかり忘れてゐた。勿論、君は私達の姪を知つて居られませんな。』

私は急いで口を挾んで自分がまだその喜びを得ない由を言つた。

『勿論、勿論！ どうして君がこの娘を知つてなさる筈がありませう……ミュソチュカ……お聞きなさい、あなた、この娘の名はミューザといふんですよ――それは綽名ぢやないんです、本名なんです。……何かの因緣ぢやありますか？ ミュソチュカ、私はお前をこの方に……この……』

『ヘ……』と私は助けに出た。

『ペ……』と彼は繰り返した。『ミュソチュカ、お聞きよ！　今お前の前に居られる方は若い男子方の中で一番優れた、一番愉快な方なんだ。運命はこの方のまだ子供の時分に私達を結び合したのだ。お前もこの方をお前のお友達だと思うてお呉れ。』

私は投げるやうに頭を低く下げた。ミューザは　粟のやうに赤くなつて、瞼の下から火のやうな眸をチラリと私に呉れた、そして直ぐまたそれを地面に落した。

『あゝ！』私は考へた。『君は難かしい困つた塲合のときには蒼くならないで、赤くなる方の人だね。これは覺えておかなくちあ！』

『君咎めずにおいて下さい。この娘は優雅な貴婦人ではありません。』とプーニンは言つた。そして店から通りへ出た。ミューザと私とは彼のうしろに從つた。

プーニンが宿をとつてゐる家はサドヴォイ街だから、コスチニイヅウオルからは可成りの距離であつた。途々私の以前の詩の師匠は彼の生活狀態をいろ〳〵と詳しく話して聞かせた。私共が別れた時以來、彼もバブリンも神聖なる露西亞中を殆んど限なく轉々して歩いた、そして漸く一年半ばかり前に、莫斯科に永住の地を見出したのであつた。バブリンは商人で工場も持つてゐる或る富豪　事務所

に首席書記の位置を漸くにして贏ち得た。

『ぼろい位置ではありません。』とプーニンは嘆息して言つた。『仕事が多くて所得は少い……だが何の仕事にしろ、それを得たことは感謝しなくちやなりません！　私も寫し物や出稽古で幾許かとらうとしました。たゞ私の骨折は成功を以て酬いられなかつた。私の筆蹟は君は多分覺えて居るだらうが古風なんでね、今時の趣味には適はない。出稽古の方はね、一番邪魔になつたのはそれに似合うた服裝のないことでした。その上、教育の方で非常に案じられるのは、露西亞文學に就てですね、それも私が今時の趣味と調和しないことです。さういふわけで、私は斷られましたよ。』プーニンは彼の眠さうな、壓し潰した笑ひを笑つた。彼は以前からの多少誇張した話振りを、兎もすれば韻を踏んで物を言ふ弱點を　依然として持つてゐた。『みんな目新しいものゝ後を逐つかけて、嶄新奇拔なものゝほか顧みない！　君もきつと古い神はないがしろにして、新しい偶像の前に額くだらう？』

『であなたには、ニカンダア・ウアウイリッチ、あなたは實際やはりヘラスコフを尊敬しますか？』

プーニンは立ち停つて、兩手を一度に振つた。『この上なく、君、このうへなく……非常に尊敬しますよ。』

『それであなたはプーシュキンは讀みませんか？　プーシュキンは好きませんか？』

プーニンは再び頭よりも高く兩手を投げあげた。

『プーシュキン？ プーシュキンは蛇だ、鶯の咽喉を持つて生れて來ながら草の中に隱れてゐる蛇だ！』

プーニンと私とがかういふ風に話し乍ら所謂「白き石」の莫斯科の――實際はそこには石は一つもなく、また全然白くなぞない――凸凹の煉瓦鋪道を足元に氣を附けて歩いて行つた間、ミューザはプーニンの傍を私達と並んで默つて歩いてゐた。彼女のことを言ふとき私は彼女を「あなたの姪御さん」と呼んだ。プーニンはちよつとの間默つてゐた。頭を掻いた。それから低い聲で、彼女を姪だといつたのは僞にさう言つたばかりで、彼女は實際は親戚でも何でもないのだと言つた。それから言葉を續けて、彼女はヴォロネヅの町でバブリンが拾つて育てゝゐる孤兒であること、しかし彼プーニンは彼女を眞實の娘の様に愛してゐるから娘と呼んでも差し支へないこと、を話した。プーニンは態々聲を落して話したけれども、ミューザには彼の言つたことが悉皆はつきり聞えたに違ひなかつた。彼女は憤つて、恥ぢて、そして當惑した。光と陰とが彼女の顔の上で互に追ひつ追はれつし、瞼も眉も狹い鼻孔も一切のものが細かく慄へてゐた。是等はすべて何だか魅力があつて面白く、そして奇妙であつた。

しかし到頭私達はプーニンのいはゆる「卑しい巣」に着いた。そして實際それは卑しい一つの巣であつた。それは小さな一階しかない家で、傾斜した一つの屋根の下に、殆んど地面の中に沈み込んでゐて、正面に四つの汚れた窓があつた。家具は最も貧しいもので、きちんと片附いてる丈が取柄であつた。窓の間や壁に雲雀や金絲雀やひわなどを入れた十二許りの小さな籠が懸つてゐた。『私の家來です！』とプーニンは勝ち誇つたやうに指で彼等を指して言つた。私が部屋に入つて周圍を見廻す間もなく、プーニンはミューザに吩附けてサモワアルを取りに行かせた、と、ほとんど同時にバブリンが入つて來た、彼はプーニンに比べるとずつと老けたやうに見えた。歩き附きは元通り確りし、顔の表情も變つてゐなかつたけれども、身體は痩せて加之に前屈みになり、頬は落ちこみ、そして黒い濃い髪の束は灰色を混へてゐた。彼は私だと氣附かなかつた、そしてプーニンが私の名を言つた時も何等特別の喜悦を示さなかつた、彼は眼で微笑んでもみせなかつた、たゞ頷いた許りであつた。彼は甚だ無造作にしてそしてそつけなく――私の「ばゞさん」はまだ生きてるかどうか尋ねた許りであつた。それつきりであつた。「私は貴族の御訪問を受けたことを大して喜んでゐません。」と彼は言つてる様に見えた。「私は自惚れやしません。」共和主義者はどこまでも共和主義者であつた。

ミューザが歸つて來た。腰の屈つた小さな婆さんが錆びたサモワアルを持つて、彼女のうしろにつ

いて來た。ブーニンはそれから騷ぎ廻りはじめた。そして私に色んな物を侑めた。バブリンは卓子に向つて坐つて、頰を兩手で支へ、さも疲れたらしい眼で邊りを見廻した。けれど、茶がはじまると彼は話しはじめた。彼は彼の位置に不滿足であつた。『推進器で……人間ちやない。』さう彼は傭主のことを言つた。『下の方に使はれてゐる人間は全然彼の眼中にないのだ、而も彼自身が吾々同樣軛の下に繋がれとつたのは左程以前の事ではないのだ。慘忍、貪慾のほかは何も無いのだ……政府のよりもなほひどい桎梏だ！ そして此處の取引は一切詐僞と飾虛との上に立てられてゐる！』

かういふ悲しむべき談論を聞くと、ブーニンは表情たつぷりに嘆息し、同意を表し、頭を上下に、左右に振つた。ミューザは頑固な沈默を續けた。……彼女は明かに私がどういふ男であるか、控へ目な男であるかお饒舌りであるかそして若しも控へ目にしてゐるならばそれは何か別の考へがあつてのことかどうか、かういふ疑惑の僞にぢりぢりしてゐた。彼女の暗い、迅い、落着かない眼は垂れた瞼の下からあちこちと閃いた。たつた一度彼女は私を視た、けれどそれは訊問するやうな、探るやうなほとんど毒々しい眼で、私は實際はつとした。バブリンはほとんど全く彼女に話しかけなかつた、けれどたまに話しかける時には、彼の聲には峻嚴な、しかも殆んど父親らしいと言つていゝ溫情しさがあつた。

ブーニンは、反對に、絶えずミューザに冗談を言ひかけてゐた。彼は彼女のことを小さな雪女、小さな雪片と呼んだ。

『何故ミューザ・パウロウナにさういふ名を上げたんです？』と私は尋ねた。

ブーニンは笑つた。『彼女はさういふ冷めたい娘だからさ。』

『悧巧なんだ。』とバブリンは口を入れた。『若い娘はあれの方がいゝ。』

『吾々はミユソチユカを夫人と呼ぶ方がいゝだらう。』とブーニンは叫んだ。『ねえ？ パラモン・セミヨニッチ？』バブリンは顏を顰めた。ミューザはむかうを向いて了つた……私はわけが解らなかつた。

さういふ風で二時間過ぎた。それはあまり快活な會合でなかつた――ブーニンが「名譽ある一座を饗應すべく」その最善を盡してくれたけれど。例へば、彼は金絲雀の籠の前に蹲つて、戸を開け、「圓天井にとまつて、演奏を始めなさい！」と命令を下した。金絲雀は直ぐさま小さい羽を羽搏いて「圓天井」卽ちブーニンの禿頭に飛び移り、むかうを向いたりこちらを向いたりして、羽搏きしながら、あらん限りの力で囀つた。演奏が續いたあひだ始終、ブーニンは半眼を閉ぢて、指で調子をとるほか全くぢつとしてゐた。私は大聲あげて笑はないでは居られなかつた。……けれどバブリンもミューザも笑はなかつた。

私が別れを告げつゝあつたとき、バブリンは豫期しない質問で私を驚かした。彼は大學で勉強してゐる人として私に、ゼノオはどういふ人か、彼に就ての私の考へはどうか聽きたいと言つた。

『ゼノオといへば？』私はいくらか間誤ついて尋ねた。

『古の聖者のゼノオです。あれを君知らないことはありますまい。』

私はストイック派の基礎を築いたゼノオの名をぼんやり思ひ出した。しかし私は彼のことは絶對に何も知らなかつた。

『さうです、あの人は哲學者でした。』と私はたうとう言つた。

『ゼノオといふのは、』とバブリンは考へ深い語調で繰り返した。『剛毅は萬事に打ち勝つゆゑに苦痛は災難ではないといふこと、それからこの世に於ける善は只一つ正義あるのみで、德の本體も正義に外ならないといふ事を述べたあの賢人です。』

ブーニンは恭々しく耳を欹てた。

『古い書物を澤山拾ひ上げた此處に居る人が私にその言葉を話しました。』とバブリンは續けた。『それは私に大層氣に入りました。しかし君はさういふ題目には興味が無いやうですね。』

バブリンは正しかつた。さういふ題目に私はたしかに興味は無かつた。大學に入つて以來、私はバ

ブリン自身に負けないくらゐ共和主義者になつてゐた。ミラボオやロベスピエールのことなら、私は熱くなつて話したらう。ロベスピエール、さうだ…それからフーキエー・タンヴイルとシヤリエーとの石版肖像を私は卓子の上に懸けておいた！　しかしゼノオは！　どうしてゼノオのことなぞ持ち出したんだらう？

ブーニンは私にさやうならを言ひながら、翌日また訪ねてくれるやうにと熱心に言張つた。バブリンは全く私を誘はなかつた、そして無職業の平民と話しても私には一向大して愉快ではあり得ぬことそしてそれは私のばゞさんの氣に入らぬに定つてゐることを、齒の間で言ひさへした。それを聞いた時、しかし、私は遮つた、そして祖母はもう私に對して何等の權威も持たないことを彼に解らせようとした。

「しかし、財産はまだ君のものぢやないでせう？」とバブリンは訊ねた。

「私のものではありません。」と私は答へた。

「それぢや結局――」バブリンはすつかり言はなかつたが私は彼に代つて心の中で言つた。

「結局私はまだ子供なんだ。」

「さやうなら。」と私は聲高に言つた。そして部屋を出た。

私は中庭から街へ出ようとしてゐた。と、ミューザが突然駈け出して來た、そして皺くちやになつた紙片を私の手に辷り込ませると、直ぐ行って了つた。最初の街燈のところで私はその紙片を擴げた。それは手紙であることが判つた。『骨折づて私は蒼い鉛筆の文字を判讀した。『何卒何卒』とミューザは書いてあつた。明日午後クタフイア塔の近くのアレキサンドルスキイ公園までおいで下され度お待ち申しあげ候是非ともお目に懸らねばならぬことに候へば哀れと思召し必ずお否み下さるまじく候』何處にも綴字の誤りは無かつたけれどもまた句讀點もなかつた。私は色々考へ惑ひながら家に歸つた。

翌日、指定の時間より十五分以前に、私があのクタフイア塔に近附いたとき（それは四月の初めで蕾膨らみはじめ、草は段々緑をまし、雀共は裸のライラックの茂みで喧ましく囀りまた喧嘩をしてゐた。）私は垣根から遠くない邊の道の片側にミューザの姿を見つけて、少からず驚いた。彼女は私より以前にそこに居たのであつた。私は彼女の方へ近寄つて行つた、けれど彼女は自分の方から私に會ひに來た。

『クレムルの宮壁のところへ行きませう。』と彼女は眼れた眼を地上に走らせながら、急き込んだ聲で囁いた。『こゝは人が居ますから。』

私達は丘を昇つて行つた。

『ミューザ・パウロウナ』と私は言ひはじめた、けれど彼女はすぐ遮つた。

『何卒』と彼女はやはり忙しい、抑へつけた聲で言ひはじめた。『私を批評しないで下さい。私を惡く思はないで下さい。私あなたに手紙を書きました。あなたにお目に懸れるやうに取計らひました。それは……私心配だつたからです……昨日何だかあなたが始終笑つてゐらつしやるやうに見えました。お聽きなさい。』彼女はかう不意に力強く言つて、中途で止めて私を振り返つた。『お聞きなさい、もしあなたが誰と……あなたが誰の部屋で私と遭つたか仰しやつたら、私水に身を投げて了ひますよ、私身投げして死んで了ひますよ！』

こゝで、はじめて、彼女は私が前にも見たことのあるあの訊ねるやうな、射透すやうな眼つきで私を見た。

『おゝ、この女は多分、實際……それをするだらう！』と私は考へた。

『何ですつて、ミューザ・パウロウナさん。』私は急いで抗辯した。『どうしてあなたは私のことをそんなに惡くお思ひになられるのです？あなた私が友人を裏切つたりあなたに害を與へたりすることが出來るとお思ひですか？　その上、考へて御覧なさい、私の知つてゐる限りでは、あなた方の間には何

にも非難に値するところは無いぢやありませんか……後生ですから、落ち着いて下さい。』

ミユーザは、そこにつゝ立つたまゝ、もう私を見ようとはせず、私の言ふことを聞いてゐた。

『まだ他にあなたにお話しなけりやならない事があるんです。』彼女は歩きだしながら言ひ始めた。『でなければあなた私のことを氣違ひだと思ふかも知れません！……あの年寄りが私に結婚しようといふんですよ！』

『どの年寄りです？　禿げた方ですか？　ブーニン？』

『いゝえ、あの人ぢやありません！　も一人の……パラモン・セミヨニツチです。』

『パブリン？』

『さうです。』

『そんなことがありませうか？　あの人があなたに申し込んだのですか？』

『さうです。』

『しかしあなたは承諾しなかつた、無論？』

『いゝえ、私承諾したのです…その時分私何にも譯が解らなかつたんですもの。今は違ひます。』

私は思はず兩手を振つた。『パブリンと——あなたとですつて？　あの人は五十でせう…。』

『あの人は四十三だと言ひます。だけど同じことですわ。あの人が二十五だつても、私あの人と結婚したくありません。私隨分幸福な事でせうよ！　一週間ものあひだ一度だつてあの人、笑ふことなどありあしないでせう。パラモン・セミヨニツチは私の恩人です。私あの人に大變恩になつてるのです。あの人私のことを世話して、教育して呉れました。私あの人が居なければ浮び上ることは出來なかつたんです。私あの人を父親のやうに思はなくてはならないのです。…だけどあの人の細君になるなんて！　私それよりは死んだ方がましですわ！　私棺の中へ入りますわ！』

『どうしてあなたは死ぬこと許り言ふんです？　ミユーザ・パウロウナ？』

ミユーザはまた立ち停つた。

『だつて、それぢや生きてるのはそんなにいゝ事ですか？　あなたのお友達のウラヂミル・ニコラヱウイツチだつて、私生きてるのが慰めで詰らないからあの人を愛する樣になつたんです。それにパラモン・セミヨニツチは結婚を申し込んで來るし、…ブーニンは、あの人はあの詩で私を困らせるけれど、兎に角私を怕がらせはしません。あの人は晩に私の頭が疲れて肩から落ちさうになつてる時カラヂンを讀ませやしません！　そしてあの年寄り連は私にとつて何でせう？　あの人達は私のことを冷たいと言ひます。あの人達と一緒に居て、私が温かくてゐられませうか？　あの人達が私を温かくしようと

したら――私行つて了ひますわ。バラモン・セミョニッチはいつも「自由！ 自由！」つて言つてます。それもいゝわ、だけど、それなら私も自由を貰ひたいものですわ。それでなくてはつまり断らいふ事になりますわ！ 他の人には誰にでも自由をやつて、私は籠の中へ入れておくわけですわ！ 私自身であの人にさう言ひます。だけどもしあなたが先にそれをしたら、でなくても一言でも洩らしたら、――覺えてゐて下さい。あの人達は決してもう私のことを構ひませんから！」

ミューザは路の眞中に立つた。

「あの人達は決してもう私のことを構ひませんから！」と彼女は鋭く繰り返した。今度も彼女は眼を擧げて私を見ることをしなかつた。彼女は、自分は誰かに顔を見られるならばきつと心の中を喋舌つて了ふだらう、と憤つてゐるかの様に見えた。そして彼女が腹を立てるか困るかした場合のほか眼をあげない理由はたしかにこれであつた。そして眼をあげた時は彼女は眞直ぐに相手の顔を見つめるのであつた。……しかし彼女の小さな愛らしい顔は動かし難い決心をもつて輝いてゐた。

「おゝ、タルホフの言つたことは本當だ。」といふ考へが私の頭を閃き過ぎた。「この娘は新しい型だ。」

「あなたは私を怕がる必要はありません。」と私は到頭言つた。

「本當ですか？……たとへもし……あなた、私共の關係に就て何か仰しやいましたね……だけど假令

私共の間に……」と彼女は言ひきらなかつた。

「その場合でも、あなたは怕がんなさる必要はありません、ミューザ・パウロウナ。私はあなた方の審判者ではありません。あなた方の秘密はこゝに埋めておきます。」私は私の胸を指した。「私を信じて下さい、私には解つてゐる積りです、あなた方の……」

「あなた私の手紙を持つてゐらしつて？」とミューザは唐突にたづねた。

「持つて居ます。」

「何處に？」

「衣嚢にあります。」

「下さい……早く、早く！」

私は紙片を取り出した。ミューザは粗い小さな手でそれを引つたくつて、私に禮を言はうとするかのやうに一瞬間私に向ひ合つてちつと立つてゐた。けれど突然ピクリとして、周りを見廻した。そして別れの一言さへ言はずに、表早く丘を駈け下りて行つた。

私は彼女が行つた方角を眺めた。塔から大して遠くないところに、私は「アルマウイウア」にくるまつた一人の人影を見とめた。直ぐタルホフだと判つた。

『あゝ、君。』と私は考へた。『君は見附けたな、始終見張つてると見えて。』

そして獨りで口笛を吹きながら、私は家の方へ歩き出した。

翌朝私が丁度朝の茶を喫んで了つたところへ、プーニンがやつて來た。彼はどうやらきまりの惡さうな顔をして私の部屋へ入つて來て、幾度も幾度も頭を下げた。あたりをうろ〳〵見廻して、彼の言葉で言へば彼の「侵入」について詫言を言ひながら、私は急いで決してそんな事はないと彼を慰めた。ところが彼は私といふ罪深い人間は、プーニンはきつと金を借りる積りで來たのだらうと想像した。ところが彼は仕合せにもサモワルがまだ殘つてゐるやうだからラムを混ぜて茶を一杯飲まして貰ひたいと言つた許りであつた。『私はかうして君に會ひに來るに就いては氣が滅入つて身體が慄へましたよ。』と彼は砂糖の塊を一つ摘みながら言つた。『君のことは私怕くないが君のお祖母さんは恐ろしいからね！　それに私は以前にも君にお話したやうに、この身裝が恥しいんでねえ。』プーニンはその古めかしい上衣のすゝけた縁を指で撫でてみせた。『家では、それから街中でも差支へないが、金ぴかのお宮殿に入つたときには自分の貧乏にちつと顔を見て、間誤つきますよ！』私は階下の小さな部屋を二つ使つてゐた。そしてこれ等を宮殿と、ましてや金ぴかの宮殿などゝ呼ばうとは誰にも考へやうがなかつた。が、プーニンは私の祖母の住居全體をさして言つてるらしかつた、尤もそれとて決して目立つ程豪奢な住居で

はなかつたけれど。彼は前の日彼等を訪ねなかつたといつて私を非難した。『パラモン・セミョ ニッチは、』と彼は言つた。『君はきつと來ないだらうと言つてはゐたが、それでも待つてましたよ。ミュソチュカも君を待つてましたよ。』

『何ですつて？　ミューザ・パウロウナも？』と私は尋ねた。

『あれもです。私共と一緒に居るあの娘はチャーミングでせう！　どうです？』

『非常にチャーミングです。』と私は同意を表した。

プーニンは異常な迅さで彼の禿頭を掻いた。

『彼女は美人だ、君、眞珠だ、ダイヤモンドかもしれん——私の言つてるのは本當ですぞ。』彼は私の耳の上に蔽つかぶさつて來た。『生れも高尙な人だ。』彼は囁いた。『たゞ——ねえ君——左利き（左黨の意）だ。禁斷の果物を食べたんだ。兩親が亡なつて、親戚のものはあれのために何もしてやらんかつたそしてあれを運命の波の中へ、つまり絶望や餓死に向つて投げ出したんだ。だが、その時パラモン・セミョニッチが現れた、昔から變らぬ救ひ主としてさ！　あの人は彼女を引きとつて、着物も着せ、世話もしてやつた。可哀想な雛つ子を育てあげてやつた。で彼女は吾々の手の中で花が咲いたんだ！　ねえ、最も稀な生れ附きを持つとる君だから話すんだよ！』

ブーニンは肱掛椅子の背にどつかり凭れかゝつた、兩手をさしあげた、そして、またもや私の耳へ顔を寄せて、更により多く神秘的に囁きはじめた。『君、バラモン・セミヨニッチもね！　君知らなかつたね？　貴い血脈をひいてゐるんだよ、そして同じく左黨さ。何でもね、父さんはダヴィデ王の後裔で有力なジョルジアの貴族だつたんだとさ、どうです！　口で言へば簡單だが、大したもんぢやないか！　ダヴィデ王の血をひいてゐるんだぜ！　ねえ君、どう思ふ？　またかういふ說もあるんですバラモン・セミヨニッチの家族の源は印度の王族で、ベブールといふ人だつたと。王族の血をひいて居るんですぜ……ねえ、どつちにしてもいゝぢやありませんか？　えゝ？』

『で、あの人も』と私はきいた。『運命の渦の中へ投げ込まれたんですか？』

ブーニンはまたもや彼の頭顱を撫でた。『さうなんです！　吾々の小さい娘さんに比べてより殘酷なやつにです！　極く小さい時分から苦しみが悶くことのほか何もなかつたんです！　そしてね、實際のところ、私いつかルーペンを讀んで鼓舞されて、この事を詩にしてバラモン・セミヨニッチの肖像のために一節作りましたよ。ちよつと待つて下さい……何とか云ひましたつけ？　さうだ！

　假借なき運命の鞭はバブリンを
　揺籃より悲哀の淵へと逐ひぬ！

これは最高の幸福ではないだらうか？　そして彼女はそれを知つてる！　君よく氣を附けて見てみたまへ！　バラモン・セミヨニッチの前ではミュソチュカはまるで平伏してゐます。……身顫ひ許りして熱情的ですよ。』

『それがいけないんです、ニカンダア・ウアウイリッチ。あの娘があなたの言ふ様に身顫ひ許りしてゐるといふことが。もし誰かを愛するならば、その人の前で身顫ひなど感じやしません。』

『しかし私はさう思はん……例へば私だね、誰も私以上にバラモン・セミヨニッチを愛し得るものはない……ところが私は……あの人の前で身顫ひを感じます。』

『あなたが、──そりや、しかしまた違つた話です。』

『何故違つた話なんだ？　何故？　何故？』とブーニンは遮つた。私はよく彼を知らなかつたのだつた。彼は逆上せて、眞摯になつて、殆んど腹を立てた、そしてリズミックな、唱ふ様な調子で話すことをまつたく罷めた。『いゝや、』と彼は言つた。『君は人を識る明を持つとらん……君には人のはらわたを讀むことは出來んのだ！』私は彼に逆ふことは罷めた。そして話題を變へる爲に、吾々は在りし日の爲に何か一緒に積まうではないかと提議した。

ブーニンはちよつとの間默つてゐた。

プーニンは何人も聞いてゐないことを確かめたいかの様に肩越しに振り返つた。それから「吾々の小さい美人のミユソチユカは今に獨身でなくなるんですよ！」

「どうしてです？」

「バブリン夫人になるんです。」とプーニンは辛うじて言つた。そして掌で膝を叩きながら、支那の官人の様に獨りで合點々々をしてみせた。

「まさか！」私は驚愕を裝つて叫んだ。

プーニンは徐ろに合點々々をやめた。そして手を膝から落した。「どうして眞逆！　です？　その譯を聞かして下さい。」

「何故と言つてパラモン・セミヨニッチは寧ろミユーザさんのお父樣になる方が似合つてます。それに餘りに年齢の相違はあらゆる戀愛らしいものを無くします。——娘の方のです。」

「戀愛らしいものを無くする？」プーニンは興奮して繰り返した。「しかし感恩の情はどうなるんです純粹な愛情は？　やさしい感情は？　愛らしいものを無くなすつて？　君はこれを考へて見なければいかん。——ミユーザが非常に優れた娘であるとしてだね、よろしいか、で：パラモン・セミヨニッチの愛情を得る、彼の慰めとなり、支柱となる、つまり彼の配偶者となる。ねえ、あゝいふ娘にとつて

されど暗きに光照ること、いまぞ

勝利のローレルは彼の氣高き額を飾る！

プーニンはこれをリズミックな、唄を歌ふやうな聲で、詩が讀まるべきやうに母音を響かして誦した。

「あの人が共和主義者のなのはさういふわけなんですね！」と私は稍や激して言つた。

「いゝえ、それだからではありません。」とプーニンは單純に答へた。「あの人は父親のことは夙くの昔に赦してゐます。けれどあの人はどんな種類の不正にも堪へられない！　あの人を惱ませるのは他人の不幸です！」

私は談話を前の日にミユーザから聞いたこと、乃ちバブリンの結婚の論見の方へ持つて行かうとした、けれど私はどういふ風にそれをしていゝか解らなかつた。所がプーニンの方から切り出して與れた。

「君は何も氣が附かなかつたですか？」と彼は少しく眼を丸くしながら突然私に尋ねた。

「私どもと一緒に居られた時？　何も特別に？」

「では、何か氣が附いていゝ事があつたんですか？」と私はきゝ返した。

『古い詩人のことですかい？　本當の詩人のですかい？』と彼は到頭尋ねた。

『いゝえ、新しいのを。』

『新しいのを？』とブーニンは疑はしげに繰り返した。

『プーシュキンを。』と私は言つた。私は突然タルホフがつい此間言つてたあの「ヂプシイ」のことを思ひ出した。それから丁度また年寄りの夫のことを書いた譚詩もあつた！　ブーニンはちよつと愚圖々々言つたけれど私は成る丈氣樂にして聞けるやうにとブーニンを長椅子に坐らせた、そしてプーシュキンの詩を讀みはじめた。が、だしぬけにつき飛ばされでもした樣に立ち上つた。到頭「老いたる夫よ、憎き夫よ。」といふ條が來た。ブーニンは最後まで聞いてゐた。

『私はいやだ。』彼は私の頭にさへ響いたほどの深い感情をもつて言つた。――『御免なさい。私はその作家のものをこの上聞くことは出ふません。彼は不道德な誹謗者だ、彼は嘘吐きだ…．私は氣持をだいなしにされて了つた。私はその上續けることは出來ません。今日はこれでお別れさして貰ひます。』

私はもつと居らせようとしてみた、けれど彼は痴かな。脅かされた子供の樣な頑固さで以て歸ると言ひ張つた。彼は氣持をだいなしにされたと幾度も繰り返し、外に出て新鮮な空氣を呼吸したいと言つた。そしてその間ぢう彼の唇はかすかに顫へづめで、眼は絶えず私の眼を避けた、何だか私が彼を

傷つけでもしたやうに。さういふ風で彼は行つて了つた。少し經つてから、私も家を出てタルホフに會ひに行つた。

　例の學生の無造作さで、私は誰にも訊ねてみずに眞直ぐに彼の部屋へ行つた。最初の部屋には誰もゐなかつた。私はタルホフの名を呼んでみた、そして答へがなかつたので引っ返さうとした。が、その時次の部屋の戸が開いて、友人は姿を現した。彼は何だか變な眼附きで私を見て、默つて手を握つた。私はブーニンから聞いたことを殘らず彼に話すために來たのであつた、で、私は惡い時に來たなと直ぐ感じたけれども、矢張り別な事を少し話した後で、到頭ミューザに關するベブリンの考へを彼に告げた。此の新しい知らせはどうやら彼をあまり驚かせなかつた。彼はおだやかに卓に向つて腰を下した、そして眼をぢつと私に注いで、やはり默つたまゝ、ある表情を、『…．それから君は何を話したいのだ？　さあ君の考へを言つて見たまへ！』と言ふかのやうな表情を、してみせた。私は一層注意して彼の顔を眺めた。と、それは熱心に、稍や皮肉に、そして、やゝ傲慢にさへ見えた。併しそれは私の考へを提出することから、私を妨げなかつた。あべこべであつた。『君は故意とさういふ顔をしてゐるんだね』と私は思つた。『遠慮しては遣らないぞ！』で、それから私は眞直ぐに一時の感情に身を委せることの危險さを、他人の自由及びその私的生活を尊敬するのが各人の義務であることを、說きはじ

めた——つまり、有用な適當な忠告を與へはじめた。私は樂にお饒舌りが出來るやうに、部屋のなかを歩き廻つた。タルホフは私を邪魔せずに、その席についたまゝで、たゞ頰杖ついた手の指で頰を叩いてゐた。

『僕は知つてゐる。』と私は言つた。……(私がかういふ事を云つた動機は何であつたか、私は自分で判然わからない。——おそらくは、羨望であつたらう。兎に角道徳に忠であつたからではなかつた。』

『僕は知つてゐる、それは決して冗談事ではないことを、僕は君がミューザを愛し、ミューザも君を愛してゐることを——君の方は決してむら氣でやつてゐるんぢやないことを、知つてゐる。しかし、君、想像してみ給へ……(こゝで私は腕組みをした。)君が君の情熱を滿足させたと想像してみ給へ——後に何が來るか? 君はあの女と結婚はすまい。そして同時に君は一個の優れた、正直な人即ち彼女の恩人の幸福を破壞してゐる、それに……誰か知らんやだ……(こゝで私の顔は洞察と悲しみを同時に現してみせた。)……また彼女自身の幸福をも破壞しないことを……。』

それから曰く何、曰く何……

十五分ばかりの間私の演説は續いた。タルホフはやはり默つてゐた。私はこの沈默に面喰ひはじめた。私は時々彼の顔を見た。それは私の言葉が彼に與へた印象は睹て私自分を滿足させるためよりは

寧ろ彼が何故抗辯も同意もせずにかうして啞の樣に默つてゐるかその理由を見出すためであつた。到頭私は彼の顔にたしかに一つの變化が起つてゐると考へた。それは不安と動揺、苦痛な動揺の徴しを見せはじめた。……しかるに、不思議にも、最初タルホフを見た時に私を驚かしたあの熱心な、靜かな、笑つてゐるやうな或物が、やはりその思ひ擾れた、悩ましげな顔に殘つてゐた! 私は自分の説教の成功を祝つていゝのかわるいのかどつちとも決し兼ねてゐた、と、タルホフは突然起ち上つた。そして私の兩手を握りながら、早口で言つた。『有難う、有難う。君の言ふことは無論正しいのだ。——だが、また一方から見れば、かうも言へるかも知れん……君がそれほど重要視する君のバブリンが果して何だらう? 正直な馬鹿者だ——それ以上のものぢやない。さうなんだ! 正體はそれなんだ! 彼の共和主義といふのは單に彼が何處に行つても巧くゆかないことを意味する許りだ!』

『フーム、それが君の意見かい! 馬鹿者で、決して巧くやつて行けない!——だがね君。』私は不意に熱して來て言ひ續けた。『だがね、親愛なるウラヂミル・ニコライエウィッチ、今の世では何處に行つても巧くやつて行けないといふのは、その人が優れた、高尚な性質を持つてる證據なんだ! 無價値な人間——惡い人間——ならばこそ何處に行つても何をしても巧くお茶を濁して行けるんだ。君はバブリンを正直な馬鹿者だといふが、それぢや何かい、君には不正直な悧巧者の方がいゝのかい?』

『君は僕の言つた事を隨分曲げてる！』タルホフは叫んだ。『僕はたゞあの人に取つての僕の理解を説明しようとした迄だ。君はあの人をそんなに稀な特殊な人だと思ふかい？ ちつともさうぢやない！ 僕は彼の樣な人間には幾人にも遭つた。何だか事々しい容子で、角張つた面をして執拗く默りこんでる者がある……おゝおゝ！ と君達は言ふ、あの人の中には多くの物があるのだ！…所が何にもありやしない、彼の頭にあるのはたゞ一つの考へきりさ、自分の威嚴を損じまいといふ。――それつきりの事さ！』

『その他に何も無くつても、そりや、やはり尊重すべき事だよ。』私は聊か狼狽てゝ口を入れた。『だが君はどうしてそんな風にあの人を研究する事が出來たのだ？ 君はあの人を知つてゐないだらう？ それとも君は…ミューザが君に話したことからさういふ風に言ふのかい？』

タルホフは肩を搖つた。『ミューザと僕とは…他に話すことがあるよ。君に言ふがね。』彼は言ひ足した。驅ちうがヂリ〳〵して慄へてゐた。『君に言ふがね、もしバブリンがさういふ高尙なそして正直な性質ならば、どうして彼はミューザが彼の妻として適當でないことを見ないんだ？ それは二つのうちの何れかだ、彼は自分が彼女に對してしてゐることは感恩の名に於いて爲される一種の凌辱に似た或る物だといふことを知つて居るかも…知つてゐるならば彼の正直はどうしたんだ？ 或は彼はそれを曉らないか…それならば彼は馬鹿者と呼ばれるほかないぢやないか？』

私は答へようとした、けれどタルホフは又もや私の兩手を握り、またもやせき込んだ調子で言ひ出した。『無論…僕は君の正しいことを、僕の千倍も正しいことを白狀するがね。……君は本當の友達だよ…。だが、何卒、今は僕を放棄つておいて吳れたまへ。』

私は間誤ついた。『君を放棄つておけつて！』

『うん、僕は君が今言つたことをよつく考へてみなくちやならん。…僕は君の正しいことは疑はない。…しかし今は僕の勝手にしておいて吳れ給へ。』

『君はひどく昂奮してゐる……』と私は言ひかけた。

『昂奮してるつて？ 僕が？』タルホフは笑つた。けれど直ぐまた眞顏になつた。『さうさ、無論僕は昂奮してゐる。どうして昂奮しないでゐられるもんか？ 冗談事ぢやないつて君自身云つたぢやないか？ さうなんだ、僕は考へてみなくちやならん…一人で。』彼はやはり私の兩手を握りしめてゐた。『さやうなら。君、さやうなら！』

『さやうなら。』私は繰り返した。『さやうなら！』戶口を出ようとして私はタルホフに最後の眸を投げた。彼は喜んでるやうに見えた。何を喜んでゐたのか？ 私が眞實の友人らしく仲間らしく、彼が踏

み込まうとする道の危險なことを指摘した事實をか、それとも私が歸つて了ふことをか？　まるであべこべの樣々な考が夕方まで——夕方私がプーニンとバブリンとが借りてゐる家の閾を跨いだその瞬間まで私の頭の中に漂うてゐた。私は白狀しなくてはならない、タルホフの言つたことのうち或る物が私のたましひの底深く浸み入つてゐた：…そして私の耳の中で鳴つてゐた。……實際、バブリンに解らないといふことがあらうか——彼女が彼の妻として適當でないことの解らない筈があらうか？

だがこれはあり得たかも知れん。バブリンの事だもの、自己犧牲の念に富んだバブリン——正直な馬鹿者のことだもの！

プーニンが私に會ひに來たとき、彼は昨日私は待たれてゐたと言つた。さうだつたかも知れん、しかしこの日は、誰も私を待つてゐないことが明白であつた。私はみんなが家に居ることをも見出した。そしてみんなが私の訪問を驚いた。バブリンとプーニンとは二人とも身體の工合がわるかつた。プーニンは頭痛がするといつて、長椅子の上に圓くなつて、臥て居り、頭を絞りの手巾で縛り、胡瓜の片を顳顬に貼つて居つた。バリンは肝臟を病んでゐた。すつかり黃いろく、殆んど薄墨色になつて黑い輪が眼の周圍にでき、額に皺をよせて頰を剃つてなかつた——一向花婿らしい容子でなかつた！　私は辭し去らうとした。…：けれど彼等は私を歸らせず、茶さへ出して吳れた。私にはあまり愉快な晚

ではなかつた。ミューザは何處もわるくなかつた。そしていつも程內氣でなかつた。けれど彼女は明かに機嫌が惡くむつとしてゐた。…：到頭彼女は辛抱しきれなくなつた、で、私に茶のコップを渡し乍ら忙しなく囁いた。『あなたお好きなことを言つて好ござんす。出來るだけやつて御覽なさい。あなたに何が出來るものですか！』私は吃驚して彼女を見た、そして好い機會を見て、やはり低聲で彼女にたづねた。『あなたの言つたことはどういふ意味ですか？』『解りませんか？』と彼女は答へた。そしてその黑い眼は顰めた眉の下に腹立しげに光りながら一瞬私の顏に注がれ、そして直ぐ傍へ向けられた。『それはね、私今日あなたの言つたことをすつかり聞きました。そして私あなたにお禮は言ひません、そして物事があなたの思ふ通りになりません、と言ふ意味です。』『あなたあすこに居ましたね。』と私は無意識に言つた。…：けれどこの時バブリンの注意を惹いたと見えて、彼は私共の方をじろりと見た。

ミューザは私の傍を退いた。

十分經つと彼女は私の近くにやつて來た。彼女は私に向つて大膽な危險なことを言ふのを、それを彼女の保護者の前で、彼の眼の見張つてゐる下で、やつと彼の疑念をひき起さない程の用心をしながら、言ふのを、悅んでる風だつた。絕壁の緣を、危險なその端を步くのが女の大好きな娛樂だといふことはよく知られてゐる。『さうです、私あすこに居りました。』とミューザは小鼻が微かに震へて脣が

痙攣るほか顔の色もかへずに囁いた。

『さうなんです。でもしパラモン・セミョニッチが私があなたに何のひそ／＼話をしてるんだと訊いたらば、私そのとき言つてやります。構ふもんですか？』

『もつと氣を附けて下さい。』と私は彼女に頼んだ。『實際あの人達は氣を附けてゐますよ。』

『何時なりと私すつかりあの人に言つてやりますよ。で、誰が氣を附けるんですつて？　一人は病んだ家鴨みたいに丸くなつて寢てゐて何も聞こえやしないし、今一人は哲學にはまりこんでゐますわ。怕がることはありやしません！』ミューザの聲は少し高まつた、そして何かかう惡性な暗紅色が段々彼女の頬に上つて來た。そしてこれは彼女に驚くほどよく似合つた。彼女は嘗つてこれほど綺麗に見えたことはなかつた。卓を淨め、コップや皿をとり片附けながら、彼女は部屋の中をせつせと歩き廻つた。彼女のこの輕い、氣儘な歩き振りには何かかう挑戰的なものがあつた。『あなたはお好きな樣に私を批評してよござんす。』と彼女は言つてるやうに見えた。『だけど私は私の思ふ通りやります、ちつともあなたを恐れてやしません。』

この晩私が彼女をひどく蠱惑的に感じたことを私は匿すことは出來ない。『さうだ。』と私は默想した『この娘は少し癇癪持ちだ――新しい型だ。この娘は――素敵だ。あの手は打つことを知つてる、確か

に……それがなんだ？　闘ふものか！』

『パラモン・セミョニッチ。』と彼女は突然叫んだ。『共和國といふのは誰でもが自分の好きな通りに出來る帝國ですか？』

『共和國は帝國ぢやない。』とパブリンは額を擧げて額を顰めながら答へた。『それは一切の人間を律法と正義との上に立たせる……社會の一つの形式です。』

『それでは』とミューザは追つかけて、『共和國では誰も他の人を壓迫することは出來ないのですね？』

『出來ません。』

『誰でも自由に自分のことはして好いんですね？』

『まつたく自由です。』

『さうですか。それ丈解ればいゝんです。』

『何故あなたはそれが解り度かつたのですか。』

『えゝ、私ね――私あなたのお口からそれを伺ひたかつたのです。』

『吾々のお孃さんは學問がなさり度いのだ。』とブーニンは長椅子から言つた。

私が廊下に出ると、ミューザは隨いて來た。無論禮儀からではなくて、同じ意地の惡い考へからで

ある。私は玄關のところで彼女に尋ねた。『あなた實際そんなにあの人を愛することが出來ますか？』

『私があの人を愛しようと、愛しまいと、それは私の事です。』と彼女は答へた。『なるやうになる許りですわ。』

『あなたの僞ようとしてゐることに氣をお附けなさい。火弄りはお罷めなさい。……火傷をしますよ。』

『凍ふるより火傷する方がよござんす。あなたもあなたの忠告で以て……一體あなたはあの人が私と結婚しないとどうして言へるんです？　また私がそんなに特別に結婚したがつてるとどうして知つてるんです？　萬一私の身が滅茶にならうと…それがあなたに何の關係があるんです？』

彼女は私の後ろにピシヤリと扉を閉めた。

私は私が家に歸る途で或る喜びを以て次のことを考へたことを記憶してゐる――友人のウラヂミル・タルホフが彼の「新しい型」の女で多少手を燒くであらうことを、彼は彼の幸福を得るためにはたしかに何物かを仕拂はなくてはならないであらうことを！

しかし彼が幸福であつたらうといふことは、私は、遺憾ながら、疑ふことは出來なかつた。三日經つて、私は自分の部屋の勉强卓子に坐つてゐた、そして勉强よりも寧ろもうその時間であるおやつの方に氣をとられてゐた。と、私は微かな音を聞いて、頭をあげた、そして呆氣にとられた。私の前に、

硬くなつて、白堊の樣に白く、怖ろしい顏をして、幽靈が立つてゐた：プーニンだつた。彼の半ば閉ぢた眼は徐々瞬きながら私を眺めてゐた。

それは無意味な恐怖を、脅かされた兎の恐怖を、現してゐた。そして彼の腕は杖のやうに兩脇に下つてゐた。

『ニカンダア・ウアウイリッチ！　どうしたんです？　あなたどういふ風にしてこゝへ來たんです？　誰もあなたを見ませんでしたか？　何事が起きたんですか？　話して下さい。』

『あれは逃げて了つた。』とプーニンは嗄れた、殆んど聞えないやうな聲で言つた。

『何ですつて？』

『あれは逃げて了つた。』と彼は繰り返した。

『誰が？』

『ミューザです。あれは夜中に行つて了つて、手紙を殘しておいた。』

『置手紙を？』

『さうです。「私はあなたのことを有難いと思つてゐます。」とあれは書いてゐる。「けれど私はもう歸つて來ようと思ひません。私を探さないで下さい。」とね。私共は家中駈け廻つた。料理女を呼んで訊ね

たが、あれも何事も知らん。私は大きな聲で話せません。堪へて下さい。私は聲が出なくつた。』

「ミューザ・パウロウナがあなた方のところから行つて了つたんですつて！」私は叫んだ。

「そんな事があるもんですか？　しかしバブリン君はさぞ失望して居られるでせう。あの人はどうする積りですか？』

『あの人はどうする積りもありません。私總督のところへ馳けつけようとしましたが、あの人はとめました。私は警察へ報告しようとしたが、あの人はそれもとめました。そして非常に腹を立てました。「あれは自由だ。俺はあれを束縛したくない。」つてあの人は言ふんです。あの人は勤めに出掛けてさへ行きました。けれどまるで生きた人のやうではありません。あの人はあれをそりやひどく愛してたんです。……おゝ、おゝ、私共は二人ともあれを愛してたんです！』

こゝでブーニンははじめて彼が決して一個の木偶ではなくて、生きた人間であることを示した。彼は兩の拳を高く振りあげて、それからそれを象牙のやうに光つてゐる頭顱の上に落した。

『恩知らず奴！』と彼は唸つた。「お前に飲み食ひさせたのは誰だ。お前に着物を着せ、お前を育てあげたのは誰だ？　お前の爲に心配し、お前の爲なら全生涯でも、たましひの全部でも惜しくないと思つてた人は誰だ……それにお前はそれをすつかり忘れて了うた！　私を棄てるのは別段大したことではない、だがバラモン・セミヨニッチ、バラモン……』

私は彼に腰を下して、少し休息して呉れるように頼んだ。

ブーニンは頭を振つた。「いゝや、私は坐りません。私が君のとこへ來たのは……私は何の爲に來たのか知らん。私は惱亂した人の樣だ。家に一人で居るのは恐ろしい。私は自分をどうしたらよいのか？私は部屋の眞中に立づて、眼を閉じて呼んでみる、「ミューザ・ミュソチュカ！」人が氣が狂ふのはかういふ工合からなんだね。だが、私は何を詰らんことを喋舌つてゐるんだらう？　さうだ、私が君のところへ來た譯がやつと解つた。ねえ、いつぞや君はあの呪つても足りん詩を私に讀んで聞かせたことがあるだらう……覺えてゐるだらう、年寄りの夫の話の……。何の爲に君はあゝいふ事をしたんです？　君はあの時、何か知つてゐたんですかい？……何か察してゐたんですかい？』ブーニンは私をじろりと見た。『ピオトル・ペトロウイッチ！』彼は突然叫んだ、そして軀ぢうがブル〳〵慄へ始めた。『君は多分何處にあれが居るか知つてるだらう。親切なお友達、あれは誰の處へ行つたのか私に敎へて下さい！』

私は面喰つた、そして眼を落さゞるを得なかつた。……

『多分あの女は手紙の中に何か書いておいたでせう。』と私は言ひはじめた。

『あれはあれが他の誰かを愛してるから行つて了ふといふんです！　ねえ、善いお友達、君は確かにあれが何處に居るか知つてるでせう？　あれを救うてやつて下さい。あれのとこへ行きませう。吾々はあれの跡を追つかけませう。考へてみて下さい、どういふ人をあれは破滅に陷れようとしてゐるか？。』

プーニンは唐突に朱をさしたやうに眞紅になつた。血が彼の頭に突き上るやうに見えた。彼は重たい音をさせて床に膝をついた。『私共を助けて下さい、ねえ、あれの處へ行きませう。』

下僕が戸口に現れて、吃驚してぢつと立つてゐた。

私はプーニンを立ち上らせて、私がたとへ何事かを推察してゐるにした所で一時の衝動に任せてさういふ風に、殊に二人一緒に騒ぎ廻るのはよくないこと――それはたゞ無駄骨折に過ぎないであらうこと――私は出來る丈のことをしてみる積りだが決して責任を以て何とも言へないこと、を納得させるのは容易ではなかつた。プーニンは私に逆らはなかつた。私の言ふことを聞いてもゐなかつた。彼は時々破れた聲で、『あれを救つて下さい。あれとパラモン・セミョニッチを救つて下さい。』と繰り返すばかりであつた。到頭彼は泣き出した。『少くとも一と言私に言つて下さい。』と彼は頼んだ……

『その人は綺麗ですか？　若い人ですか』

「さうです、若い人です。』と私は答へた。

『若い人です。』とプーニンは涙を頰邊に塗りながら繰り返した。『そしてあれも若い……萬事そこから來たわい！』

彼は最後の二句を韻をふんで言つた、が、それは偶然さうなつたので、可哀想なプーニンは決して詩作をするやうな氣分ぢやなかつた。私は彼の朗誦的雄辯を、或はあのほとんど聲を立てない笑ひを今一度聞くことが出來さへすれば大概の物は惜みはしなかつたらう。けれど悲しい哉！　彼の雄辯は永久に消滅してしまつた、そして私はその時きり彼の笑ひを聞かなかつた。

私は何事か發見することが出來たらば直ぐ知らせようと約束した。しかし、タルホフの名前は口に出さなかつた。プーニンは突然ひどく頭が低くなつた。『えゝ、えゝ。あなた、有難う。』彼は哀れな顔附きをして、前には決して使つたことのない「あなた」といふ言葉を使つて、言つた。『たゞ氣を附けて……あなた、パラモン・セミョニッチには何も言はないようにね……でないとあの人は腹を立てますつまり、あの人はそれを禁じて居ます。さやうなら、あなた。』

プーニンが立ち上つて私に背を向けたとき、私は實際自分で愕いたほど彼を可哀想な弱弱しい人間だと思つた。彼は兩脚で跳ぶやうにして、一歩毎に軀を折り屈げながら行つて了つた。

『こりやよくない、あの人もおしまひだ。さういふ意味なんだ。』と私は考へた。

私はブーニンにミューザの行先を探らうと約束することはしたけれど、しかもその後タルホフの住居へ出掛けた時、そこで何事をか聞き出し得やうとは少しも豫期してゐなかつた。彼が家に居さうもないし、居たところで私に會ふことは斷るだらうと思つたからである。ところが私の想像の間違つてゐたことが判つた。タルホフは家に居た。彼は私を迎へ入れた、そして私は私の知りたいだけのことは總て發見した。けれどそれによつて何物も得なかつた。私が彼の住居の閾を跨ぐやいな、タルホフは足ばやに決然たる態度で出て來て、私を迎へた。そして彼の眼は燃え輝き、彼の顔はいつもよりなほ綺麗で、光つてゐた。彼は瞭りと簡潔に言つた。『聞いて呉れたまへ、ペトヤ。僕には君が何の爲に來たのか、何を話さうとしてゐるのか大概判つてる。だが豫め警告しておくが、若し君が一と言でも彼女について、彼女の行動について、或は君の意見に從へば常識によつて僕に指示されてゐる道といふやつについて言つたらば、僕達はもう友人ぢやないよ、知合ひでもないよ、そして僕は僕を赤の他人として取扱つて呉れろと君に頼むよりほかないよ。』

私はタルホフを眺めた、彼は張り詰めた弦のやうに軀ぢうが震へてゐた。彼は全身鳴り響いてゐた。彼は漲りくる青春と情熱との潮を振ひ返すことが出來なんだ。猛烈な恍惚とした幸福が彼のたましひの中へ押し入つて、彼をすつかり捉へて了つてゐた——そして彼もそれを捉へて了つてゐた。

『それが君の最後の決心かい？』と私は憂はしげに言つた。

『さうだ、君、ペトヤ、これが僕の最後の決心だ。』

『そんならば僕もさやうならと言ふほかはない。』

タルホフはかすかにその瞼を落した。……彼はその時あまりにも幸福であつたのだ。

『さやうなら、ペトヤ。』彼はやゝ鼻にかゝつた聲で言つた、腹藏なき微笑と白い齒並の華かな閃きとを見せながら。

私は何を爲すべきであつたか？ 私は彼を彼の「幸福」に委して了つた、私が私の背後に扉を閉めたとき、部屋の向う側の扉も同じくピシヤと閉つた——私はその音を聞いた。

私が翌日私の不幸な知人に會ひに行つたのは重い心を抱いてゞあつた。私は彼等が家に居ないことを秘密に望んでゐた——人間の弱さは斯くの如きものである——そして私はまたもや間違つてゐた。兩人とも家に居た。過ぐる二日の間に彼等のうちに起きた變化は誰をも驚かしたに相違ない。ブーニンは幽靈のやうに蒼く、膨れて見えた。彼の話好きな處は全く消滅してゐた。彼はほんの口先きで、弱々しく、しかし同じ嗄れ聲で話した。そしてうろ〳〵して殆んど失心したやうに見えた。バブリンはあべこべに、彼自身のうちに引つ込んだやうに見え、いつもより尙ほ黑かつた。ほとんど默りこくつて

稀に一つ二つ斷れ〴〵の音を出すきりであつた。石のやうな冷嚴な表情が彼の貌に凍りついてゐるやうに見えた。

私は無言でゐることが出來ない氣がした。けれど言ふべき何があつたか？ 私はブーニンにかう囁くにとゞめた。『私は何事も發見しませんでした。そして私のあなた方への忠告はあらゆる希望をお棄てなさいといふことです。』ブーニンはその腫れ膨れた赤い小さな眼――彼の顏に殘つたたゞ一つの赤いもの――で私をじろりと見て、何やら判らないことを呟いた、そしてよろ〳〵行つて了つた。パブリンは何の事を私がブーニンに話してゐたかを推察したらしかつた、そして膝でくつゝけでもしたやうに緊りひき結んだ脣を開いて、重々しい聲でかう言つた。『君、君がこの前來て與れた時以來、或る快からぬことが私共に起りました。私共の若い友人のミューザ・パウロウナ・ウイノグラドフが此上私共と一緒に暮すのはよくないと考へて、私共から立去らうと決心しました。で、その事を私共に書いて寄越したのです。私共に彼女がさうするのを禁める權利があるとは思はれませんから、私共は彼女がその最も良いと考へるところに從つて行動するまゝに委せておきました。私共は彼女が幸福であるやうにと願ひ且つそれを信じます。』彼は苦しげに言ひ足した。『そして私は君に折入つてお願ひします。どうかこの問題については、何事も言つて下さらぬように。かれこれ申すのは無用ではありまた

苦痛でもありますから。』

『ではこの人もタルホフ同樣僕のミューザに就いて話す事を禁ずるのか！』と私は思つた、そして私は內心訝らずには居られなかつた。彼は實際ゼノオに高い價値をおいて居たのかも知れん。私は彼にこの聖人に關する二三の事實を傳へたいと思つた。が私の舌は動かなかつた、そしてその方が好かつた。

私は間もなく他の用を足しにパブリンの家を出た。別れる時ブーニンもパブリンも「それでは又‥‥」とは言はなかつた。二人とも聲を揃へて「さやうなら‥‥」と言つた。

ブーニンはその前私が貸しておいた「電報」のうちの一卷を返すことすらした。それは彼が「もうさういふ風なものに用はない」ことを十分に意味してゐた。

一週間經つて私は妙な邂逅をした。早い春が唐突にやつて來た。眞晝に暑さが列氏の十八度に昇つた。一切のものが綠に變じ、ぼや〳〵した若芽が、濕つた大地からすく〳〵と出て來た。私は馬術敎練所で馬を一匹借りて。ウオロウイヨフ丘の方角へ、遠乘を試みた。路で私は耳の邊まで泥を跳ねあげた、尻尾を編み、紅いリボンを鬣や額毛に結んだ一對の勢ひ立つた若駒に牽かせた小馬車に出遭つた。裝具には遊獵者がするやうに鋼の圓板や飾網をつけてあつた。馬を馭してゐるのは敏捷さうた若

者で、袖無しの青の寛衣、黄色い縞の絹襯衣、周圍に孔雀の羽をさした低い氈帽といふ扮裝であつた彼の傍に花模様のある絹の短衣を着て、大きな青い手巾を頭に卷いた、細工物師か商人の階級らしく思はれる一人の娘が坐つてゐた――そして彼女は溢れる歡びではしやいでゐた。馭者も同じく笑つてゐた。私は傍へよけた、けれどとの矢の樣に走り過ぎる快活な一對の若人に特に氣を附けはしなかつた、と、突然かの若い馭者が彼の馬共に向つて喚いた。……おゝ、それはタルホフの聲であつた！　私は振り向いた。……さうだ、それは彼であつた。疑ひもなく彼が百姓風に裝うてゐるのであつた、そして彼の傍にゐたのは、それはミューザではなかつたか？

けれどその刹那彼等の若駒は足並を速めた。そして彼等はまたゝくうちに見えなくなつた。私は彼等に追ひ附かうとして私の馬を急がせた。けれどそれは練習所の老牝馬で、一歩ごとによろ〳〵した。それは精々他の馬の速足くらゐも出なかつた。

『まあ勝手に愉快を盡したまへ、僕の親愛なる友人達！』と私は齒の間で呟いた。

私はその後、まる一週間といふもの、私が三度タルホフの部屋を訪ねたに拘らず、彼に會へなかつたことを言つておかねばならない。彼は決して家に居なかつた。バブリンとプーニンには私はどちらにも會はなかつた。……私は彼等を訪ねなかつた。

その日は極く温かではあつたが、風がひどかつた。私は風邪をひいて歸つた。私はほとんど危篤に陷つた、そして恢復すると醫者の勸めによつて田舍へ靜養に祖母と出た。私は再び莫斯科へは歸らなかつた。秋になつて私は彼得堡の大學へ移されたのであつた。

三

――千八百四十九年――

七年ではなく、今度はたつぷり十二年過ぎた、そして私は三十一歲であつた。祖母はとうの昔に亡なつてゐた。私は內務省に勤務して、彼得堡に住んでゐた。タルホフを私は見失つてゐた。彼は軍隊に入つてほとんど田舍にばかり住んでゐた。私達は二度遭つて舊友として互に再會を喜んだ。けれど話しをしても私達は過去の事には觸れなかつた。最後に會つた時には、彼はたしかもう妻君を持つてゐた。

或る蒸暑い夏の日私は私を彼得堡にひきとめておくお役所の勤務を、市の暑熱や惡臭や塵埃を、呪ひながら、ゴルホフ街をぶら〳〵歩いてゐた。一つのお葬ひが私の行手を遮つた。それは一つの寂しい馬車、いや正確に言へばもう壞れかゝつた柩車で。その上にぼろ〳〵の黑い布を半ば着せられた見

窄らしい木の柩が載せられて、凸凹の鋪道の上を激しく揺られながら躍つてゐた。白頭の老人が一人柩車について歩いてゐた。

私は彼を眺めた。……その顔は見覺えがあるやうに思はれた。彼も私に眼を向けた。……おゝ、慈悲深い神よ！　それはパブリンであつた。

私は帽をとつて、彼のところへ行き、自分の名を言つた、そして彼の傍を歩いた。

『どなたのお葬式ですか？』と私は尋ねた。

『ニカンダア・ウアウイリッチ・ブーニンのです。』と彼は答へた。

彼がこの名を言ふだらうと、私は豫め感じてゐた、知つてゐた、けれどそれでも私の心は疼いた。私は悒鬱を感じた。けれどまた偶然にも舊友に對して最後の尊敬を拂ふ機會を得たことを喜んだ。……

『私御一緒に行つてかまひませんか、パラモン・セミヨニッチ？』

『おいで下さい。弔ひの者は私一人です。貴方が行つて下されば二人になる譯です。』

私共の歩みは一時間以上續いた。私の伴侶は眼もあげず脣も開かずに、ずん〱歩いた。この前私が會つた時以來彼はめつきり老けて了つてゐた。深い皺の寄つた、銅色の顔は白髪に對して鋭くきは立つて見えた。勞働と苦惱との絶えざる苦鬪の生活の徴しはパブリンの軀全體に見られた。缺乏と貧苦とは彼の身のまはりに慘酷な破壞をはたらいてゐた。一切が終つたとき、嘗てブーニンなりしものが濕つたスモシニスキイの墓地の、疑ひもなく濕つた土の中に永久に、見えなくなつたとき、パブリンは新しく盛られた土饅頭の前に頭を垂れて二三分立つてゐた後、その窶れた、いはゞ苦くされた顔を乾干びた落ち窪んだ眼を、私に向けて、簡單に禮を述べた、そして立ち去らうとしたが、私は彼を引きとめた。

『何處にあなたはお住ひですか、パラモン・セミヨニッチ？　私はお訪ねしたく思ひます。私あなたが彼得堡にゐなさらうとは思ひがけませんでした。御一緒に昔しを憶ひだして、失つた友達のことをお話したく思ひます。』

パブリンは直ぐには答へなかつた。

『私が彼得堡に來ましたのは二年前です。』と彼は到頭言つた。『私は至極の場末に住んどります。しかし、あなたが本當に訪ねて下さる思召しなら、來て下さい。』彼はその住所を敎へた。『夜分においで下さい。夜分には私共……二人ともいつも在宅ですから。』

『お二人とも？』

『私は結婚しました。妻は今は身體の工合がよくありません。今日來なかつたのはその爲です。實際

この空虛な形式、この儀式に列するのは一人だけで十分ですがね。……誰でもこれの價値を信じてをるらしい顔はしてをりますが！』

私はバブリンのこの最後の言葉に聊か驚いた。けれど私は何も言はず、馬車を呼んで、バブリンを家まで送らせようとした。が、彼はそれを辭した。

同じ日の晩方私は彼に會ひに行つた。途中私はブーニンのことばかり考へ續けた。私は想ひ返した最初自分が彼に遭つたときのことを、その時分どんなに彼が直ぐ有頂天になつて面白がつたかを、莫斯科時分には――特に私が最後に會つた時には――どんなに彼が意久地が無くなつてゐたかを。そして今や彼は人生に對する最後の勘定を仕拂つたのであつた。――思へば、人生といふものは厳粛な、不機嫌なものである！　バブリンはウイボルグスキイ區に、あの莫斯科の巣を想ひ出させる小さな家に住んでゐた。それはほとんど莫斯科のよりも一層見窄らしかつた。私が彼の部屋に入つたとき、彼は兩手を膝に置いて隅つこの椅子に腰かけてゐた。殆ど燃えつきた一本の獸脂の蠟燭が彼の毿れた白い頭をぼんやり照してゐた。彼は私の足音を聞いてハツとして立ち上つた。そして私が豫期したよりも溫かく私を迎へた。二三分經つと彼の妻君が入つて來た。私は彼女を直ぐミューザだと認めた――そしてその時はじめてバブリンが私に來るやうに誘つた理由を了解した。彼は自分が到頭その求むるも

のを手に入れたことを私に見せたかつたのである。

ミューザは非常に――顔も聲も態度に於ても――變つてゐた。が、彼女の眼は就中最も變つたものであつた。むかしそれは生き物の樣に跳び廻つたものであつた。あの意地悪げな美しい眼はこそ〳〵と、しかし華かに輝いたものだつた。その眼眸は針の尖のにやう人を刺した。……今やそれは相手を眞直ぐに靜かに確りと眺めた。黒い瞳は朗かな輝きを失つてゐた。『私は馴らされました、私は善良になりました。』と彼女の柔かな懶げな眼眸は言つてるやうだつた。彼女の絶えざる謙遜な微笑も同じ物語を話してゐた。そして彼女の着物もまた彼女の屈伏を現してゐた。それは小さな斑點のある鳶色のものだつた。彼女は私のところへやつて來て、私に彼女が解るかと尋ねた。彼女は明かに少しも面目ながつてゐなかつた。そしてそれは彼女が羞恥感あるひは過去の記憶をなくした所爲ではなくて、ただあらゆるけちな自意識が彼女に無くなつたからであつた。

ミューザはブーニンについて澤山のことを、靜かな聲で話した。その聲もまた光を失つてゐた。私は後年彼がひどく弱々しくなつて、持つて遊ぶ玩具がないと寂しがるくらゐ、まるで子供の樣になつたことを知つた。彼等は彼に不用になつたもので玩具を造つて賫ればよからうと勸めた……けれど彼はそれをもつて自分で遊んだ。彼の詩歌に對する熱情は、しかしながら、決して消え失せなかつた。そし

て他の一切のものに對して失はれた彼の記憶も詩歌に對してだけは遺つてゐた。亡くなる二三日前彼はロシアドの一と條を諳誦した。けれどプーシュキンは彼は怕がつた。子供がお化けを怕がるやうに。

彼のバブリンに對する傾倒もまた減じなかつた。彼は彼を以前と少しも變らず崇拜した。そして臨終の惡寒と暗黑とに包まれた最後の瞬間にすら、彼は硬ばつた舌で、「恩人よ！」と口籠つた。私はまたミューザから聞いた——あの莫斯科の挿話の後まもなくバブリンは再び露西亞ぢうを、一人の讒はれ者として此處から彼處へと轉々しつゝさまよふ運命を持つたことを、そして彼得堡でも彼は或る商會に傭はれたのであつたが、それも然し傭ひ主との或る不和のために（バブリンは敢て職人達の味方として起つたのであつた。）二三日前に去ることを餘儀なくされたのであつた。ミューザがその話しに伴うて絕えず見せたいつも同じ微笑は、私をうら悲しい思ひに沈ませた。それは彼女の夫の樣子が私に與へた印象に止めをさすものであつた。彼等は兩人ともかつ〴〵口を糊するためにひどい働きをしてゐる——それには疑ふ餘地が無かつた。彼は私共の談話に加はらなかつた。彼は悲しんでゐるよりも寧ろ何事か氣にかゝることがあるらしかつた……何事かゞ彼を惱ましてゐた。

「バラモン・セミョニッチ、ちよつと」料理人が不意に戶口に現れてから言つた。

「何だい？ 何の用だ？。」と彼は愕いて尋ねた。

『ちよつと來て下さい。』と料理人に執拗く意味ありげに繰り返した。バブリンは上衣の釦をかけて出て行つた。

私がミューザと二人きりで殘されたとき、彼女はいくらか變つた眸つきで私を見た、そしてこれもやはり變つた聲で、しかし微笑は見せないで言つた。『ピオトル・ペトロウイッチ、私あなたが今私のことをどう思つてゐらつしやるか存じません。けれど私が以前どんた風だつたかきつと覺えて居られるでせう……私自信家で氣輕で……そして善い人間ではありませんでした。私自分の樂しみのために生きたかつたのです。だけど私今これ丈のことを聞いて頂きたいと思ひます。——私棄てられて、氣拔けしたようになつて、神樣が私を引き取つて下さるのを、或は自分から此の世におさらばをする勇氣を下さるのを待つて居りましたとき、今一度私、あのウオロネヅでの樣に、バラモン・セミョニッチに遭ひました。あの人は私の氣持を傷けるやうなことや非難の言葉は一言も申しませんでした。あの人は私に何も尋ねませんでした——私はそれに値しませんでした。けれどあの人は私を愛して吳れました……そして私はあの人の妻になりました。私はどうすればよかつたでせう？ 私は死ぬことも出來ず自分の思ひ通りに生きることも出來ませんでした。私は自分自身をどうしたらよかつたでせう？ ですけど、現に角感謝されるのは身に餘つて有難いことでしたわ。聞いて頂きたいのはそれだけです。』

彼女は言ひ止めた、ちよつとの間彼方を向いた。同じ謙遜な微笑が彼女が脣に復つて來た。『この世が私にとつて樂なものかどうか、お尋ねになるには及びますまい。』といふのが私はその時の微笑のうちに認めたと思つた意味であつた。

談話は普通の題目に移つて行つた。ミユーザはブーニンのひどく可愛がつてゐた猫が一匹ゐたこと、そしてそれが天井裏に行つて降りて來ず、誰かを呼んででもゐるやうに絕えず鳴いてばかりゐたこと、隣りの人達が大層氣味わるがつてブーニンの靈魂がきつとそれに乘り移つたのだらうと言つてること などを話した。

『パラモン・セミヨニッチは何か氣に掛ることがあると見えますね。』と私は到頭言つた。

『おゝ、あなたお氣附きになりまして？』——ミユーザは溜息した。『良人は氣にかけないではおられないんです。パラモン・セミヨニッチがやはりあの主義を守つてゐることはお話しするまでもありませんでせう。……現在の事態はあり有望の方ではないのです。』（ミユーザは莫斯科この時分とは、まるで違つた風の物言ひをした。彼女の文句には書物の臭ひがした。）あなたにお話しゝていゝかどうか存じませんけれど。——あなたがどんな風に……。』

『何故あなは私に話していけないかしらと想像されるのです？』

『それでもあなたは政府に勤めて居らしつやる——あなたはお役人ですもの。』

『で、それがどうしたんです？』

『それですからあなたは政府に忠實で居らつしやる……』

私はミユーザの無邪氣さに內々驚いた。『私といふものゝ存在してゐることすら知らない政府に對する私の態度について此處で冗々しくお話しする事はしませんが』と私は言つた。

『あなた御安心なすつてよろしい。私あなたの信用を惡用はしませんよ。私は……あなたが想像される以上に、あなたの御良人のお考へに同情してゐるのです。』

ミユーザは頭を振つた。

『えゝ、それはさうでせう。』彼女は躊躇ひがちに言ひ始めた。『ですけど、あなた、それは斯ういふ工合なんですよ。パラモン・セミヨニッチの考へは遠からず實行となつて現れるかも知れないのです。それはもう「桝の下」に隱しておくことが出來なくなつたのです。見棄ることの出來ない仲間のものが……。

ミユーザは舌を嚙みでもしたように、突然話しをやめた。彼女の最後の言葉は私を愕かし聊か狼狽てさした。多分私の感じてゐることをあらはし。そしてミユーザはそれに氣附いたのだつた。

前にも言つた様に、私共のこの會見は一八四九年のことだつた。それがどの様に騒がしい困難な年であつたか、彼得堡にはどんな事件が起きたか未だに記憶してゐる人は少なくなからう。ミューザの話しに憫く以前に、私はバブリンのすることやまた全體の様子に或る特異な點を見て驚いたのであつた。二度も彼は政府の爲すことに、要路の大官連のことに、劇しい嫌忌憎惡を以て、辛辣な言葉で言ひ及ぼして、私をして驚いて口を噤ませたのであつた。……

『それで？』彼は突然私に訊ねたのであつた。『あなたはあなたの農奴達を解放されましたか？』

私は餘儀なくまだそれをしないことを自白した。

『御祖母さんはもう居られんのでせう？』

私はそれも事實を以て答へなくてはなくてはならなかつた。

『たしかに、あなた方貴族の方は、』とバブリンは齒の間で呟いた。『……他人の手を使用して……あなた方の火を掻き立てるあなた方はそれを好まれるんだ。』

彼の部屋の最も目立つところに、ベリンスキイの有名な石版の肖像畫が掛つてゐた。卓の上にはベスチユゼフの編纂にかゝる「北極星」が一冊あつた。

長い時間が過ぎた、そしてバブリンは料理人に呼ばれて行つたきり歸つて來なかつた。ミューザは

彼が出て行つた戸口の方を幾度か不安げに見返つた。到頭彼女はもう辛抱しきれなくなつた。彼女は立ち上つた、そして斷りを言つてやはり同じ戸口から出て行つた。十五分經つて彼女は夫と一緒に歸つて來た。二人とも、私の考へたところでは、思ひ惱んだ顔付きをしてゐた。しかし突然まつたく思ひ掛けなくバブリンの顔は前とは違つた、ひどく苦々しい殆んど狂暴な表情になつた。

『結局どういふことになるか？』と彼は突然全く彼らしくない、とぎれ〳〵の歔欷するやうな聲ではじめた。そして荒々しい眼は落着きなくそこいらをさまよつた。『人々は物事がもつとよくならう。いまにもつと自由に呼吸が出來ることにならうといふ希望を持つて、苦しい生活を續けてゆくのだ。しかし事實はまつたく妙な工合に進んで行く――萬事ます〳〵惡くなるのだ！　彼等は吾々を[illegible]側におしつけてしまつた若い時分には俺は忍耐を以て一切を忍んだ。彼等は……俺を……毆打しようとさへ……した。さうだ！』彼は踵で急にぐるつと廻つて、私の上におつかぶさるやうにつて言ひ足した。『俺はこの年配になつて、體刑を受けた……さうなんです。他のことは何とも言やせん……だが吾々にとつて昔の時代に返へることのほか本當に何も無いのか？　彼等が此頃若い者を扱ふやり方といふものはさうだ、もう辛抱がならん。辛抱がならん！　さうなのだ……待つとれ！』

私はバブリンのかういふ有樣は嘗て見たことがなかつた。ミューザは白くなつた。バブリンは突然

咳拂ひをした、そして椅子に沈みこんだ、自分が居ては彼もミューザも窮屈だらうと思つて私は歸らうと決心した。丁度私が二人に挨拶をしてゐたとき、次の部屋へ行く扉が突然開いて人の顔が出た。それは料理人の顔ではなくて、一人の若者の髪振り亂した、何かひどく恐れてゐる樣な顔であつた。『凶いことが出來た、パブリン、凶いことが――』彼は急いで口籠るやうに言つた。それから私の見慣れない顔を見るとすぐ消えて了つた。

パブリンは若者のあとに駈け出した。私はミューザの手を温かく握り、そして心中凶い豫感を感じながら引き退つた。

『明日いらしやつて下さい。』と彼女は心配げに答へた。

『乾度參ります。』と私は答へた。

私が翌朝まだ寢床にゐたとき、下僕がミューザからの手紙を持つて來た。

『親愛なるピオトル・ペトロウイッチ――』と私女は書いてあつた。『パラモン・セミョニッチは今夜警察の手で逮捕され、監獄へ送られました。多分監獄だらうと思ひます。私確かめることが出來ませんでした。彼等は私共の書類をひきちらし、そのなかの澤山のものに封印をして持つて行きました。書

物や手紙も同樣の目に遭ひました。他にも逮捕された人が少なからずあるさうです。私どんな氣がしてゐるかお察し下さるでせう。ニカンダア・ウアウイリッチが生きてゐてこれを見なかつたのは仕合せでした。あの人は丁度いゝ時に亡つてくれました。私どうしていゝかお敎へ下さい、私自分のことは心配ではありません――私餓死することはありますまい――けれどパラモン・セミョニッチのことを考へるとぢつとして居れません――もし私共の樣な立場に居るものを訴ねることをお恐れになりませんでしたら、何卒おいで下さいまし。

あなたの忠實なる

ミューザ・パブリン』

一時間半の後私はミューザのところに居た。私を見ると彼女は手を差し出した。そして一言も言はなかつたけれど、彼女の顔ぢうに感謝の氣持が漂つた、彼女は前の日と同じものを着てゐた。終夜床につかなかつた、もしくは床についても眠らなかつた徵しは到る處に見えた、彼女の眼は赤かつた。けれどそれは眠らなかつたせいで、泣いたせいではなかつた。彼女は泣いてはゐなかつた、彼女は泣けるやうな氣分ではなかつた。彼女は何かしたかつた。彼等の上に落ち來つた禍に對して苦鬪しようとした。精力的な、昔のミューザが再び起き上つたのであつた。彼女は憤慨で息詰らんばかりであつ

たけれど、憤慨してゐる暇はなかつた。どうしてバブリンに助力しやうか、彼の定命を和らげるためには、誰に訴へればよいか、さういふ事のほか何も考へられなかつた。彼女は直ぐにも行きたかつた……請願に……請求に。けれども何處に行かうか、何處に請願しやうか、何を要求しようか——これが彼女が私から聞きたいと思ふことだつた、これが私に相談したいことだつた。

私は先づ彼女に忠告した——氣長く待つてゐることを。初めのうちはたゞ待つてゐて、能ふかぎり事情を調べるほか爲すべきことはない。そして今事件が漸く始まつたばかりでほとんど何等の形もとつてゐないのに、何等か決定的な試みかするのは、まことに馬鹿げた不合理なことである。例へ私がもつと好地位に居て勢力のある人間であつたところで何等かの成功を望むのは不合理なのに、ましてやけちな役人の私に何が出來やうぞ？　彼女にしても、有力な友人といつては絶對に持つてはゐない。……これ等すべてを彼女に飲みこませるのは容易なことではなかつた……しかし遂に彼女も私の議論を理解した。彼女はまた、私があらゆる努力の無効なことを説くのは決して利己的な感情から出たのではないことを了解した。

『しかし、ねえ、ミューザ・パウロウナ』と私は彼女が到頭ぐつたりと椅子に腰を下したとき(その時まで彼女は今にもバブリンの助力に出掛けようとするかのやうに突つ立つてゐた。)言ひはじめた。

パラモン・セミョニッチはどうしてあの年齢でさう事件に捲き込まれたのです？　それに加はつたのは昨日あなた方に警告に來た人のやうな若い人達ばかりだと、私は確かにさういふ氣がするのですが……』

『その若い人達は私共の友達です？』とミューザは叫んだ。そして彼女の眼は昔のやうに閃いてそこいらを駈け廻つた。強い、抑壓すべからざる或る物が、いはゞ、彼女をたましひの底から湧き上るやうに見えた。……そして私は突然タルホフが彼女の事をいふ時に一度使つたことのある『新しい型』といふ詞を想ひだした。『事柄が政治的の信念に關する場合には年齢など何でもありません！』ミューザはこの政治的信念といふ詞を特に力を籠めて云つた。あらゆる彼女の悲しみの中にあつでも私の前にこの新しい、思ひ掛けない性質——敎養あり成熟したる婦人として、共和主義者の妻としての性質——に於て彼女自身を見せることが不愉快でないらしく見えた。……『老人の中にも若い人達よりもつと若い人が、』と彼女は言葉を續けた。『またより多く自分を犧牲になし得る人が居ります。……しかし今はそれが肝心な點ではありません。』

『ミューザ・パウロウナ』『私は言つた。『あなたは少し誇張してゐらつしやる。パラモン・セミョニッチの性質から考へて、私は豫てあの人があらゆる……誠實な衝動に同情を持つてゐることを信じては居

りましたが、しかし一面から見て、私はあの人をいつも常識に富んだ人と見て居りました。……あの人は露西亞に於ては陰謀なるものゝ決して實行され得ず、極く馬鹿げたものであることをようく曉つて居られたに相違ありません。あの人の地位あの人の職業をもつて……』

『えゝ、勿論』ミューザは苦味を含んだ聲で遮つた。『あの人は勞働者です。そして露西亞では陰謀に關することは貴族達に許されるばかりです……たとへば、十二月十四日のそれの如き……あなたの仰つしやる意味はさうなんでせう？』

『そんならば、今あなたは何を苦情を唱へることがあります？』と殆んど私の脣から出かかつた……けれど私は自分を抑へた。『あなたは十二月十四日の事件の結果が他のさうした企てを激勵するやうなものであつたと思ひますか？』と私は聲高に言つた。

ミューザは顏を顰めた。『さういふ事をあなたとお話してもはじまりません。』といふ意味を私は彼女の倦れた顏に讀んだ。

『パラモン・セミヨニッチの嫌疑はひどく重大なんですか？』と私は敢て彼女に訊ねた。ミューザは答へなかつた。猫の空腹じさうな荒々しい鳴聲が天井裏から聞えた。

ミューザはハッとした。『あゝ、ニカンダア・ウアウイリッチがあれを見ないでよこさんした！』彼女

は殆んど絶望的に呻いた。『夜中にあの人が、私共の恩人が……世界中で恐らく一番眞實な人が、どんなに亂暴に腕を捉まれたのですか、あの人は見なかつたのです、あの高尚な人が、あの人があの年齢でどんなに取り扱はれたか、どんなに無禮な詰問を受けられたか、どんな威嚇を受けたか……さうなんです、あの人達は威嚇しました……たゞあの人が勞働者だから威嚇したのです！　あの若い士官もきつと矢張り主義のない、ハートのない奴だつたんです、私以前にもあゝいふ奴に會つたことがあります……』ミューザは聲が續かなかつた。彼女は全身木の葉のやうに慄へてゐた。

彼女の長く仰へつけてゐた憤慨が到頭爆發した。古い記憶がたましひの一般的騷擾によつてかきたてられ表面に出て來て、それはまだ彼女のうちに生き〳〵してゐることを示した。……が、この刹那私の心に深く刻まれた確信は、あの『新しい型』がやはり昔と同じでやはり熱情的な衝動的な性質を保つてゐることであつた。たゞ彼女の身心を運び去る衝動がその青春の時代のと同じくない丈であつた。私が最初訪ねたとき、諦め、卑下、謙抑をとつたもの、また實際さうであつたもの、例へば光のない服從的な眸つきや、冷たい聲や靜穩や單純さ、これ等はすべて過去に、もはや言ふて返へらぬ事柄に、關してのみのものであつた。

今や現在が力強く彼女の心に訴へた。

私はミユーザを慰めようとした。私共の談話をもつと實際的な平面におかうとした。猶豫なく爲さねばならぬ事柄があつた。私共はバブリンが何處に居るか確實に知らなければならなかつた。それから彼のためにもミユーザの爲にも糊口の方法を立てねばならなかつた。これ等すべては仲々に困難なことであつた。必要なのは金よりも働きを見附けることで、それは誰も知つてる通り、前者に比してはるかに複雜な問題であつた。……

私は頭の中にさまざまの省察を充溢に蓄へてミユーザの家を辭した。

私は間もなくバブリンが要塞に居ることを知つた。

審問が始まつた……長びいた。私は毎週幾度かミユーザに會つた。彼女は夫と幾度か會見した。けれど丁度この悒鬱な事件が決定したとき、私は彼得堡に居なかつた。思ひ掛けない用事が私をして、否應なしに南部露西亞に向つて出立させた。私は旅先でバブリンが審問の結果放免されたことを知つた。若い人達が彼のことを嫌疑を受けさうにない人物だと見こんで、彼の家で屢々集會を催し、彼もその集會に臨んだことがあるといふのが、彼の罪の一切であるらしかつた。彼は、しかし、保安條例によつて西伯利亞の西部に流謫せられた。ミユーザも一緒に行つた。

『バラモン・セミヨニッチはそれを望みませんでした。』と彼女は私に書いて寄越した。『彼の考へによれば人は主義の爲にでなく單に他人の爲に自己を犧牲にしていゝ筈はないといふのです。しかし私はあの人に毫も犧牲だの何だのといふ問題ではないことを申しました。莫斯科であの人にあの人の妻になることを申しました時、私は心の中で考へました――永久離れてはならないのだと。それですから私共は私共の最後の日まで一緒に居なくてはならないのです。……』

四

――千八百六十一年――

それからまた十二年經つた。――一八四九年から一八六一年までがどういふ風に過ぎたか、露西亞に居た人は誰でも知つて居り、また永久に記憶するであらう。私一個の生活にもまた多くの變化があつたが、しかしそれについては述べる必要もない。新しい興味、新しい心配が代るがはるそれに入つて來た。……バブリン夫婦のことも、まづ後の方へ押しやられ、次で私の心から全然消えて了つた。それでも私はミユーザと通信を續けてゐた――但し非常に長い間をおいて、時々一年以上も彼女もしくは彼女の夫のどんな消息も聞かないで過ぎることがあつた。私は一八五五年に彼が露西亞に歸へる許可を受けたことを、しかし彼は運命が彼をそこへ投げつけ、そしてそこで彼が家庭を造り且つ休息所と活動の

地とを見出したところの、小さい西比利亞の町に、好んで留まることにしたことを聞いた。

　そして、聞けよ、そして視よ！　一八六年の五月末つかた、私はミューザから次の手紙を受取つたのであつた。――

『此の前手紙を差しあげてからもう隨分長くなります、最も尊敬するピオトル・ペトロウイッチ。私はあなたがまだ無事でおゐでかどうか、生きていらつしやるとしても、私共のことをお忘れになつてゐないかどうかを知らない位いでございます。けれどそれはどうでもようございます。私は今日あなたに手紙を書きたい氣持を抑へることは出來まん。私どもでは一切が今まで舊態を保ち續けて居りました。パラモン・セミョニッチと私とは私共の幾つかの學校のために始終忙しくして居りました。それ等は段々よい進歩を爲して居りました、其他パラモン・セミョニッチは讀書や通信やまた舊い信仰を持つて居る人々、僧侶、波蘭の流謫者などを相手に例の議論で寧日なきありさまでした。あの人の健康は大層ようございました。……私のも同様でした。ところが昨日のことでございます！　あの二月の布告文が私共の手許に達しました！　私共は長い間それを待ち望んで居りました。……しかしまだ私はそれが何事であつたか記述することが出來ません……あなたは私の夫をよく御承知です。あの人は不幸に遭つても少しも變つ

て居りませんでした。あべこべでした、あの人はより強くより精力的にさへなつて、鐵の様な意志を具へて居りました、けれどあれを見たときには、あの人も自分を抑制することが出來ませんでした！あの人の手は讀みながら顫へました、それからあの人は三度私を抱いて、三度接吻して、何事か言はうと試みました。――けれどもあの人は言へませんでした！　そして到頭激しく泣き出しました。私はひどく驚きました。そして突然あの人は叫びました。『ウラア！ウラア！　神よ皇帝を救ひたまへ！』それからあの人はこの通り申したのです！　それからあの人は言ひ續けました。『神よ、今や爾の僕を出で立たしめたまへ！』……それからまた『これが第一歩だ、他のものがこれに續かんけりやならん。』そして着のみ着のまゝで、帽子も被らずにこの大いなる報告を友人達に知らせに馳け出しました。ひどい霜で、大吹雪さへ催しかけて居りました。私は止めようとしましたが、あの人は耳にも入れませんでした。そして歸つて來たとき、あの人は體一面雪をかぶつて、頭の髪も頬も髯も――あの人は今頤の下に髯があるのです――そして涙も、實際凍りついて居りました！　けれどあの人は大層元氣で愉快氣で、私に吩咐けて手製の三鞭酒の栓を拔かせ、一緒に連れて歸つて來た私共の友人達と、皇帝、露西亞及び自由なる露西亞全國民の健康のために、飮みました。そして盃をあげながら、眼を地面に伏せて、あの人は申しました。『ニカンダア、ニカンダア、君聞こ

えるか？　もう露西亜には一人の奴隷も居ないのだぞ！墓の下で喜んで呉れ、私の仲間よ、』それからなほ多くのことを、あの人の『期待が充された』ことについて、あの人は申しました。もう後戻りをする惧は無いこと、これは一種の擔保或は約束であることなども申しました。……私はみんな覚えては居りません、けれど私は兎に角あの人のあんなに幸福さうな様子は長い間見なかつたのです。それ故私はあなたに手紙を書かうと決心致しました。あなたが私共が遠い西比利亜の荒野でどんなに歡び、意氣昂然として居るかを御承知になつて私共と一緒に歡んで下さるやうに。』

この手紙を私は三月の末に受取つた、五月の初めに一つ極く短い手紙がミューザから着いた。それは彼女の夫、パラモン・セミョニッチがあの布告文が着いたその日に風邪をひいて、それが肺炎になり、四月十二日に六十七歳で亡なつたことを報じたものであつた。彼女はそれに附け加へて、彼女は彼女に遺された仕事をやり續けて行く積りであることを、それがパモラン・セミョニッチの最後の希望であり、そしてまた彼女が唯一の律法であることを書いてあつた。

それ以來私はミューザに就て何事も聞かなかつた。

（巴里にて　一八七四年）

大正十一年三月十五日印刷
大正十一年五月八日發行

ツルゲーニェフ全集　第三卷

不許
複製

譯者　妹尾紹夫
編輯兼發行人　東京市日本橋區本銀町二丁目八番地　鷲尾浩
印刷者　東京市小石川區西古川町二十五番地　鈴木角藏
印刷所　東京市小石川區西古川町二十五番地　東山堂印刷所
發行所　東京市日本橋區本銀町二ノ八番地　冬夏社
電話本局三一一二番
振替東京四五四四六番

コ1002